PREXとわたし

歴代トップ役員、設立・運営に関与いただいた方々

太平洋・アジア調査団からPECC大阪総会へ
―天の時、地の利、人の和に恵まれて―

太平洋人材交流センター　顧問（前会長）　神田 延祐

太平洋経済協力会議（PECC）大阪総会の華やかな歓迎晩餐会のメインテーブルには、多くの顔見知りの各国代表が居並んだ。その光景を間近に見ながら、一九八四年春に海外調査団の準備を始めてから、この総会の開催にこぎつけるまでの四年間の出来事が走馬燈のように思い出され、感慨無量であった。調査団の井上、平木両副団長をはじめ団員の方々、総会の準備に献身的な動きをされた関西経済同友会事務局の皆さんも同じような思いだったのではないだろうか。当初から総会誘致に係わった一人として、実現までの経緯を簡単に記しておきたい。

今ではよく知られているように、この総会が大阪で開催されることになったきっかけは、一九八四年秋の関西経済同友会の「太平洋・アジア調査団」にある。この調査団の派遣によって関西でも環太平洋問題への関心が高まり、一九八五年度から関西経済同友会の中に環太平洋フォーラムが設けられた。こうした活動の中で、一九八五年秋頃、第六回のPECC総会は日本で開催する意向のあることがわかった。そこで関係者が相談のうえ、府、市、経済界などにも働きかけて誘致運動を行い、日本委員会としては大阪開催の方針が決定した。正式には一九八六年十一月の第五回総会で決定するというので、当時の高橋代表幹事や、山田さん、私などがバンクーバーまで出向いて、地元としては喜んで受入れる旨を申し上げてきた。

われわれとしては、総会に向けて日本委員会をある程度支援する必要はあるにしても、大阪開催の正式決定で役割はほぼ終わったのではないかと思っていた。しかし、逆にますます大変であることが徐々にわかってきた。まず、一つは資金面で、地元の負担がかなりにのぼり、企業にご無理をお願いすることになった。二つ目は人の面で、関西側事務局としての関西経済同友会の負担は誠に大きなものとなり、また関西電力、ダイキン工業の両社にもご迷惑をおかけした。三つ目は、これは今となってはうれしい誤算であったが、大阪総会の最終日に、地元に一時間の

一九九八年「太平洋・アジア調査団」カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所スカラピーノ所長を訪問（左端が神田顧問）。

プログラムが割り振られたことである。これを有効に使って関西を強く印象づけ、同時に関西の国際化を促進する足掛かりとするべく、実行委員会、作業部会で検討を重ねた。その結果、これを機会に一九八四年の調査団が提言した「経営と技術の交流センター」のようなものを設立することにし、その発表と、関西紹介のビデオを上映してはどうか、という方向が固まった。ビデオは如何に短時間で効果的に関西の過去、現在、未来を訴えるかという観点から議論を尽くしただけあって、大変好評を博した。途上国からの研修員受入れ機構を総会の場で発表するまでには実に多くの人々の貴重な知恵とアドバイス、そして努力があった。作業部会と事務局はアンケートの実施や国際協力事業団、海外技術者研修協会をはじめ自治体、企業へのヒアリングを行い、それらをもとに本当に実現できる機構とするために知恵を絞り、一九八八年の初めになってようやくコンセプトが固まった。

このコンセプトをもとに萩尾関西経済同友会事務局長を中心に関係方面へ精力的な根回しを行い、実行委員会、世話人会の了解も得られた。そして宇野関西経済連合会会長によって最終日の大阪セッションの場で、関西の産・官・学が連携して行う太平洋協力の具体的プロジェクトとしての「環太平洋経営・技術交流促進機構」の設立が表明された。この構想に対して、韓国の南氏、インドネシアのワナンディ氏など各国代表から、まさに熱烈な賛同と期待の言葉が相次いだのは皆様よくご存じの通りである。その場に身を置きながら、関西経済同友会が息長く太平洋問題に取り組み、中でも人づくり協力と情報交流の仕組みづくりに的を絞ってきたことに対する一応の決算が出たという感を深くした。ここまでこぎつけることができたのは、まさに天の時、地の利、人の和に恵まれたお陰である。

大阪の各界が協力した手作りともいえる今総会のホスピタリティには、各国からの参加者も感激の様子で、議論にも一段と熱がこもる風であった。お世話になった関係各位に改めて深く感謝申し上げるとともに、「環太平洋経営・技術交流促進機構」の設立と運営に対して、引き続き絶大なご支援をお願いする次第である。

（当時：関西経済同友会環太平洋フォーラム座長、三和銀行副会長）

神田顧問（前会長）は、関西経済同友会代表幹事のとき、自ら団長として「太平洋・アジア調査団」を派遣し、帰国後、太平洋・アジア地域の途上国の人材育成に日本が協力することが重要であり、「経営と技術の交流センター」のようなものを大阪に設立すべしとの提言をされました。その後、関西経済同友会に設けられた環太平洋フォーラム座長として、PECC大阪総会の誘致、運営と、PREXの設立にご尽力されました。PREX設立後は、副理事長、会長として、長年に亘り、PREXの運営に関与いただきました。

本文は、関西経済同友会環太平洋フォーラム座長として、関西経済同友会会報（PECC大阪総会特別号 百四十九号）に掲載された寄稿文です。PREX設立のきっかけとなった「太平洋・アジア調査団」、PECC大阪総会でのご功績を後世に伝えるために、設立二十周年記念誌に掲載させていただきました。

「太平洋・アジア調査団」のメンバーとの懇談の様子（右から二番目が神田顧問）。

PREX設立十周年記念シンポジウム後に柴田理事長と（右が神田顧問）。

関西の結晶「ＰＲＥＸ」

太平洋人材交流センター　会長（ダイキン工業 元副会長）　井上 義國

一九八八年、大阪で開かれた第六回太平洋経済協力会議（ＰＥＣＣ）総会で、関西の産官学の総意として、宇野収関西経済連合会会長から「途上国の人材育成に協力する機関（ＰＲＥＸ）」を大阪に設立する計画が公表された。

その四年前、一九八四年、関西経済同友会が派遣した「太平洋・アジア調査団（団長：神田延祐代表幹事、三和銀行副頭取）」が、その報告書の中で「世界経済の発展のためには、太平洋・アジア地域の途上国の人材育成に日本が協力することが重要であり、その機関を大阪に設立すべし」と提言した。これが「ＰＥＣＣ提案」の源であり、ＰＲＥＸ設立のきっかけである。

日本で初めて開かれるＰＥＣＣ総会の大阪誘致や総会の運営も、神田代表幹事を中心に関西経済同友会（萩尾千里事務局長）が担当した。

ＰＲＥＸの設立準備には関西の総力が結集された。設立準備委員長には、私のボス山田稔ダイキン工業社長が就任された。太平洋・アジア調査団に直接関係していなかった山田社長は

「ワシがなんでこんな役せなあかんのや？」

「そう言わんと、お力を貸してください。このプロジェクトの発端は一九七二年、社長が関西経済同友会海外協力委員長の時、団長になってＡＳＥＡＮ諸国を歴訪した東南アジア社会経済調査団（私も参加）の提言『経済協力に新しい秩序を』にもあるのですから」

「よっしゃ、わかった」

と募金活動の先導役をつとめられた。私もその仕事に携さわった。ＰＲＥＸの設立趣旨に賛同された多数の企業、地方自治体から多額の拠金をいただき、基金は目標を上廻る三十五億円が集まった。関西の経営者と自治体の首長の志の高さに感銘を受けた。

一九八四年に神田代表幹事から関西経済同友会太平洋委員長を命じられ、「太平洋・アジア調査団」を企画し、副団長として参加した私は、ＰＲＥＸの設立提案から設立決定のお膳立て、基金募集など設立にいたるすべての過程に関わってきた。

一九八三年、ドイツミュンヘン市役所前にて、故山田稔初代理事長（ダイキン工業社長）と井上会長（右）。

一九八九年、ＰＲＥＸ設立にむけたアセアン諸国へのニーズ調査。クアラルンプールにて。右から二番目が井上会長、三番目神田顧問。

一九九〇年ＰＲＥＸ設立、私は一九九五年に山田稔理事長の後を継ぎ、第二代理事長を、二〇〇〇年に神田延祐会長の後の第三代会長を仰せつかり、その運営に十五年間携わってきた。

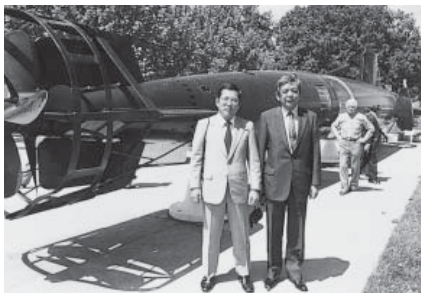
この二十年間、ＰＲＥＸは国際情勢の厳しい変化に対応しながら、宇野收初代会長をはじめ先輩幹部のリーダーシップよろしく、目論見以上の成果を収めてきたと思う。

ＰＲＥＸは数え切れないほど多くの人々の力に支えられて設立され発展してきた。いわば、関西の総力をあげて作られた結晶である。ＰＲＥＸが「関西にとっても、途上国にとっても、なくてはならない存在」として、健全な発展を続けるために今後とも変わらぬご支援をお願いするものである。

一九八四年「太平洋・アジア調査団」

①「太平洋・アジア調査団」出発。右から神田顧問（当時：三和銀行取締役副頭取）、井上会長（当時：ダイキン工業常務取締役）、故大阪大学蝋山教授。

②インドネシアからシンガポールへ。サントリー平木常務取締役と井上会長（左）。



③キャンベラ戦争資料館に展示された旧海軍特殊潜航艇の前で、藤田専務理事（当時：ダイキン工業総合企画室課長）と井上会長（右）。

④オーストラリア国立大学太平洋研究所、Ｄｒドライステール氏他とディスカッション。正面がドライステール氏、右端が井上会長。

PREX設立二十周年にあたって

太平洋人材交流センター　理事長（東洋紡績 名誉顧問）　柴田 稔

一九八〇年代後半、日本のＯＤＡの一環を担うべく民間の資金で当組織を立ち上げることを発意し、非常に困難な経済情勢の中、関西各企業の同意を得て三十五億円余の基本財産を集めることに努力された方々、また運営を担当する貴重な人材を派遣いただいた企業、また種々ご支援をいただいた地方公共団体、実際に仕事を発注して下さったＪＩＣＡ、ＡＯＴＳ等の政府機関など本当に多様な方々のご支援により今日を迎えました。

さて、日本のＯＤＡは長年にわたり先進国中金額ベースで一位を続けてきました（現在は第五位）。当初は発展途上にあったアジアが主体で貿易投資環境整備のための湾岸、道路整備、工業地帯開発整備などのハードインフラ、これを運用する保守要員の育成が主体でしたが、これらの国々の経済の成熟度が上がるにつれ、対象地域も中国、中南米等へ広がり、現地産業人材の育成が主体となり更にグローバル課題対応として環境保全、省エネルギー、知的財産対応など規模が拡大、国際協調の方向に向かいつつあります。こうした中、私どものＰＲＥＸはアジア・太平洋地域を中心とする途上国等の経済、社会の発展に資するための人材育成事業およびこれら諸国との経済、文化、人的交流事業を推進し、国際相互理解の促進と国際協力の推進に寄与することを目的としていることは誠に現在の日本の立場にぴったりであると思っています。私も理事長職を長年務めさせていただいておりますが、毎年多くの研修員を迎え、また現地研修で先生方にご出張いただき種々の講義や実習を行なってきましたが、研修員の方々は非常に熱心に情熱をもって勉強し、成果を活用していただいていると聞いております。研修が終わったらそれで終りではなく、各国に同窓会を設け、フォローもしっかりやっております。同窓生の中にはそれぞれの国の重要なポストに就いて活躍している方も多く、また皆さんが親日的な感覚を持ってもらっている様で、誠に喜ばしいことです。

尚、ＰＲＥＸは企業からの出向者とプロパー社員の約半々の構成となっていますが 特筆すべきことは、プロパー社員の大部分が女性で、発展途上の辺ぴな地域にも出張し、大活躍してくれていることです。日本の社会で女性重視と言われ続けていますが、ＰＲＥＸが先頭をきって実行しているのではないかと誇りに思っています。

しかし悩みもあります。それは現在の低金利がいつまで続くのかということですが、我々は健全な財政を維持しつつ当初の目標に向かって邁進する覚悟でおりますので、ＰＲＥＸのご支援宜しくお願いいたします。

「関経連アセアン経営研修」に参加したアセアン諸国の経営者とともに（中央が柴田理事長）日本企業の経営について講義した。

PREXの二十年をふりかえって

太平洋人材交流センター　副理事長（関西電力 相談役）　藤 洋作

PREXが設立二十周年を迎えましたことを、大変嬉しく存じます。これも多くの方々のご支援、ご協力と、運営に当たる皆様のご尽力の賜物と、心から感謝を申し上げます。

これまで、私どもが協力した国・地域は、アジア・太平洋地域を中心に百三十一に上り、研修員は一万三千名を超えています。同窓会を組織し、研修で得た知見を蓄積している国もあるなど、これらの国々の発展に少なからず貢献できているものと思っていると同時に、目に見える形で活動の遺産として受け継がれていることにいささかの自信を深めている次第です。これも二十年前、関西経済界が多額の資金を出し合い、PREXを設立されたおかげであり、その先見性の高さに感服するとともに、私どもといたしましても、活動をさらに活性化していくべき責任を感じています。

さて、将来に目を転じますと、世界の持続的発展において、地球環境問題への対応が大きな課題となっています。アジア・太平洋地域においても今後二十年、この問題が重要性を増すのではないかと考えており、PREXでも環境技術に研修の対象を広げています。

とりわけ重要と考えていますのが、発電時に二酸化炭素を排出しない原子力発電の技術者の育成です。同地域では多くの国々で、原子力発電所建設の機運が高まっていますが、原子力発電所を安全に運営していくためには、高い技術を有する人材の育成が急務です。そのためには、世界トップレベルの技術を有するわが国が、官民を挙げて協力していくことが必要だと考えています。

もう一つ重要ではないかと考えていますのが、次代を担う子供たちへのエネルギー環境教育です。地球環境を守るためには、一人ひとりがエネルギーの大切さを理解し、できることから意識して取り組んでいくことが大切です。そうしたなか、エネルギーや環境に関して子供たちが楽しみながら学べる教育を行えば、その内容が子供を通じて各家庭に伝わり、多くの人が地球環境を意識して行動するようになりますし、将来、子供が成長すれば、エネルギーや環境について正しい知識を持った大人たちが増えることにもなります。

今後とも世界の経済発展のみならず、わが国と世界各国との平和の架け橋として貢献できるよう、力を尽くしてまいりたいと存じております。皆様方の一層のお力添えをお願い申し上げます。

二〇〇九年一月、外務大臣表彰受賞記念パーティにて。左から住友電工川上名誉顧問、PREX柴田理事長（東洋紡績名誉顧問）、PREX藤副理事長（関西電力相談役）。

経済人の『志』で生まれた官民協力モデルの国際貢献

大阪国際会議場　社長（太平洋人材交流センター 監事）　萩尾 千里

日本経済がバブルに浮かれていたころ。「会社は誰のものか」という議論がよく行われた。当然「会社は株主のものだ」という結論を導きたいためである。それまでの日本の会社は労使一体の「日本的経営」の美名のもとに株主軽視の経営が常態化していた。株主復権を求める主張もあながち否定すべきではないが「会社は株主のもの」との考え方は明らかに間違っている。会社の発展を支えている人達は株主だけではない。従業員、消費者はじめ多くのステークホルダーがいるからだ。そんな時代より少し前、まだ日本経済と企業経営が厳しかったころ、関西経済同友会の代表幹事を務めたダイキン工業の山田稔社長（当時）と三和銀行（現三菱東京ＵＦＪ銀行）の神田延祐副頭取（当時）が提唱したのがアジア・太平洋地域の途上国に対する人材育成構想だった。日本は敗戦の憂き目から立ち上がって、世界に冠たる経済大国になった。その恩恵を途上国の発展に貢献したい、という経済人としての『志』にあった。新聞記者を辞め、関西経済同友会に誘い込まれた私は、その実現の取り組みが初仕事となったが、この経済人としての『志』がなかったら現在の「太平洋人材交流センター」は実現していなかったことは確かである。

その『志』をしっかり受け止めて具体化への原動力となったのは現会長の井上義國ダイキン工業副社長（当時）だった。同志として推進した私達も何度となく頭をぶつけながらのほふく前進だった。設立の過程で外務省の高級幹部から「そんなものをつくるより金を集めて難民問題に寄付したらどうか」「三十億円の基金を集めようという意気込みは買うが、十分の一も集まれば良い方」と茶化されたりもした。結果は目標以上の募金を達成して発足した。その間、当時の国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の斉藤正次大阪国際センター所長、海外技術者研修協会（ＡＯＴＳ）の雨谷弘夫関西研修センター館長、国際開発ジャーナルの荒木光彌社長には大変ご協力いただいたのは忘れ難い想い出である。

途上国への研修はすでに一万人を超えた。途上国からは大変な感謝をされている。民間事業としてこれだけの海外貢献の事例はまずないだろう。このセンターに触発されてＪＩＣＡ、ＡＯＴＳの大阪センターが新しく建設された。その官民協力のモデルでもあるＪＩＣＡの大阪センターが事業仕分けでなくなろうとしている。とんでもないことである。『アジアの中の日本』と口で言うのは易しい。アジア太平洋はとりわけ多様な文化、価値観が入り混じった地域である。汗を流すことなく信頼関係が築けないことぐらい最低限、肝に銘じてもらいたいものである。

一九八九年、ＰＲＥＸ設立にむけたアセアン諸国へのニーズ調査。左端が萩尾社長（当時関西経済同友会常任幹事・事務局長）。

人材の養成と国の盛衰

住友電気工業　名誉顧問　（太平洋人材交流センター 理事）　川上 哲郎

ＰＲＥＸが設立された一九九〇年は、世界史にとって大転換の時期であると共に、日本経済にとっては成長の終わりと停滞（デフレ）の始まりのときでもあった。この年の国民一人当たりＧＤＰは、四万ドル弱、米国とならび世界ナンバーワンのピークをつけたが、以後今日まで低落を続けた。

一方、ＰＲＥＸが中堅リーダーの養成に注力してきたアジア・太平洋地域は、過去二十年間目覚ましい成長を遂げ、今や世界経済の牽引力の役割を負わされている。ＰＲＥＸで学び、知を修得した中堅マネージャーは、それぞれの国・地域の発展に貢献しながら、各地で同窓会をつくり、相互の親睦と啓発に努めてきた。ちょうど日本が一九五〇年から四十年要して歩んだ工業化への道程を、半分の二十年で達成しながら、生産性の向上によって更なる繁栄を目指しているのである。

猪木武徳教授によれば、世界を驚かせた戦後日本の経済成長をもたらした大きな要因として、真面目な中堅勤労者が、真剣に先進諸国の管理技術を学び、実践したことによって、年々生産性が改善、向上したことを指摘している。二〇〇七年物故した故アベグレン博士は、日本経済を支えた企業の強さを、日本の「伝統文化」に求めていたが、逝去の直前にはそれが崩れつつあることを憂えていた。

昨秋十五年振りに、日本においてＡＰＥＣの総会が横浜で開催されたが、前回の「大阪」とは経済環境が大きく変わり、各国の関心も量的成長よりも質的充実に移ってきたと言ってよい。換言すれば、環境に優しい先端技術、倫理性の高い統治組織と制度、国際分業の新しい枠組みと協力関係の構築等であり、従来のカリキュラムに加えて、こうした観点に立脚した人材育成の支援プログラムも策定する必要があろう。

今世紀に入って、情報通信技術の進歩、特に画像電送の発展は目覚ましく、これまでの知識伝承、教育のあり方を変えつつあると共に、社会の基本たる道徳、哲学の再構築を必要とする時代に入ってきた。昨秋のＡＰＥＣを契機に浮上してきたＰＴＴ加盟問題は、今後のわが国の経済社会のあり方を決定することになる。

昨夏、ＮＨＫのＴＶで放映されたハーバード・白熱講座のマイケル・サンデル教授の「これからの正義」の講義と討論は、今後の日本の教育のあり方に一石を投ずることになろうかと思う。

この機会にＰＲＥＸの次の二十年のあり方を、是非検討して貰いたいと念じている。

一九九一年、ＰＲＥＸ初の現地研修で企業経営理念について講義する川上名誉顧問と質問する研修員（マレーシア）

PREXと私

パナソニック　副会長（太平洋人材交流センター 理事）　松下 正幸

設立二十周年、誠におめでとうございます。

一つの事業が二十年継続してきたのは、人、もの、カネが揃っていることはもちろん、研修員の派遣元である当該国も含め、関西企業の温かい支援が存在し続けてきたからだと思います。さらに、その基盤を進化させるために、公明正大に幅広く関係者の意見に耳を傾けながら、志高く途上国の進歩発達に尽力されてきた事務局員の皆様、企業からの出向者の皆様の汗の結晶であると確信します。

私自身もＰＲＥＸの理事を務め早十年が過ぎました。すでに百三十一カ国から一万三千人（内、海外研修九千人）以上の研究員を受入れていただいたことに改めて敬意を表したいと思います。私自身も直接関わっている「アセアン経営研修」も三十年続いてきました。この研修の発端は一九八〇年に関西経済連合会が初のアセアン諸国に調査団を派遣したのがきっかけとなって始まりました。この調査団の団長を務めたのが私の父である松下正治であったことは、感慨深いものがあります。

しかし、順風満帆に思えるＰＲＥＸも日に新たな事業を生み出す必要があると感じているのは私だけでしょうか。一つの機関からの受託研修が大半を占める構造は、危機管理の観点から少し難点があると感じます。経営環境の変化と共に事業のあり方も革新していく実行力が求められます。得意とする自主企画提案を他の機構や企業に積極果敢に売り込んでいく開拓営業の機能が必要だと思います。次の二十年に向けた更なる挑戦を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

「関経連アセアン経営研修」に参加したアセアン諸国の経営者とともに。中央が日本企業の経営について講義した松下副会長。

PREXの重慶プロジェクト

神戸都市問題研究所　理事長　新野　幸次郎

関西経済連合会が今迄なしとげたことは色々ある。しかし、中でも今年二十周年を迎えたＰＲＥＸの偉業と業績はその最たるものであると言ってよい。私は今でも当時の会長宇野さんが「関西財界は口先きだけではいけない、みんなで力を合わせて歴史に残る事業に着手しなければならない。太平洋に面している発展途上の国々の経済発展に役立つ人材育成に寄与するという仕事は正にこの課題に応えるものである」といった趣旨の発言を高々となさったことを今でも忘れない。しかも、私は縁があってか、このＰＲＥＸ設立二年目から交渉がはじまった重慶プロジェクトに携わることになった。私自身は一九九三年から二年間この日本側委員会の代表として現地に赴き、経済開発にする講演会でお話をしたこともある。

私はそのとき、経済学では周知の生産の三要素論をとりあげ生産高を増やすためには、土地、労働、資本を増やさねばならないが、この三つの生産要素は同じでも、産業組織、すなわち、企業の組織、産業競争関係および産業と国家との関係を変えると、生産高を飛躍的に増やすことができるというＡ・マーシャルの理論も紹介した。時あたかも鄧小平さんが、改革開放を唱えたあとであり、いわゆる「先富論」が人々の胸にしっかりとたたみこまれた頃であった。一九九四年にはその成果である「中小企業振興研究報告書」を発刊、シンポジウムを大阪市で開催した。重慶プロジェクトは、私が代表を辞したのちの一九九四年以降も社会開発共同研究日本委員会をもち、翌一九九五年には、「社会開発研究報告書」を発刊、最終報告書を重慶市政府に提出するとともに、同じように講演会を現地で開催して、共同研究を締めくくることになった。こうした活動に対して一九九四年には、重慶市政府からＰＲＥＸに栄誉賞が授与されたことは周知の通りである。

しかも、重慶市との関係はこれで終わったわけではない。その後も、毎年今日に至るまで重慶市からも色々な階層の方々がＰＲＥＸを訪問され、ＰＲＥＸでもいくつかの研修コースを設けるなど重慶プロジェクトは持続していると言ってもよい。私は、かねがね、ＰＲＥＸの果たした役割を高く評価し、みなさんに宣伝してきたが、私が最初に携わることになったこのプロジェクトを、かつて神戸大学大学院で私と研究を共にした龍谷大学の松岡憲司教授がいまも担っていることに不思議な縁を感じている。

PREXシンポジウム「中国内陸部の経済社会発展の現状と将来」で基調講演する新野理事長。

PREXの皆さまへお祝いとお礼

大阪観光コンベンション協会　会長（サントリー 元副社長、日本芸術文化振興協会 前理事長）　津田 和明

二十周年のお誕生日をお迎えになり心からお祝い申し上げます。

二十年前は、大阪で「花と緑の博覧会」が開かれた年でした。日本企業は好調で、世界でも、経済大国と言われていました。日本の繁栄をアジア全体に広げて行こう。その為にはそれぞれの国で中核となる技術者や経営者を育成しようということになりました。当時の関西財界の有力者であり、明るいお人柄のダイキン工業の山田稔さんや、三和銀行の副頭取をされていた神田さん、サントリーの佐治敬三さん達が中心になって、太平洋人材交流センター（PREX）がスタートしたのです。

企業を訪問して資金だけでなく、人材面でも協力をお願いして、実務面で支えたのは、ダイキン工業の専務であった井上義國さんです。井上さんと仲良しであった関西経済同友会OBも熱心に協力しました。

私も度々打ち合わせ会に出席したのですが、残念ながら中身は殆んど忘れてしまいました。覚えているのは二次会で北新地へ行って、山田稔さんに演歌の歌唱指導を受けたことです。そのお陰で「野風増」や「川の流れのように」は二十年間歌い続けています。

現場で研修事業をされている方たちは真剣そのものでした。アジアの発展に貢献するという使命感に燃えて、研修員を指導しました。その思いが伝わったのでしょう。研修は好評でインドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナムに引き続いて中国、インド、暫くするとロシアや中近東、南米の国からも加わり盛況になりました。

日本に呼ぶだけでなく、講師を派遣して行う現地研修も行われました。講師は企業で海外勤務をされていた経験者なので、現地の言葉や事情に詳しく、研修員には好評でした。

このようにして、現在まで研修員は約一万三千名です。これだけの卒業生と関西の人が作り上げる絆は今後の日本に貴重な財産です。東南アジアと日本の間には戦後六十年たっても、時にはわだかまりが残っていますが、このような市民レベルでの交流を続けることによって雲散霧消するでしょう。

私はこのような交流を二十年間も続けていただいた、PREXのメンバーと講師の皆さんに心から感謝と敬意を表します。

一九九七年、PREX常任幹事会で座長を務める津田会長。

原点＝神田調査団

元三和銀行　松下 滋

日米のリーダーが中曽根首相、レーガン大統領の時代のことだから、四半世紀以上も昔の話になる。一九八三年夏、私（三和銀行調査部次長、当時、以下同じ）は、蝋山昌一君（大阪大学経済学部教授）と意見交換を重ねていた。四月に関西経済同友会の代表幹事に就任した神田延祐氏（三和銀行副頭取、任期二年）のスタッフとして、次年度の事業計画の骨子作りが急がれていたからである。議論の中で蝋山君から、太平洋を囲む国々へミッションを派遣し未来へ向けた意見交換をしたらどうか、という切り口が提示された。「太平洋・アジア調査団」の実行は一九八四年秋。神田団長以下二十三人・随行記者五人、米、加、豪、インドネシア、シンガポール、香港、韓国七カ国十一都市を三週間かけて訪れ、政財界、官僚、学者、ジャーナリスト達と意見交換、日本に対するニーズを探った。その過程で人材育成、交流、教育・研究といった一群のキーワードが浮き出てきた。

神田ミッションに関わって、常に念頭にあったのは、次の五点である。第一、先取り精神にかなっているか。第二、建設が決まった関西国際空港の活性化につながるか。第三、全国マターとして認知されているか。第四、タイミングは適当か。第五、提言の出しっぱなしに終わらず後につなげるにはどうしたら良いか、である。第三について、神田さんの動きは周到だった。太平洋地域のビジネスに強い関心を持つ五島昇氏（日本商工会議所会頭）に面談。「ダイキン工業の山田稔さんはお元気ですか」と切り出しながら五島さんの対応は好意的だった。東京におけるもう一人のキーパーソン大来佐武郎氏（ＰＥＣＣ日本委員会委員長）は「経済の地、大阪が動くことは大いに結構」と賛同された。これが、後々一九九五年のＡＰＥＣ大阪大会の開催につながる。第四について、私は、日比谷のプレスセンターに顔を出しながら、英誌「Economist」などがPacific basin（太平洋なる水盤）を巡る地域の未来をどのように見据えているかの確認に努めた。調査団趣意書にある「loose-knit-unity 緩やかな連帯」は、ファイナンシャルタイムズの記者のアドバイスによる。帰国直後であったか、米シュルツ国務長官が太平洋地域に対する強い関心を公式表明した。このニュースに接した時、時宜にかなったミッションであったと、安堵した。

第五の、後世への遺物については、ＰＲＥＸの開設とその後のフォローに関わった方々に感謝するばかりである。このかけがえのない公共財が、二十周年を越えて輝きを増すことを願ってやまない。

一九八四年、「太平洋・アジア調査団」でアジアを訪問。左から、三和銀行　松下調査部次長、ダイキン工業総合企画室　藤田課長（現ＰＲＥＸ専務理事）、大阪大学経済学部蝋山教授。

研修委託元機関・関係機関・自治体・出向者派遣元企業

かけがえのないパートナー

国際協力機構（ＪＩＣＡ）大阪国際センター　所長
酒井 利文

設立以来、途上国の人材育成に、また、日本の国際化への多大なご貢献に深い敬意を表すと共に、ＪＩＣＡの事業を支えてくださったことに深い感謝の念をお伝えしたいと思います。

さて、途上国発展の根幹となる人材育成は、最も重要且つ基本的な命題であります。それを達成するために様々な取り組みがなされていますが、とりわけ途上国の人材を日本に招き、わが国固有の優秀な人材リソースと途上国の開発ニーズをマッチングさせて企画構成された本邦研修は、他国に類を見ないユニークな人材育成スキームであり、同時に親日家を育て、途上国と日本、あるいは途上国相互の人材ネットワークを創出するという点で非常に意義深い事業といえましょう。

ＰＲＥＸとＪＩＣＡは設立当初からかけがえのないパートナーとして、途上国の中小企業振興、産業開発、経営管理等の分野でより良い本邦研修の実現に向けて、共に歩んでまいりました。私たちＪＩＣＡ大阪にとって、ＰＲＥＸの高質で個々の参加者の旺盛な意欲を駆り立てるように設計された研修コース群は、正にフラッグシップ事業であり、わが国の成長戦略にとって欠くことのできない貴重な財産であると確信しております。

関西経済界の深い懐に期待

国際協力機構（ＪＩＣＡ）兵庫国際センター　所長　伊禮 英全

「コンクリートから人へ」という民主党政権の政策の下で、不況の中とはいえ、いや、むしろ不況の中だからこそ、関西経済界の懐の深さを示していただき、ＪＩＣＡ大阪やＪＩＣＡ兵庫と共に途上国での人づくりにご支援を賜りたいと考えております。

ＪＩＣＡ兵庫では、二〇〇七年度から二〇〇九年度まで、ＰＲＥＸと連携して「資源循環社会における中国の都市環境整備システムの構築」というタイトルで「草の根技術協力事業（地域提案型）」を実施いたしました。タイトルに示されているように、関西の経済界と一体となった、非常にＰＲＥＸらしいユニークな協力内容であったと記憶しております。

一方、世界的なレベルで見ても、現下の経済状況は残念ながら安定した成長基調に転じる気配が見えません。

そうした閉塞感の中でも、ＰＲＥＸが地道に取り組んでおられるアジア・太平洋地域をはじめとする途上国への人材育成支援は、これらの国々において継続的な社会と経済の発展のために必要不可欠なものであり、今後もいささかもその重要性が薄れることはない、と考えております。

「ＪＩＣＡ草の根技術協力事業（地域提案型）」で来日した中国の研修員。

PREXでの出会いと私

海外技術者研修協会（AOTS）前理事・関西研修センター 館長　吉原 秀男

私のPREXでの出会いと思い出は三つに要約される。

共通の同窓生：経済危機真っただ中のタイに一九九八年駐在、ちょうどバンコクで近隣の経営幹部を招いての海外研修で、シンガポールのウィリアム・オンさん（当時PREXとAOTS同窓会の会長）から声をかけられた。同氏は残念ながら数年前に逝去されたが、これをきっかけに相互交流は進み、彼らのルーツの広州まで同行したことがある。

遠隔研修：このころ当時の森本国際交流部長に遠隔研修の意義を教えていただき、バンコク事務所をISDNの使える現事務所に移し、日本語研修や現地事例を紹介する研修などに応用した。上述の研修も大阪、クアラルンプール、バンコクを繋ぐ研修で、忙しい各国閣僚や企業幹部を一堂に会する効率的で効果的な遣り方であった。

大阪：PREXと私の縁は、四年前に私が大阪在のAOTS理事に着任して益々深まった。PREX NOWでの個々の研修の意義と苦労、成果などの紹介で、PREX役職員や大阪企業の方々の貴重な経験・ノウハウと国際協力にかかわる情熱を理解した。また国際シンポジウムは、時代と環境を的確に反映して啓発いただいている。

今、日本のODA支援が世界に見えにくくなっているのは残念であり、日本のものづくり・人づくり紹介や相互理解・交流について、本来ならばPREXやAOTSももっと役割があると思っている。この機に伝えたいのは、「培ってきた人との絆」の尊重であり、PREXの内外リソースは素晴らしく今後さらに伸ばして行っていただきたい。

シンガポール同総会幹部と彼らのルーツの広州を訪ねる（右から三番目が筆者）。

一朝一夕にはなしえない事業

大阪商工会議所　理事・国際部長　上月 康嗣

PREXの設立二十周年を心からお祝い申し上げます。PREXにおかれては、関西における外国人材育成、国際交流の拠点として多大な貢献を果たされておられることに深く敬意を表します。

さて、PREXの活動を通して、外国人の「関西ファン」が数多く誕生しました。私自身もPREXの依頼で、海外からの研修ミッションに対し、関西経済の概要や商工会議所の役割、中小企業支援事業などを説明させていただく機会が何度かありました。こうした機会を通じて、より多くの外国人に「関西ファン」になっていただくことが極めて重要であり、このファンづくりこそが、PREXの最も重要な役割の一つであると思います。さらにPREXでは、研修員の同窓会づくり、ネットワーク化をはかっておられ、心強く感じております。グローバル経済化が一段と進展する中、今後、関西企業が海外展開を一層強化するときには、こうした外国人ネットワークの利用拡大が重要な課題になってくるのではないか、と感じているところです。

人づくり、国際交流による相互信頼の醸成は、一朝一夕にはなしえず、継続していくことが肝要であります。さらなる二十年に向けて、PREXの益々のご活躍、ご発展を期待いたします。

関経連アセアン経営研修をともに実施して

関西経済連合会　参与・シニアカウンセラー　青柳 明雄

二十一世紀まで残すところ十カ月を切った一九九九年三月、マレーシア・クアラルンプールのホテルの会場は人々の熱気で湧きかえっていた。「関経連アセアン経営研修」の二十周年記念行事を大阪、クアラルンプール、それにタイ・バンコクを衛星やビデオカンファランスシステムで繋ぎ実施した時のことを、ついこの間のことのように思い出す。この大きなイベントを成功裏に成し遂げることができた背景に、ＰＲＥＸの皆様の絶大なご尽力があったことは言うまでもない。そこには企業から出向されていた方も含めたＰＲＥＸの皆様、関西経済連合会のスタッフ、それにもちろん現地のご関係の方々が一つの目標に向けて一丸となって取り組めたというパワーが結集していた。

一九九七年の、歴史に残る通貨危機から未だ完全に回復していなかったアジア諸国の政府首脳は、厳しい状況にも拘らず「今だからこそ人材育成が重要なのだ」と認識を新たにされ、このイベントに於いてもマハティール首相やタイのスパチャイ副首相にもご発言いただくことができたのである。

今、世界経済を牽引するところまで成長してきたアジア諸国は、実に真剣に人材育成に努力されてきた。ＰＲＥＸのコツコツと積み上げられてきたご努力の成果が今、各国で花開き始めていることを実感するのは私だけでは無いと思う。

「関経連アセアン経営研修」や、同じく海外研修を通じて私自身も人的ネットワークを大きく広げることができた。これも偏にＰＲＥＸのお蔭である。二年前に大阪で再会したタイの元投資庁長官サティット氏とは海外研修のテレビ会議などで何度もお会いしていたこともあり、まさに友達感覚で話ができた。このような人と人をつなぐ重要な役割を担っているＰＲＥＸが今後ますます発展され活躍されるよう、心から願ってやまない。

さらに、ＰＲＥＸで研修をうけられたアジア各国・世界各国の方々が各々の国・地域で大活躍されることを願っている。

ＰＲＥＸシンポジウム「新時代における人材交流―関西の魅力を生かした新しい渦の創造」でパネリストとして「関経連アセアン経営研修」を事例に人と人をつなぐＰＲＥＸの役割について述べる青柳氏（二〇〇七年三月）。

国際貢献を日本の文化に

関西生産性本部　専務理事
辻本 健二

ＰＲＥＸは、この二十年間、アジア・太平洋地域の国々の行政や企業の幹部育成に大きな貢献をしてこられました。五年前の関西生産性大会での、緒方貞子さんの「国際貢献を日本の文化に」との講演は、参加者に大きな感銘を与えましたが、ＰＲＥＸが二十年前から、関西独自に、民間の手でそれを実践してこられたことに敬意を表する次第です。

ＰＲＥＸが実施している研修の柱の一つが「生産性」です。第二次大戦の廃墟から立ち直り、いち早く先進工業国入りした日本のバックボーンになった「生産性向上運動」、それを我々も学びたいと、アジアのみならず、中近東、中南米、最近はアフリカからの研修員も増えています。

「生産性」研修は、経営計画、マーケティング、生産管理、原価管理、ＱＣ活動などの経営管理の講義と、企業を訪問して実際に目で確かめるという構成になっていますが、当本部が担当する「生産性概論」では、〝労使の信頼と協力関係の構築こそが、生産性向上のカギ〟と訴えています。経営者と社員が信頼関係で結ばれ、協力して課題に立ち向かう企業をつくりあげることができれば、どんな困難にも立ち向かえます。

ＰＲＥＸの研修は、日本の文化を世界に広める役割も担っています。これからの益々のご発展を期待しています。

関西財界のヒット商品〝もっと輝き続けろ〟

関西経済同友会　常任幹事・事務局長　斎藤 行巨

関西財界が過去三十～四十年間に生んだ〝ヒット商品〟といえば一にＰＲＥＸ、二に多言語放送局のＦＭ ＣＯＣＯＬＯ、というのが私の持論である。両者とも本来、官が担ってもおかしくないほど公益性の高い事業を行っている。関西財界の志の高さが表れている。

ＰＲＥＸが設立された一九九〇年当時、私は毎日新聞経済デスクだった。関西経済同友会が開催地事務局となって勧めた第六回太平洋経済協力会議（一九八八年）で宇野収・関西経済連合会会長（当時）が人材養成協力のための組織を提案し、その具体化のために関西財界をあげて資金集めに奔走していた。

最初は五億円集まるか、十億円集まるか、と心配していたが、最後は三十億円の目標を掲げたところ、なんと三十五億円も集まった。これには驚いた。

それから二十年、ＰＲＥＸは一万三千人もの途上国の中堅幹部を養成するなどの実績を積んできた。生みの親を自負する関西経済同友会の事務局長としてはもちろん、ずっと見守ってきた一個人としてもこんなにうれしいことはない。

どんな組織であれ、できてから二十年もすると、マンネリ化や制度疲労が起こる。それを防ぐには絶えざる革新が必要だ。グローバル化と情報通信技術の進展で、途上国側のニーズは高度化し、幅も広がっていると思う。ＰＲＥＸはそれらに応える研修内容の充実を図る必要があろう。個人的には、近江商人の「三方よし」など古くからある日本の経営哲学など他ではできない研修をしてほしい。

ＪＲ大阪駅北側に広がる「北ヤード」の一期工事が進んでいる。ここに留学生など国際交流に関するワン・ストップ・サービスの拠点ができればいいと常々考えている。大阪、日本はもっと外に開かれた都市、国でないとグローバル化が進む地球社会で存在感を示すことができない。ＰＲＥＸがワン・ストップ・サービス拠点の中核組織になればなんとすばらしいことか。ぜひ挑戦していただきたい。

「伝統は革新の連続」といわれる。ＰＲＥＸが絶えざる革新に挑戦し、三十周年、四十周年とよき伝統を積み重ね、もっともっと輝き続けることを期待している。

「ＪＩＣＡ中央アジア経済団体強化研修」では毎年関西経済同友会を訪問し経済同友会の活動について講義。斎藤事務局長（左）と研修員のキルギス大統領付投資会議事務局長。

四十周年への期待

関西社会経済研究所　代表理事
武田 壽夫

ＰＲＥＸは、アジアに近代化と持続的成長への機運が高まり、我が関西はそのようなアジア・太平洋地域の発展にも貢献する、共創的な関係づくりを目指そうとするたぎりたつ思いの中から生まれたと思っています。

振り返ると、それは韓国やシンガポール等の、いわゆる「アジア四小龍」と呼ばれた国々や地域が相次いで工業化への離陸に成功し、その波が大きくＡＳＥＡＮ、中国へと広がり始めた時代です。同時に、これらの経済では、裾野を支える経営管理や中堅企業現代化の重要性への認識が強まって来た時代です。以来、オール関西の熱い思いを背景に、アジア新興国の人材育成支援を担ってこられ、着実に成果を広げてこられました。

今、グローバル化の様相は新興国が先進国間で育った技術やノウハウに追随する「雁行型」の発展から、新興国も先頭に加わり、ものづくりと経営力を高め合って行く「螺旋型」発展へと、新しいステージを広げて来ています。

また、その負の側面として、資源や環境制約の深刻さを一段と増すものにしています。そして、これら変化はどれも人材育成に果たすＰＲＥＸの役割をより高次元なフィールドへと促すものに他なりません。一層の活動充実を期待する由縁であり、次なる二十年、アジアにとって、現場の知恵が交流する、無くてはならぬ場として輝きを加えていくことを願って止みません。

PREXと私

大阪府　府民文化部都市魅力創造局
国際交流・観光課 副主査　赤坂 雅也

私がＰＲＥＸと関わらせていただいているのは平成二十年度からで、決して長期間ではありませんが、この間、ＰＲＥＸを通じて職員の皆様をはじめ他の自治体・企業・団体の方々とお話させていただく機会や、ＰＲＥＸが実施される研修事業で来阪された研修員の方々とお会いする機会をいただくなど、貴重な経験をさせていただいてきました。

特に、ＰＲＥＸが実施される研修事業に対し、大阪府として講師派遣や施設見学等のご協力をさせていただく際には、日程調整の過程で苦労することもあり、ＰＲＥＸのご担当の方には度々ご迷惑をおかけしておりますが、どの研修事業においても、研修員の方々の真剣な眼差しや講師・説明者と活発に意見交換されている姿を拝見し、私自身、非常に有意義な時間を共有させていただいていると感じています。同様に、研修員の方々が大阪・関西でのご経験を意義深いものと感じてくださり、また、ご帰国後に活かしてくださることを願っています。

オール関西の体制を築いて海外からの研修員をお迎えし、大阪・関西の魅力発信、プレゼンスの向上に大きく寄与してこられたＰＲＥＸの二十年間のご活動に改めて敬意を表しますとともに、三十周年、五十周年、百周年と、さらに力強く歩んでいかれますことを心よりお祈り申し上げます。

大阪市のBPC事業との連携

大阪市　政策企画室秘書部
海外プロモーション担当課長　藤田 佳久

一九八八年五月、大阪で開催された太平洋経済協力会議（ＰＥＣＣ）第六回総会の場でアジア・太平洋地域の人材育成協力機関（後にＰＲＥＸ）を設立するという構想が関西経済連合会 宇野会長によって表明されました。この総会の大阪誘致並びに開催に際し大阪市の担当（経済局貿易観光課貿易係）のひとりとして従事（当日は受付業務）したことを記憶しております。

当時関西ではアジア・太平洋地域との経済協力交流の振興が重要視され、大阪市でも、一九八八年三月、アジアの主要都市との経済交流を推進するための都市レベルでの仕組みとして「ビジネスパートナー都市交流事業（ＢＰＣ）」を立ち上げました。

私自身、このＢＰＣ事業の当初の担当として従事しましたが、当事業の中でもビジネスパートナー都市からの企業経営者に対する研修事業は長期的な視点で重要な事業と考えておりました。それは途上国への技術協力というだけでなく大阪企業の海外展開での人材育成になり、長期的には大阪・関西に対するよき理解者を増やせるのではないかと考えたからです。ただ近年大阪市の財政状況が厳しく人材育成事業ができなくなっております。現在奇しくも私がＰＲＥＸの大阪市の窓口かつＢＰＣ交流事業の担当責任者ですので、ＢＰＣ交流事業としての人材育成事業をＰＲＥＸと連携して再開できればすばらしいと考える次第です。

新しい時代のひとづくりへ

京都府　商工労働観光部 貿易・商業課長
小中 富雄

人、もの、カネ、情報といった経営資源の中で「人」が大きな役割を果たすことは今も昔も変わりません。かつて地方自治体が友好提携や海外駐在員事務所の設立など海外事業を活発化し、地方の国際化や国際人の育成が重要であるといわれた時期がありました。私は二十五年以上前にも国際業務に携わった経験がありますが、振り返って見ますと、姉妹提携・友好交流が主だった時代から協定や覚書による特定の分野の交流に移行し、今では経済面がクローズアップされ、海外事務所の役割も見直されています。ＰＲＥＸ関連事業では、二十年近く前にロシア極東地域の研修員を受入れました。人種や制度、文化、習慣の違いを超え、研修を通じて人と人の心の触れ合いを感じたことは今でも鮮明に記憶に残っています。急速に経済がグローバル化し、情報化が進展する中、ＰＲＥＸの人材育成事業は、国際貢献や人的ネットワークの構築といった役割に加えて、例えば、帰国した研修員を日本のよき理解者として我が国のＰＲや母国の情報提供、更には両国の経済活動のコーディネータ的な役目を果たすことができないかと考えています。こうした具体的な活動が地方の活性化や国際化の進展に繋がるからです。今、世界の目がアジアをはじめ環太平洋地域の新興諸国に集まる中、ＰＲＥＸの「ひと」に着目した事業が今後とも時代のニーズに合った役割を果たしていくことを期待しています。

友好都市との絆の強化にお力添えをいただいているＰＲＥＸ

京都市　総合企画局 国際化推進室 副室長　久野 育

近年の自治体における都市間交流は、これまでの友好親善中心の交流から、都市の発展に寄与する技術交流や経済交流など、課題解決型の事業や国際協力が求められるようになっています。

京都市では、友好都市である中国・西安市との間で、ここ数年、ＰＲＥＸのご協力をいただきながら環境分野における幾つかの技術協力を実施してきました。

京都市門川市長を表敬訪問し、陝西省水環境整備事業への感謝を伝える研修員（二〇〇九年十一月）。

二〇〇六年からは、陝西省水環境整備事業を、また、二〇〇八年から大気環境改善に向けた協力を実施し、昨年最終年を迎えました。二〇一〇年十一月二十八日から、環境分野の職員を西安市に派遣し、三年間の取り組み成果の確認などを行いました。さらに、昨年からは、再び西安市の水環境改善に向けた協力事業を始めました。

こうした、技術協力を行うに当たっては、現地の状況把握、相手都市が求めることや、それに対する対応方法等の事前調整が必要です。言葉の問題はもとより、研修内容やその密度、時間配分、移動方法、食事のメニュー等、調整する事項は多岐にわたります。

ＰＲＥＸには、常に西安市との間で綿密な連絡調整を行っていただいています。

お蔭様で、本市は友好都市の発展に資すると云う大きな目的に向かって事業を進めることができます。私たちが、国際社会に貢献できますのは、ＰＲＥＸの支えがあってのことであり、京都市職員だけの力ではできない、真の友好交流を支えていただいているＰＲＥＸに、この紙面をお借りしまして、感謝を申し上げます。

ＰＲＥＸとの連携による国際協力の思い出

兵庫県　観光・国際局長　多木 和重

ＰＲＥＸとのお付き合いは長い。一番古い記憶で、係長時代、平成七年の早春だから、少なくとも十五年は遡る。当時、ＰＲＥＸと自治体との連携事業の一環として、ロシア東欧貿易会（現ロシアＮＩＳ貿易会）の事業を活用し、姉妹関係にあるロシア極東のハバロフスク地方から研修員を招聘する事業を始めていた。

平成七年の早春を記憶しているのは、阪神淡路大震災から一カ月半、震災の傷跡が残る中で、研修員の訪問を受けたことが印象深かったからである。その際、ＰＲＥＸの担当者に伴われたハバロフスク地方からの研修員二名に対して、県側で国際交流施策や震災についてレクチャーを行った。その後も長年にわたり、ハバロフスク地方からの研修員の受入れが続けられ、おかげで、県の財政が厳しくなる中にあっても、同地方との交流が図られた。

最近のＰＲＥＸとの連携事業としては、「ＪＩＣＡの草の根技術協力事業」を活用し、友好省である中国広東省での環境整備システムの構築に協力している。

ＰＲＥＸの予算執行も、目に見えて簡素化が図られてきた。直ちに大きな成果が出にくいのが人材育成事業の難しい部分であり、批判もあろう。が、長期的に見れば、必ず、対象地域の発展や日本・関西との絆の強化につながると信じている。今後も財団設立の背景となった「関西の心意気」を維持し続けていただければと願う。

特色あるＰＲＥＸの活動

神戸市　市長室 国際交流推進部長
上田 享史

二十年の長きにわたり継続されてきたＰＲＥＸの途上国人材育成活動とその成果は内外から高く評価されており、関係者皆様のこれまでのご努力とご苦労に深く敬意を表します。

アジア・太平洋地域は地理的な近さに加えて経済社会的にも日本との関係が深く、様々な国際協力活動が展開されていますが、経済界を中心に産官学が協力して途上国支援を行うＰＲＥＸの活動は他には見られない特色あるものです。

本市においても途上国の都市に対する国際協力を市政の重要な柱の一つとして位置づけ、国連と連携したアジア地域諸都市の都市政策部門での人材育成を過去二十年以上にわたり実施してきております。

途上国支援を通じて形成される多様なネットワークは、支援する側の今後の発展にも直接間接に資するものです。途上国の人材育成へのニーズは近年多様化してきており、ＰＲＥＸが実施した観光開発分野の研修では本市の観光客誘致戦略をご紹介しましたが、神戸市においてはこれからも様々な分野で、ＰＲＥＸやＪＩＣＡ、国際機関などと連携した国際協力事業を展開してまいる所存です。

二十周年を機に、多くの地元企業関係者の熱心な協力に支えられたＰＲＥＸの活動が今後さらに充実発展していくことを心より願っております。

ＰＲＥＸと私

近畿経済産業局　通商部 国際課長
戸田 美和

政府は「新成長戦略」の実現に取り組んでおり、二十一の国家戦略プロジェクトの一つに「グローバル人材の育成と高度人材の受入れ」が位置づけられています。

一方で、アジアなどの新興市場が著しい成長を遂げており、その成長を取り込むための中小企業の海外展開支援は、我が国経済にとっての喫緊の課題です。

経済産業省では、二〇一〇年十月、大臣を議長とする「中小企業海外展開支援会議」を設置し、近畿地域におきましても、当局が中心となって「近畿地域中小企業海外展開支援会議」を開催するなど、中小企業海外展開支援の体制を整備し、本格的な支援を行っているところですが、その成否は「人材」に懸かっているといっても過言ではありません。

ＰＲＥＸがこの二十年の間に築いてこられた百二十を超える国・地域とのネットワークが中小企業の海外展開等に際して、大きな強みとなることが期待されます。

今後とも、ＰＲＥＸが「人材」の育成を通じた途上国の経済発展に貢献され、ネットワークの拡充を通じて様々な「人材」が活躍することによって、我が国との交流が深化し、我が国および世界各国・地域がＷＩＮ-ＷＩＮの発展を遂げることを心より祈念いたします。

変わらぬもの、変えていくべきもの

大阪ガス　秘書部 経営調査室長
岩永 知大

経済界の活動に関わるようになり、ＰＲＥＸの活動の内容を知れば知るほど、途上国の人材育成と国際交流に取り組む〝高い志〟と、研修の企画から運営に至る事務局職員の皆さんの日々の〝地道な努力〟に対し、深い敬意を覚えずにはおれません。二十年の長きにわたり、多くの協賛企業に支えられながら、これら人材研修の活動が〝草の根の交流〟として、わが国・関西とアジア・太平洋地域との良好な関係の維持・向上に果たした役割は決して小さくありません。

今後、ＰＲＥＸの更なる発展に向けて、例えば近年、環境関連のテーマが増えているように、その時代に応じた新しいテーマや、新しい地域との人材交流にもチャレンジをしていくことが大切ではないでしょうか。ＰＲＥＸにおかれては、これからも変わらぬものとして〝高い志〟と〝地道な努力〟を大切にしていただくとともに、変えて行くべきところをはっきりと見極めて、新たな目標と課題に果敢にチャレンジし続けていただくことを期待します。

PREXとの出会い

関西電力　元秘書役
田口 全男

一九九〇年六月五日、リーガロイヤルホテル「山楽の間」に於いて、設立披露パーティが盛大に開催されました。

宇野收ＰＲＥＸ会長の開会挨拶、来賓祝辞、山田稔理事長等による鏡割の後、芦原義重大阪二十一世紀協会長の「ＰＲＥＸの事業は、関西のための関西づくりでなく、世界のための関西づくり。とりわけ画期的な意義を持っている。」との発声で、産官学四百名を超える参加者が一斉に力強く乾杯。ＰＲＥＸ誕生の喜びと期待で熱気あふれる雰囲気の中、心地よく酔わせていただく幸運を得たのが、私とＰＲＥＸとの出会いでした。

その後、何年かして、藤副理事長の代理として、トップ会や理事会にも何度か参加させていただく機会がありました。知恵を絞り工夫を凝らして、企業からの浄財である基本財産をうまく運用しながら、東南アジアのみならず広汎に、人づくりや関係づくり等に地道に取り組まれている様子を目の当たりにすることができました。

設立二十年余の今日、堅実な活動が国際的にも高く評価されているのも、ひとえに、井上義國会長、柴田稔理事長、藤田賢次専務理事をはじめ、歴代の役員の皆様、スタッフの皆様が、情熱を燃やし続けてこられたからだと思います。

これからも、広く企業や団体、自治体の皆様のご支援を賜りながら、様々な課題を克服し、一層飛躍発展されんことを祈ります。

PREX設立二十周年にあたり

サントリーホールディングス　大阪秘書室長
長岡 伸幸

私事で恐縮ですが、四年前に仕事の関係で中国の西安に行った時のこと、ガイドをしてくださった男性の方が、流暢な日本語を話され非常に懇切丁寧な案内をしていただきました。

その方は若い頃に日本で企業内研修を受けられたそうですが、「今日の私があるのは日本での滞在研修のお陰で、日本語や仕事を学んだということより日本人の勤勉さ、特に仕事に対する真摯な姿勢を目にし、そのことがその後の自分の人生を大きく変えた。そして息子も日本に留学させている」という話をされました。

二十年の長期にわたり、ＰＲＥＸが携わった研修で来日した多くの研修員の方々も、日本で同じような体験をされ感想を残していると聞きおよんでいます。

官も民もグローバル化が重要と言われて久しいですが、真のグローバル化とはお互いの国のこと、そしてその国に住む人々のことを理解することではないかと思います。

そういう意味でＰＲＥＸが担われている役割は極めて重要なことであり、今後も日本のグローバル化のため益々発展していただきたいと切に思います。

ご関係の皆様の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

PREXと私

住友電気工業　人事総務部長
賀須井 良有

私とＰＲＥＸとの本格的な関わりは、一九九〇年代の半ばプロジェクトへの参画に遡ります。

当時は「東アジアの奇跡」という世界銀行のレポートにあるように、アジア型の経済発展モデルが注目を集めた時期でした。折しも日本国内の低成長が続く中、ＡＳＥＡＮ地域は年率七～八％で成長し、この地域への直接投資が激増する状況でした。このような中、製造業は垂直分業から水平分業への移行を模索しており、ＡＳＥＡＮ地域の裾野産業も含めた人材育成を質的にも量的にも拡大することこそが、関西ひいては日本産業の将来にとって重要という観点から、関西経済連合会会員企業の一員として情報通信技術を活用した「東アジア教育・研修ネットワーク構想」のとりまとめに参画し、二度に亘る遠隔教育実験を行ったことが強く思い出に残っています。その後一九九七年のアジア通貨危機もありましたが、見事に克服し、さらには中国の急成長も加わり、当時の考えに間違いは無かったと確信しています。その根底には人材の育成とその実現に向けた地道な努力があったことは間違いなく、ＰＲＥＸが果たしてきた人と人とのネットワークという、他の何ものにも代えがたい資産の維持と新しい産業社会構築に向けた人材育成にチャレンジし続ける機関で在り続けていただきたいと思います。

PREXとダイキン

ダイキン工業　経営企画室 調査担当部長
宮住 光太

PREXがここまで発展してきた要因は幾つもありますが、その一つに、PREXが掲げる魅力的な理念があります。途上国の人材育成を目的とする団体は日本にも数多く存在しますが、PREXの特色は、それだけでなく、人材育成支援を通じた人材交流の活発化も目的としているところにあります。当社が設立の前段階からPREXへの積極的な支援を行ってきたのも、こうしたPREX独自の理念に賛同したからです。

一九八九年に関西経済連合会の事務局内に設置された設立準備室に社員を派遣したのを皮切りに、当社は今日まで、計九名の社員をPREX事務局へ派遣してきました。出向期間を終え、社業に復帰した彼らは、その経験・人脈などを活かし、世界中を飛び回りながらの活躍で、まさにPREXの理念を体現しているところです。

支援を受ける側のアジア・太平洋の途上国だけでなく、我が国にとっても、PREXは価値ある存在だと当社は実感しております。

人材育成支援活動を通じて、関西と途上国の間の人材交流が益々活発化するよう、PREXの更なるご活躍を祈念しております。

PREX二十周年に寄せて

西日本電信電話　経営企画部 企画部門 企画担当部長
山西 宏明

近年のアジア経済の成長は目ざましく、アジア地域との連携が日本経済の発展にとって大変重要となる時代を本格的に迎え、その連携の礎として幅広い分野での人材交流による相互理解の促進が重要となっております。

二十年前にその潮流を見据え、関西こそアジア地域との連携が特に重要であるとの認識に立ち、当時発展途上であったアジア地域への人材育成支援・交流を進められたPREXの先見性、およびアジア地域との人的連携の活発化・相互理解促進への貢献について、心より敬意を表し、二十周年をお祝い申し上げます。

振り返りますと、一九九〇年代後半に関西経済連合会の提言「情報通信技術を活用した遠隔人材育成の提案」を踏まえ他機関に先駆けて実施された海外との遠隔研修は、PREXの人材育成ノウハウと弊社の情報通信技術を組み合わせて成果を示せた取り組みであったと考えております。

今後もPREXの活動が更なる発展を遂げ、「アジア諸国と関西にとって、なくてはならない存在」であられますよう祈念いたします。

多言語な人たちとの出会い

言語交流研究所・ヒッポファミリークラブ
関西事務所　主事
小牧 雄三

設立二十周年、おめでとうございます。私どもは国や地域を選ばず出会いを大切にし、目の前の人のことばを母語のように自然に習得していこうという活動を会員が家族ぐるみで行なっており、六年ほど前よりPREX様には研修員のホームビジットでお世話になっております。

これまでに研修員を受入れた家族の声をご紹介させていただきます。

「〝スパシーバ〟（ありがとう）がつうじてうれしかった。いっぱいあそびました。テレビですもうを見て、気に入っていました。夜にちゃんこをたべました。おいしそうにたべてくれてうれしかったです。（小1）」（キルギス共和国）

「スミスさんが何度も〝BONITA FAMILIA〟（美しい家族）と言ってくれました。こちらからは〝MUCHAS GRACIAS〟（ありがとう）としか言えませんでしたが、たった一日でこんなに心を通い合わせることができるんだ、とこちらの心が満たされました。」（ニカラグア）

これからも、素敵な人やことばの出会いを大切にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

主要協力企業

PREXの訪問は社員の誇り

ユーバー　総轄室 理事　薄 信興

弊社は、八尾市に拠点を持つ請負加工業です。鉄道・通信・半導体・電力・FA・計測・プラント等、産業各分野における制御装置・工業用コンピュータ用のフロントパネル、サブラックなどを設計・開発から製作まで行っています。

弊社の社長はPREXの「途上国の人材育成事業とその活動を通じて関西の国際的な人の交流を活発化して相互理解を深める」という事業目的に賛同して、二〇〇七年二月にラオスとウズベキスタンの研修員の勉強受入れを快諾しました。以来二〇一〇年末までにマレーシアの研修員なども含めて八回を数えるまでになりました。

研修では、「ものづくり企業のチームマネージメント」というテーマで、弊社で取り組んでいる、現場現物経営、人材育成を目標とした多能工化システムや人の効率的活用を考えたシフトシステムなどについて説明し、「社員を育成し、お客様を大事にして経営することを通じて国に税金を納め、かつ社員の福祉の向上に努力することが大事であり、そのためには絶対に赤字経営をしてはならない」ことも強調しています。

PREXを通じて外国の方々が工場見学にご来社されることは、社員にとっても誇りに思い、良い刺激になっています。また社長の考えもあり、ユーバーに来られた機会に少しでも日本の文化の一端を体験していただこうと、季節に合った和菓子と日本茶を差し上げ、勉強会場には生け花をかざったりしています。このような機会を通じて少しでも、日本の和の心を外国の人達に感じていただき日本を好きになってほしいと思っています。

マレーシアの行政官が参加する「JICAマレーシア行政初級管理職研修」で訪問。日本のモノづくり企業のチームマネジメントについて講義いただき、工場を見学。中央が研修員から記念品を受け取る淡路社長。

「PREX NOW」創刊号から保存

カワノ　代表取締役社長　河野 忠友

弊社の書棚に〝海外からの会社訪問〟というファイルがあり、そこに貴機関紙「PREX NOW」一九九〇創刊号が保存されております。その中には、PREX初年度第四回目の事業であった〝ポーランド高級経営研修〟のカリキュラムに、弊社での研修が組み入れられたとの資料が綴じられております。テーマは〝神戸におけるゴム工業（靴産業）の発展について〟ということでした。この研修の様子は、業界紙にも取り上げられ、それ以来、近年では毎年一～二回のペースで研修の一端をお引き受けしています。

いずれの場合にも、受講される皆様は工場でのモノづくり現場を興味深く意欲的に見学になり、そのあとの質疑応答も常に活発に展開されておりますので、弊社としても非常に受入れ甲斐があると感じているところであります。そしてまた、参加者各々の自国における靴産業の状況や天然皮革を中心とした材料輸出等のお話もうかがうことができ、当方にとりましても貴重な情報交換の機会となっております。

今後とも、PREXの取り組んでおられる途上国の人材育成事業に、弊社での研修が少しでもお役に立てば幸甚に存じます。

社長とディスカッション

サラヤ　総務本部 CSR推進部 専任課長
小辻 昌平

微力ながらも各国からお見えになる研修員の皆様のお世話をさせていただいたのは二〇〇三年四月にウズベキスタン・カザフスタンからの研修員の皆さんが最初でした。当時当社にはロシア人とカザフスタン人の二人の研究者が本社で勤務しておりましたので、彼らを加えて商品開発やモノづくりについての講話とディスカッションをさせていただいたことを今でも憶えております。

それ以来、対応する部署や人は変わっていきましたが、会社の窓口として一貫してお世話させていただいたのは私でした。特に印象深いのは二〇〇六年の研修で社長の更家悠介が直接研修員の皆さんとディスカッションできたことです。研修員の皆さんはいつもより活発に質問され、経営者と直接ダイアローグできたことを大変喜んでいただいたことが忘れられません。

研修のテーマも最初は「中小企業のモノづくり」が中心でしたが、最近は「CSR」や「環境への取り組み」についてのリクエストが増えてきているのも企業を取り巻く状況の変化だと感じております。

時には、こんな内容で本当に研修になっているのだろうかと責任を感じることもありますが、これからも少しでもお役に立てればと考えております。

研修を通じた交流と出会い

ホスピタリティツーリズム専門学校大阪　副校長　佐野 美保

PREXとの出会いは三年前、中東地域で観光開発に関わる方々の研修があり、その行程内で当校を見学したいというお話をいただきました。

当校は観光業界誌トラベルジャーナルを母体とし、一九七三年に観光業界に特化した職業教育を行う専門学校として設立しました。見学にお越しになるのは中東地域の主に政府観光庁関係者や大学の先生方でしたので、当校では民間の観光人材育成機関としての特徴をお話することになりました。今にして思えばほんの半日とはいえ、簡単にお引き受けしてしまった感は否めません。後日見せていただいた研修プログラムが大変素晴らしいもので、私どもでどれだけお役に立てるかが少々不安ではありました。

しかし、当日いらっしゃった中東の研修員の皆さまとの交流を通じて、感謝申し上げたい点が三つあります。

まずは、熱心に興味を示していただき、それぞれの視点からのご質問を受けることにより、普段当たり前と思って取り組んでいる当校の職業教育を第三者の目で評価してもいただけることです。私ども教職員にとっても毎回改めて新たな気付きや発見があります。

そして、当校の在校生も、普段関わることのない地域の方々とお話しができることで良い刺激をいただいています。何よりリアルな体験学習を通じて、国際人としての自覚が培われているようです。

最後に、当校の学園理念であるホスピタリティをいつも訪問される皆さまからいただけることです。本来ならホストであるこちらがおもてなしを提供すべきではありますが、ホスピタリティの真髄は相互関係から成り立つものであり、双方の交換で生じるものであることを実感できます。短時間の交流ではありますが、まさに一期一会と言えるでしょう。

もちろんこのような機会をいただけますのも、PREXとの出会いがきっかけです。

中東の行政官が参加する「JICA中東地域観光開発研修」で訪問。日本の観光分野の人材育成について講義いただき、学生とも交流の場を持った。

PREX設立二十周年に寄せて

大力鉄工株式会社　取締役
清水 規裕

弊社は、これまでPREXの研修員を二度受入れさせていただきました。十数カ国におよぶ外国人の研修員を一度に受入れた経験がなく、当初は不安もありましたが、研修員を受入れさせていただいて弊社にとっても大変有意義な経験となったことと、感謝しております。

まず第一に、従業員のモチベーションが上がり、社内の活性化に繋がりました。後日行った社内ミーティングでは従業員が活き活きと研修内容の報告をしておりました。第二に、自社の存在意義やポジションを再認識することができました。研修員の皆様は、遠慮することなくストレートに様々な質問をされます。日頃何気なく理解をし、当たり前のように思っていたことも、改めて研修員の皆様に説明することで、何のために社会に存在しているのか、自社の社会的存在意義を再認識するきっかけを与えていただきました。

今後もこのような機会がある限り、積極的に研修員の受入れをさせていただきたいと思っております。

町工場を紹介する機会をいただき感謝

三元ラセン管工業　代表取締役
高嶋 博

国際交流部から二〇〇八年五月に電話をいただいたのが、PREXとの出会いです。アジア・太平洋地域の途上国の企業関係者や中堅マネージャーの育成を通じて、関西における国際交流を促進することを目的として研修や交流事業をおこなっており、我社の人材育成や生産管理の話を研修員に聞かせてほしいということでした。日本式の小さな町工場の経営が、はたして参考になるのか心配でしたが国際交流に少しでも、お役に立てればと三年続けて協力させていただいています。

二〇〇八年は、コロンビアからの日系研修で「開発管理」を二〇〇九年は、国別研修でパラグアイからの四名の研修員に「人財育成と評価」を二〇一〇年も国別研修でウズベキスタンからの六名の研修員に「人財育成」の話をさせていただきました。日本語しか話せない私の話でうまく伝えることができるのか、また理解してもらえることができるのか心配でしたが、通訳の方のおかげで技術伝承のための人材育成や製品開発を理解していただけたと思っております。普通だと出会うことのない外国の方々に町工場の「ものづくり力」と売るためのIT活用を紹介する機会をいただいたことに感謝いたします。

今後もこのような機会がありましたら、お手伝いをさせていただきたいと思います。

すべては「出会いに感謝」をこめて

関西ホームサービス　代表取締役
高宮 令子

PREXと弊社との出会いは、二〇〇九年でした。

PREXの培ってこられた活動は、途上国の発展と世界の国々との異文化交流を重ね合わせ諸国の経済発展のための「場」の創造であり重要な役割であると感じております。

この「場」を介して諸国の文化や歴史をより身近に体験させていただくことができました。

そのことにより、共に学び、共に成長・発展に繋がることを確信し感謝いたします。

そして、わが国の文化・経済環境・経営姿勢など、私どもがビジネスに対する深い思いと経験を研修員の皆様にお伝えできましたこと、少しでも参考にしていただけましたこと、諸外国への情報発信できましたことにも感激いたしております。

さらに、研修員の方々も習得しようとする意欲には感服いたすところでして、私どもも見習うべきと感じました。

弊社でも、社員のモチベーションアップに繋がり、さらに自信と満足感と充実感をもって、日々の業務にも一層の励みとなることができました。

これからも諸国の交流と出会いを通じて、PREXの存在意義の重要性と国内外のネットワークを活用し、世界の発展と幸福になくてはならない存在であることを期待するとともに、感謝申し上げます。

有りのままの姿でお役に立つなら

中川産業　代表取締役
中川 恭夫

私がＰＲＥＸを知ったのは、二〇〇五年、当時の松下電器産業様から受入れ要請を受けた時からでした。正直なところ受けるべきか悩みました。理由は簡単、弊社は鉄鋼流通加工業という一般受けしない業種であり、研修先としての価値があるとは思えなかったからです。そのためＰＲＥＸより事前説明いただいた時も、取敢えず受入れは今回限りとし、有りのままの姿を見ていただくことを条件といたしました。

研修当日、工場見学を終えて質疑応答に移り、研修員の真摯な態度と熱心さに心をうたれ、これまでの後向きな気持が一変いたしました。昔、日本も同じ様な熱心さで欧米から多くを学んでおり、今度は我々が社会発展に寄与すべきではとの思いが湧いてまいりました。大企業とは違う中小企業の生の姿をご紹介することでお役に立てるならと、次回から喜んで受入れしようと決心いたしました。

以来、毎年様々な地域から来社され、今では弊社の年中行事になっております。従業員にとっても自分達の職場を見ていただくことは大きな励みになっております。

今後ともささやかではありますが、有りのままの姿で協力させていただこうと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

「超ローカル」と「グローバル」の接点、ＰＲＥＸ

喜八洲総本舗　代表取締役
中田 八朗

地元に根付いた和菓子屋である「超ローカル」なわが社の事例が、「グローバル」なＰＲＥＸの活動にどう役立てるのか、はじめは不安もありました。実際、引き受けてみると研修員の反応があり、「超ローカル」と「グローバル」が混じりあう接点であるＰＲＥＸの活動は、とにかく面白いと考えています。

ＰＲＥＸからはじめて研修員を受入れたのは、二〇〇六年ウズベキスタンとラオスのマネジメント研修です。わが社の経営の考え方が途上国ではヒントになるということが、研修員との質疑応答と研修後の報告でわかりました。

ＰＲＥＸの研修受入れはわが社にとっては、「社員教育」に資するものです。社員は、わが社の財産。若い社員を育て、彼らが「幸せ」であることが私の使命だと考え、社員教育にはことの外、力をいれております。たとえば、最近は、人材育成と福利厚生の一環で、社員との海外旅行も恒例にしております。海外旅行は若い社員にとって、未知の世界を体験できるいいチャンスです。ＰＲＥＸの活動に協力し研修員にわが社を見てもらうことも、社員が広く海外に目をむけて仕事をしてもらうことにつながればと考えています。

また、わが社では、長年地域貢献の一環として、地元の学校の中高生のインターンシップの受入れも実施しています。今後とも、地域貢献と国際貢献の両面で社会にお役に立てればと思っています。

アジア・太平洋の行政官が参加する「ＪＩＣＡアジア大洋州中小企業経営研修」で訪問。研修員は日本の和菓子製造工程を興味深く見学した。中田代表取締役には、販売戦略、人事管理について研修員と膝を突き合わせてお話いただいた。

二十年二十旗との異文化交流

ナベル　代表取締役　南部 邦男

二十年前は歴史の彼方である、ゴルバチョフがソ連大統領であり花博が鶴見で開催されていた。そんな時代にＰＲＥＸはアジア・太平洋地域の途上国の人材育成に協力しようと誕生している。その後二十年、わが国経済は激しく国際化した。お米のミニマムアクセス、中国への世界からの投資、中小企業をも巻き込む製造業の東南アジア進出、環太平洋戦略的経済連携協定（ＴＰＰ）そして現在、アジア・太平洋地域は世界経済の中心となった。

ＰＲＥＸの新たな取組みである留学生を対象とした事業でも訪問。留学生は立命館大政策科学研究科特別講座の受講生でナベルの技術開発について講義を受けた。中央が南部代表取締役。

ＰＲＥＸの案内で当社にも多くの途上国の人材が来訪してくれた。熱意溢れたＰＲＥＸスタッフに率いられた多くの人材は日本の中小企業の経営を学ぶために目を輝かせて質問をしてきた。その時間を当社社員が共有することで我々は居ながらにして国際化を肌で感じた。彼らから学んだ諸外国の事情は当社の海外展開に大いに役立った。当社は現在、マレーシアとブラジルに海外法人を経営し中小企業としては異例なぐらい国際化している。その背景にはＰＲＥＸがもたらしてくれた異文化との交流がおおいに貢献をしている。

二十年後、想像すら困難であるが人の役に立とう、喜んでもらおうとの活動が絶えることなく受け継がれてこそ誇るべきわが国ではないだろうか。

ＰＲＥＸの益々の御発展を！

中農製作所　代表取締役　中農 康久

当社は、本研修事業の中小企業見学先としてご指名をいただいてまいりました。今まで、アジア・中南米・欧州・中東・アフリカと二十カ国を超える国の行政官や政府機関職員と交流してきました。

訪問の目的は、当社の経営理念・方針・計画・強みと将来展望や生産方式・生産性向上、品質保証・５Ｓ活動、そして、人材育成・モチベーション向上など、多岐にわたっての事例学習です。研修員も大変熱心で質疑応答も活発に行われ、充実した研修会であったと思います。

それでは、想い出深いエピソードの一つをご披露いたしましょう。

アンデス共同体の訪問の時のことです。

ペルーの研修員が当時のクリントン大統領によく似ていたものですから、そのことを彼に伝えると、他の研修員全員から同意の拍手がおこり、大変楽しい研修会になりました。

研修員の皆様は若く、女性が多いのが印象的ですが、この人達が自国の産業発展に寄与されると思うと頼もしくてなりません。当社もいつまでも対応できるよう、成長して行く所存です。

ＰＲＥＸの益々の御発展をお祈り申し上げます。

異文化交流の力

丸十服装　会長
西川 典男

海外の方のホームスティを受入れた経験などを通じて、異なる文化が交じり合う刺激が、新しい文化を生み出すと常々考えています。人間同士が知り合うことの積み重ねが世界の平和構築につながります。ＰＲＥＸの活動はまさにこの点で意義深いものと評価しています。この事業を通じてどれほど多くの日本ファンが生まれたことでしょう。

研修では「縫製業における販売管理」「顧客満足を重視した経営の事例」など当社の事例を紹介してきましたが、もっと研修員の所属国の情報を知りたいと思います。食、生活習慣など互いの生活文化を知り合う時間、個々の人間が知り合う交流の場を研修事業の中に盛り込んでほしいです。さらに研修員と日本企業とのビジネス交流ができれば嬉しく思います。企業にとってはすぐにメリットが生まれるとは考えがたいですが、将来の取っ掛かりのひとつになります。

当社は、他の日本企業に先駆け、中国、ベトナムなど海外への生産拠点移転に取り組み、成長を続けてきました。社の方針として社員全員に十カ国以上の現地訪問を経験させています。ＰＲＥＸの研修で受入れたウズベキスタン、キルギス、シリアなど未知の国々の人との交流は、遠い将来ビジネスにつながる可能性もあります。

これからもＰＲＥＸの活動を支援し、異文化交流の刺激を受け、新しい力にしていきたいと考えています。

グローバル企業への出発点

中央電機計器製作所　代表取締役
畑野 吉雄

ＰＲＥＸとのお付き合いが、今では十年以上になりました。初めて東欧の研修員が弊社を訪問された時には、どう対応してよいものか、私も社員も戸惑った記憶があります。しかし、日本の中小企業の生の姿を、背伸びせず、ありのままに見学してもらい、ちょっとした和菓子のおやつで歓談するうちに、笑顔が広がり、本音の話が飛び出しました。その経験が、私を世界に目を向けさせるきっかけのひとつになったことは、間違いありません。

それ以降、弊社の製品が、アジア諸国、ポーランド、メキシコなどへ納品されました。ＰＲＥＸのお蔭で海外に対して非常に親近感を覚えるようになっていったからです。また、今まで私が訪れた諸国は、チェコやスロバキア、ベトナム、タイそしてつい先日はシンガポールと、考えれば弊社へ研修員が来られた国ばかりです。

今や日本の中小企業は、海外へグローバルに展開していかなければ活路は見出せないと確信します。

今後、ＰＲＥＸへのお願いは、海外の研修員が来阪された時には、大阪の中小企業との交流の場を積極的に増やしていただきたいことです。中小企業の中にはグローバルな展開の可能性を秘めた、高度な技術を持った企業が数多く存在します。そのような企業群に海外展開の道筋をつけていただくことを期待します。

ベトナム日本センターの講師候補が参加する「ＪＩＣＡベトナム日本センタービジネスコース講師研修」で訪問。研修員に日本企業の経営理念とマネジメントを伝える畑野代表取締役。研修員一人ひとりとの交流を大切に対応いただいている。

真剣な話し合いが交流を深める

旭電機化成　専務取締役
原 守男

三重県青山工場（プラスチック成形加工・塗装・組立・検査）を見学していただきました。お祈り、そしてスカーフ姿の人が工場を見学に。テレビで見る以外知ることのできない海外の人たちが身近に登場して従業員にとっては異文化と触れた一瞬でした。

はじめに「アメーバ経営」の話をしました。「時間あたりの採算をあげるにはどうすればいいか？　どうすれば採算がとれるか？」とか質問をしましたら即座に「経費、時間という人件費が重要なファクターですね」と正解が回答され「うわー、優秀や」と感じました。

次に当社の代表的な商品の「串抜き皿」でみたらし団子を食べる実演を行い、「なぜそのお皿が役に立つのか？　どうしてこのお皿が生まれたか？」と話しているうちにマレーシアでも焼き鳥のような物があるので売れるでしょうとか、空港会社やお土産売り場への売り込みもいいとか、積極的な反応でした。

次にマネジメントの話で、当社の「朝礼テレビ会議」「アメーバ経営」「経営発表会・表彰制度」などを応用してみんなを巻き込んで目標を一つ一つ達成されたらどうですか？という方向に話が進みました。

ここで深い議論ができ、国が違っても同じようなことで困っているのだと理解できました。

同じ悩みを持つ者同士の真剣な話し合いがお互いの交流を深めたように感じました。

PREXと私

榛木金属工業　常務取締役
榛木 孝至

当社はＰＲＥＸより、年に何回か海外の研修員の見学の受入れをさせていただいている金属加工の会社です。主に社内で進めている３Ｓ活動を見学していただいております。二〇〇八年二月にボリビア・ペルー・コロンビアの行政機関の方々が見学に来られたのが最初でございました。その頃は海外の方が当社の工場に来るなんて考えもしていなかったので会社中が大騒ぎして準備をしたのを覚えています。でも終わってみれば大変好評をいただき、また帰国されてから現地の研修プログラムに当社の改善事例を使いたいと、嬉しい申し出をいただいたりして、当社も今までの改善活動は間違っていなかったんだなと自信を持つことができました。現在では毎年国内、海外の方々に工場を見学していただけるようにまでなりました。最初は私一人で案内していた工場見学も、今では全て当社の社員さん達が自分の言葉で原稿を書いて案内をしてくれています。自分の職場を誇らしげに案内する社員さん達はとても頼もしく私は彼らを誇りに感じずにはいられません。ＰＲＥＸとのお付き合いは実は当社の社員教育に大いに役立たせていただいております。ＰＲＥＸと今後も永くお付き合いをさせていただき、海外からも評価される良い企業を目指してこれからも努力をして参りたいと思います。

人こそ財産

フジキン　特待執行役員・モノづくり部門国内製造副本部長、フジキンベトナム ダイレクター
深田 収

フジキンは超精密ながれ機器（超精密バルブ・継ぎ手、ユニット等）を製造販売しております。弊社のベトナム工場は、東南アジアの一大生産拠点として二〇〇二年七月にハノイのタンロン工業団地に設立。現在、ベトナムでの生産品は百％輸出しておりますが、将来は現地販売も検討しております。現在フジキンベトナムは五百十五名のワーカーが在籍しております。特に日本的経営として、人材を最重要としておりますが、フジキンベトナムも国内同様「人こそ財宝（人財宝）」「ものづくりの前に人づくり」で人を企業の財産の理念で教育、育成し、モチベーションアップに努めております。

以上のように当社はベトナムとは深いつながりがございますが、過去四回ＰＲＥＸのベトナム人研修として当社の御視察を受入れさせていただきました。弊社の現場を御覧いただき「ものづくりについて」「経営理念」「オンリーワン」等ご説明させていただきました。特に昨年、ベトナム人研修員が弊社御視察時にケーブルテレビ会社「ケイキャット」の取材が有り、ＴＶ放映されたことは素晴らしいことでした。今後ますますＰＲＥＸ、弊社、ベトナムが関係をより深く緊密にとなることを期待しております。今後もこのような機会がありましたら、何なりと申し付けください。お手伝いをさせていただきます。

徹底した掃除を通じて連帯感を広める

枚岡合金工具　会長　古芝 保治

弊社に初めて3S活動（整理・整頓・清掃）のモデル工場としてアフリカ諸国の皆さんへの見学会のオファーをいただきましたのは三年前に遡ります。「頼まれ事は断らない」ポリシーで喜んでお請けさせていただいています。

見学会では弊社の十二年間にわたる徹底した3S活動のやり方と進め方や企業風土・文化に高めてゆくマインドや日本独自「率先垂範」、「心の絆」や「大和＝ビッグハーモニー」の職場の文化について事例を交えてご説明させていただきました。

「掃除は女性がするもの」自国内では掃除をする習慣がないので大そう驚かれてますが、徹底した掃除を通じて心を高めて経営を伸ばす「モーショナンマインド」を体感していただきました。強烈な体験を通して体で覚えて帰っていただこうとの趣向です。

「いのち」をくれた両親、そして祖父母、さらにご先祖様から宇宙の始まりまで続く「いのち」を後世に伝えていく仕事に対する使命感と同じ地球人として同じ血が流れていることをこれからもお伝えしていこうと思います。

アフリカの行政官が参加する「JICAアフリカ地域　中小零細企業の経営改善に向けた生産性向上研修」で訪問。清掃活動の実習で、3S活動について学ぶ研修員。

国境を越えた社会貢献

イートアンド　代表取締役社長
文野 直樹

二〇〇六年十二月　PREX主催の研修事業で、ベトナム・ラオス・キルギスからの研修員四名を受入れたのが、PREXとのつながりの始まりでした。

研修では、大阪王将研修センターや工場の見学、餃子巻き体験と試食などをしていただき、見学では興味深げに、試食では「美味しい」を連発され、私たちも楽しくご一緒させていただいたのを覚えております。

その後は、ほぼ毎年受入れをさせていただき、今年で五年目を迎えました。その間、来訪される国の幅も広がり、テーマも「人材育成」「新規開拓・マーケット開拓」「FC展開システム」など、リクエストにもお応えさせていただいております。

毎年、感じることなのですが、研修員の真剣な輝く瞳、そして大変優秀なスキルをお持ちであることへの驚きです。皆さんの様子に私たちも刺激を受け、日本経済をよくしたい、海外についてもっと学びたいと、より強く感じるようになりました。

依然としてドメスティックな企業ではありますが、香港・上海など東アジアでの展開ビジョンも掲げており、今後、私たちも「おなかいっぱいの幸せを」という理念のもと、「国境を越えた社会貢献」に向け、一層真剣に事業へ取り組んでまいる所存です。

ネパールからのヒント

浜田　営業部主任
村越 まり

当社は一九六九年に金属資源の処理をスタートし、解体工事・廃棄物処理・環境関連商品など扱っております。これまで、従業員五十五名という小規模な当社を、研修場所として四度もお選びいただき、貴重な体験をさせていただいたことに感謝します。その中で特に印象深い研修をご紹介いたします。

二〇〇九年、アジア各国より「太陽光発電導入計画研修」にて、当社にお越しいただきました。当社は、日照によって発電量が不安定である太陽光発電のデメリットを補うべく、リユースバッテリーを併用したシステムを本社工場に採用しております。また、そのバッテリーは新品ではなく、各企業で使用され寿命を迎えた鉛バッテリーに、パルス電流を用いてリユース処理を施した環境に優しいものです。

研修員の中には電化率が低い国の方もおられ、特にネパールの方は、電化率二十％かつ、人口の九十％を占める農村部では電化率は五％と聞き、電線をひかずに安定的に電力が使用可能となるバッテリーに大変関心をお持ちでした。また、バッテリーは高価であるため、一度使用したバッテリーにリユース処理を施す装置についても検討したいと、熱心なご質問をいただきました。生の声をお聞きし、当社としてもできることがあると感じ、新たな事業へと生かしていきたいと思っております。

モノづくりの喜びを

松尾捺染　代表取締役　松尾 治

高校を卒業と同時に父の経営する工場に住み込みで働きだした時、会社がガーナからの研修員を一年間受入れることになりました。社内で英語を話せるものが私以外にいなかったので、部屋をシェアして一年間共に過ごしました。彼の帰国後、会社の指示で今度は私が染料薬品の仕入先であるドイツＢＡＳＦ社大阪支店で三カ月研修することになりました。この時点で国内の研修後、ヨーロッパに渡り更なる研修を受けることが約束されておりました。まずドイツに渡り五カ月の語学研修を修め、スイス・バーゼルにありますＳＡＮＴＯＺでの三カ月研修を終え、ドイツのエンジニアスクールへ入学しました。その時に、それまで日本国内での会社における勤続経験と日本のＢＡＳＦ、スイスのＳＡＮＤＯＺでの研修歴を Industrie semester として認めていただき、入学にも有利に働きました。学校卒業後、日本に帰国し、弊社にも国内外からの研修員受入れの依頼があり、わたし自身の経験も踏まえ、喜んでお受けすることにしました。

今後とも支援活動は進めてまいります。一人でも多くの方がモノづくりの喜びを見聞していただきたく思っております。

これまで多くの研修で訪問。研修員とともに左から四番目が松尾代表取締役。

日本の経営者の哲学を伝えてほしい

山岡金属工業　代表取締役　山岡 俊夫

現在の日本を見ると、左を見ても右を見ても官民あげての不祥事が続き、若者の内向き志向が強まっている。この原因は、人間としての正しい「ものの見方」「考え方」が希薄になり人間としての正しい思想の持ち主が少なくなったからではないか。私が、企業を経営するための基本的な考え方は次の通りである。

一. 素直であること、素直さは精神の胃袋、素直な人は周囲の人たちの知識を得ることができ、これを行動に移すと知恵となる。

二. 企業に「人」はいらない。「プロ」がいる。

三. 「プロ」は叱られて育つ。森の中で本当に使える木は、千本のうち三本しかない。人を育てることはきれいごとではない。

四. 企業の活動目的は、①利益の追求、②思想の追求、③人をプロとして育てることの追求、④文化の追求である。

五. 山岡金属があることによって、①地域社会、②日本、③世界の人々に喜んでもらえる企業を目指すべきである。それが山岡金属工業の存在意義である。

ＰＲＥＸの活動に協力するのも、こうした経営理念と、ＰＲＥＸの活動が目指すものが一致するからである。ＰＲＥＸには、世界の研修員の役に立つだけでなく、日本の活性化に向けての活動を展開してもらいたいと考えている。ＰＲＥＸが研修員に発信する日本の経営者の心や経営に対する真摯さは、元気のない日本の若者にも是非伝え残したい。たとえば、ＰＲＥＸの事業に賛同する経営者の思いをまとめた本を出版してはどうかと提案したい。

山岡金属工業で製造する家庭用たこやき機メーカーでたこ焼き作りを体験するアフリカの研修員と山岡代表取締役。

『経営品質』の向上と研修員

伍魚福　代表取締役社長　山中 勧

二〇〇四年十二月、経済誌に載った弊社の記事をきっかけに、アセアン他九カ国の研修員十二名に来ていただいたのがＰＲＥＸとのご縁の始まりです。

以来、延べ五回にわたり、アセアン諸国、ウズベキスタン、キルギスなどの研修員に経営戦略についてのお話をさせていただいています。

いつも感心するのが、研修員の皆さんの姿勢です。予習をきちんとし、当日は目を輝かせて話を聞き、たくさんの質問をいただきます。何か持って帰ろうというギラギラとした強い意志を感じ、私自身も毎回、「こうあらねば」という元気と勇気をいただきます。

伍魚福では、この研修の受入れを「社会貢献」の一つと位置付けています。

「経営品質向上プログラム」を学ぶ中での気づきですが、我々中小企業も「経営における社会的責任」を考えることが必要不可欠な時代です。地域の清掃活動、くぎ煮やお酒のイベントへの協力、小学校の見学受入れ…。そんな中、ＰＲＥＸの活動への協力は地域・社会のみならず、日本のためになる重要な社会貢献活動だといえるでしょう。

領土を巡る問題で近隣諸国とギクシャクする中、世界に日本のファンを作るＰＲＥＸの重要性はますます高まっています。

今後も微力ながら協力をさせていただくとともに、我々自身の経営品質の向上に努めて参ります。

中米と上勝町のつながり

いろどり　代表取締役
横石 知二

徳島県の山奥にある上勝町。人口は二千人、四国で一番小さな町だ。そんな町に海外から研修にやってくる。当時、町にとっては、大きな話題になった。テレビ、新聞なども取材に入り、なぜこんな小さな町に来るのだろうか…と、町民は不思議な思いだったに違いない。しかし地域資源を生かした取り組みは、日本の田舎では唯一の成功事例だっただけに、規模は小さいが、共通の想いもあるのではと感じていた。その予感は、見事に的中、中米人のもつ明るさと彩のおばあちゃん達は、早速意気投合。出荷している作業場では地球儀も取り出してきて「ここから来たんだよ」と話がはずんでいった。

私から今までに取り組んできたことを説明すると、思っていた以上に感動してくれていた。そのことがなぜなのかは、わかるような気がする。それは、上勝がどん底からはい上がってきて自信と誇りを取り戻したということにある。中米人のもつ独特の明るさは、国の誇りと個性にあふれている。ほんとにうらやましいくらいだ。この共通点が、お互いのつながりを感じているのだと思う。仕事をつくるということは、工場誘致をすることもひとつの方法ではあるが、地域にあるものを生かして産業を起こしていくことも必要。国際化時代を迎えて世界の中で、このことを学び気付くことの大切さをＰＲＥＸを通じて感じている。

ともにしあわせになるしあわせ

フェリシモ　コーポレートスタイルデザイン部
コーポレートコミュニケーショングループ
グループリーダー 部長
吉川 公二

当社は「しあわせ社会学の確立と実践」を経営理念に掲げ、「ともにしあわせになるしあわせ」を中核価値といたしております。当社では、事業活動を通じて「しあわせ」社会の実現のために多くの皆様方と一緒に「ともに」続く企業として実践を続けています。

これまでにＰＲＥＸを通じて、パラグアイやウズベキスタン、キルギスなどからの研修員を受入れました。馴れない日本での研修であるにも関わらず、これまで来社されました全ての研修員が、事前によく予習を済ましておられたことに驚くとともに、個々人のその高いパッションに感心をいたしました。また私の拙い説明にも一所懸命に聞こうという姿勢で参加され、レクチャーの後には的を得た質問もたくさん出ました。

各国・各地域毎に社会や経済の状況は違うとは存じますが、ビジネスの原理は共通だと思います。特にマーケティング・マネジメントに関する話題は、どの国のどの産業にとっても重要な要素です。日本の社会も少子高齢化時代を本格的に迎えます。そういう意味では今後日本企業も、グローバル化を視野に入れた戦略を実践していくこととなります。これからは、教える側と学ぶ側という立場を超えて、新たなるビジネスパートナーという関係づくりも大切ではないかと考えています。

途上国の石杖となる支援

泉南乳業　代表取締役社長
吉田 茂夫

二〇〇七年以来、ＰＲＥＸの研修のうち、特にアジア地域の研修員を中心に当社を訪問いただき、食品製造会社における品質管理のあり方や産学連携による新商品開発に関する講義そして意見交換会をさせてもらっている。実際に工場も見てもらう。

我が社では、社会貢献活動の一環として、地域住民に対する定期的な一般見学会や、職業訓練の場の提供を行い、自社の経営活動を実際に見ていただくことを重視しているが、研修員の受入れもこれらと同様に考えている。第三者の立場から企業を見てもらうことで、刺激を受け、今まで気付かなかったことに気付くという経験もした。また将来的なビジネス展開を考える上で、情報収集ができる良い機会であるとも考えている。

これからはアジアの時代である。ＰＲＥＸの活動は、今すぐに成果が見えるものではないが、将来、途上国の石杖になる支援だと考える。まずは、研修の成果を見える形で日本国内に公開することが必要であろう。また、インターネットを活用し、帰国研修員からいろいろな意見、感想を聞くことで成果もまとめられるのではないか。「関西、大阪のために」というモットーにも共感している。ただし、思い切ったアクションを起こさない限り、変化はない。変化にはリスクもつきものである。これからの思い切った事業展開にも期待したい。

主要講師

人材交流が紡ぐ平和

神戸大学　教授　石原 享一

尖閣諸島をめぐる日中間の応酬がかまびすしくなっています。ここで想起されるのがアルザス・ロレーヌ地方の帰属をめぐるドイツとフランスの確執です。根底にエネルギー争奪戦争の歴史があることも尖閣問題と似ています。一九五二年、独仏はＥＣＳＣを設立することによって通商障壁を除去し、地域統合への道を拓きました。

尖閣問題も同様です。経済文化交流を促進し、東アジア地域統合をめざしてこそ解決への方途が見えてきます。その意味で、ＰＲＥＸが担う人材育成支援の活動は歴史を変える大きな力を有しているのではないでしょうか。

私もこれまで十数年間にわたって、中国からの行政研修や中小企業研修の講師としてお手伝いをしてきました。ＰＲＥＸの仕事が効率的で、しかも研修員へのサービス精神旺盛なることにいつも感心させられます。企業出身の理事や出向者がもつビジネス・マインドとスタッフの国際協力への熱意とがなせるわざでしょう。「日本の社会経済発展の経験」を中国語で伝えるのはそれほど容易なことではなく、私自身もＰＲＥＸによって鍛えられ、育ててもらいました。研修員を大学に招いて、ゼミの留学生と学習交流会をもったこともあります。和気藹藹とした教室の雰囲気が今も懐かしく思い出されます。

独特の存在感を増すＰＲＥＸ

食品コンサルタント　上田 栄一

ＰＲＥＸが、この二十年間に交流された国・地域百三十一は現在の国連全加盟諸国の六十五％を超えています。しかも一万三千名を超える研修員を受入れてこられました。これらは偏に関西の産官学が強力な連携と支援をされ、同時にＰＲＥＸがその実行機関としての役割を十二分に果たし機能してこられた賜物に他なりません。

私は二〇〇六年度より中米の食品対日貿易振興に携わってまいりました。当初三年間は単年度単位の研修でした。現地の強い要望を受け継続した昨年度からは、今後三年間を各国内で内容をリレーし、毎年事前にＴＶ会議を行うプログラムに変えております。これはＰＲＥＸの担当職員の方々が前段の研修と現地の状況を大いに議論・検討された結果、新たな成果を求める意思の現れだと思います。これまでにＰＲＥＸの研修に参加された途上国は今後大いに発展されることでしょう。その時来日した研修員の方々がその国の中心人物となって活躍され、日本の良き理解者、良きパートナーとなってくれることと思います。ＰＲＥＸは着々と現地の同窓会を組織しております。それが今後良きネットワークを形成するに違いありません。これらＰＲＥＸの真摯な努力と熱心な創意工夫がその時大輪の華を咲かすことと確信しております。

北京の思い出

流通科学大学　教授　上田 義朗

もう十年以上も前のことである。一九九八年七月に中国人経営者を対象にしたＰＲＥＸの日本研修の講師を引き受けた。どのような内容であったか今では忘れてしまったが、おそらく経営戦略論やマーケティング論の青臭い話をしたにちがいない。

その後、日本研修に参加した女性経営者からＰＲＥＸを通して、国連開発プログラム（ＵＮＤＰ）が主催する中国・北京の「服飾・繊維業セミナー」の講師を依頼された。それまで私は上海や広州を訪問したことはあるが、北京は未訪問であったので即座に快諾した。一九九九年七月のことである。

当時の北京では天安門広場の周辺で巨大な建物が建設中であった。また主催者の配慮で万里の長城や故宮博物館を見学した。この北京訪問に家族と東京在住の義母が同行した。義母は現在八十歳を越えているが、小学生まで北京で育っている。その当時の住居を訪問することが同行の目的であった。それらしい建物が幸いに見つかり、少しばかり親孝行することができた。ＰＲＥＸで私は現在まで講師を続けているが、単なる情報や知識の提供ではなく、研修員やその国に対して敬愛の念をもつようにしている。研修を通して心と心の交流ができればと思う。今回、この懐かしい北京の思い出を紹介するに当たって、この気持ちを改めて強くしている。

PREXのウーマンパワー

クリエイション　代表取締役　内海 政嘉

私はＰＲＥＸの研修講師を努めて十一年になる。ＰＲＥＸについては当初より、「ウーマンパワー」を感じている。現地では、ホテルと訪問先の往復、戻ってからの事務など、濃密スケジュールをくたくたになりながらもこなす責任感と力強い姿が印象に残っている。

モンゴルで食品工場を訪問したときのこと。研修員が学んだ経験を活かし、ＱＣや５Ｓ活動を見事に実行。これには驚かされた。研修への参加だけで、ここまでできるとは思っていなかった。キルギスで研修員が経営するレストランを訪問したときのこと。そこには自分を信じ、リスクを恐れずチャレンジするたくましい姿があった。「訪日前、不安一杯で事業をしていたが、日本での研修が大きな自信となった」と言われた言葉が忘れられない。研修で得た知識や経験が、経営者としてのマインドを大きく変えたのである。

研修員が経営するカフェでの食事、宿泊したゲルでの熱い語らい、その中で感じた文化や価値観の違い、バザールで見た庶民生活など、思い出は尽きない。その中で、友人を得たことは、私にとってかけがえのない財産となっている。

ＰＲＥＸの研修は、途上国の発展のみならず、互いの交流を深め、理解し合える架け橋になっている。今後、さらなるご活躍とご発展を期待する。

研修でエンジョイ

大阪産業大学　教授　大津 定美

初めてＰＲＥＸにお邪魔したのは、大震災の前後ではないかと思う。たしか「ロシア極東地域市場経済セミナー」のお手伝いをし、修了式後の挨拶で「必ずや復興して見せます」と場違いな力み方をしたのを覚えている。私の専門のロシア経済が体制崩壊で大混乱の時代、極東地域はさらに酷いどん底の頃で、それと神戸の街の崩壊ぶりに圧倒されつつ、「でもなんとか」という思いを研修員と共有できた、と思ったのであろうか。

それ以来十五年以上、ロシアも貧困から豊かさに転じ、再「帝国化」の危険さえ見せている。最近では中央アジアからの方々の研修にも毎年のように参加し、今年三月には現地訪問、多くの人に再会できた。ここでもこの十年の変化に驚かされる。格差拡大や政治の不安定など、大きな懸念材料が残るが、これはグローバリゼーションの流れに乗っていることの証しでもあろう。研修成果の評価のためにも「続ける」を合言葉に「E-Journal」の発行を始めた。

ＰＲＥＸでのお手伝いで、私にとって何よりも嬉しいのは、研修員に身近に接し、議論し、現地の情報をリアルタイムで聞くことができることだった。時には京都の私宅に来てもらって、ウオッカをやりながら、個人的な交友も持てる。その人が活躍している国や地域、社会の空気が伝わってくるのだ。有難い話だ。

世界で花開く関西の種子

大西マーケティング　代表　大西 秀雄

この大阪の地に関西とアジア・太平洋地域を中心に国際交流や研修を通じて多大な貢献をされてきたことに対し、まずは敬意を表したいと思います。私も講師の一員として今までインドネシア、ベトナム、マレーシア、中央アジア諸国等のビジネス研修に関わり日本の良いところをお教えしながらそれぞれの国の発展を願って参りました。

近年一部の国には日本のみならず欧米の良さも取り入れ、それぞれ実績もあげてきておられますが、やはり日本の技術力や商品へのこだわり、それに加えて企業理念による社会への貢献について学んでもらえ、喜んでいただいていると都度実感しております。ＰＲＥＸが関西の企業や官公庁の思いで二十年前に創られた種子が今アジアを中心に世界で花開いていることを誇りにしてもらえるのではと思います。

今までしてきたことに自信を持つと同時に新しい工業化を遂げつつある各国からもエネルギーを受け共に学んでいくことも今後重要になるかも知れません。今後は海外の研修員と日本の中堅社員との交流会や共同研修会等も案外日本企業のさらなる従業員の国際研修にも役立ち両方メリットがあるかも知れません。

日本も真の国際化が益々重要になってきますが欧米の感覚だけではないアジアも加味したパングローバル化が今後の発展のためになるのではと確信しています。

人材交流は終わりの無い取り組み

滋賀大学　教授　小田野 純丸

設立二十周年という節目を迎えられましたPREXの活動に心より敬意を表します。この間、PREXの取り組みは内外で高い評価を受けてきております。それは地道な活動を確実にそして真摯に継続してきたためと思われます。

私がPREX事業への参加機会をいただいたのが一九九一年のことでした。当時はバブル経済の崩壊が明らかになった直後でしたが、それでも日本経済にはバブルの余韻が残っていて、アジア諸国からは羨望の的として受け止められていた時代でした。日本的経営には特に強い関心が寄せられていたことが思い出されます。短期間で経済成長を達成させた日本経済について、東南アジア諸国の経営者はその鍵となる要因を学習したいという意欲に溢れていました。人事管理や組織、技術開発、国際競争力など多くの課題に「日本的」という形容詞がつけられていたことも当初の特徴でした。東南アジアからの研修員はこうした日本の経営について、少なからず何らかの知識を有していたことは驚きでした。PREXの研修の多くが、関西圏にある企業訪問を組み入れていたことから、研修プログラムは、彼らが有していた画一的な理解と日本で観察した多くの事実とのギャップを埋める貴重な経験になったことは間違いありません。

その後、IT技術やグローバル化、環境問題といった新たな課題が登場し、PREXの扱うテーマが急速に拡大することになりました。それでも、PREXの主導する企画は頑なに関西圏の中小企業訪問を組み入れる研修を展開し、研修員の日本の経営に関する理解と関心を確実に深めることに大きく貢献してきました。私が関わった企画を通じて、多くの研修員から毎回のようにPREXのプログラムの有効性とユニークさについて聞かされたことが思い出されます。この高い評価に結びつく要因として、PREXが独自に作り上げた企画と取り組みを挙げることができます。当然、参加をする私自身にとっても、その準備段階から新鮮な思いで貴重な学習をする機会となりました。PREXスタッフの方々との事前の打ち合わせや検討会を通じて、研修テーマの中心課題への接近についてさまざま教えていただく機会を持てたことはとても幸運なことでした。

その時々の要請やニーズに対応しつつ、ハンドメイドのプログラムを作り上げてきたPREXの関係諸氏の努力には頭が下がる思いです。研修員の声ばかりでなく、講師として参加をした私の経験からも、PREXが進めてきた研修事業の意義は高く評価されるべきと考えます。人材交流という要請は、終わりの無い取り組みであることは間違いありません。PREXの取り組みが新しい課題を取り入れながら、今後益々発展を続けていって欲しいことを心より期待しております。

国際交流の利益

大阪大学大学院　教授　高阪 章

ここ数年、PREXシンポジウムの司会をお引き受けしている。当初に比べ、最近では余裕ができて(?)、パネリストの千差万別の発言からこちらが刺激を受けて日頃考えていることを再確認したり、もやもやしていた論点が見えてきたりして、結構楽しい。

なかでも、アジア・太平洋地域の人材交流事業活動から、途上国が日本の経験に求めているものと我々自身が日本にもっている認識のあいだに微妙にずれがあることが興味深い。相互理解というのは多分、そういう「ずれ」から免れることはないのだろうが、交流することで「ずれ」に気づくことも交流の意義だろう。これは、日本人同士でもよくあることであり、次元や規模は違え、本質は同じというわけだ。だから、交流は面白い。

比較優位論という、国際貿易の利益を説明する理論は正にこの核心を突いている。人でも社会でも国でも異質であるからこそ交流することから便益が生じるというのがそのエッセンスだ。こう考えてくると、あくまで太平洋人材交流事業の一環としてだが、他の先進国、また新興市場の同種の人材交流（育成）機関の活動から、もっと学べるところはないのだろうか。人材交流事業自体の国際交流から、改めて他と比べてPREXの強み・弱みを認識することで、また新たな飛躍が望めるかもしれない。

Think Globally Act Locally の視点から

兵庫県立大学大学院　教授　佐竹 隆幸

ＰＲＥＸとは十年余のお付き合いになりますが、さまざまな出会い・交流・認識を経験してきました。以下では振り返ってみようと思います。

昨今、「グローバリズム」という用語が氾濫していると同時に「地域主義」への再認識が叫ばれています。「グローバリズム」とは地球を一つの共同体と考える概念です。近年では多国籍企業が国境を越えて地球規模で経済活動することが多く、国家や企業が世界を一つの市場として活動しようとしています。一方、「地域主義」とは、一定地域がその地域の風土的個性を背景に、その地域に対して一体感を持ち、地域の行政的・経済的自立性、文化的独立性とを追求することです。

日本経済閉塞化がいわれていますが、今こそ両者を融合し、「地球規模で考えながら、自分の地域で活動する（Think Globally Act Locally）」ことを再認識するべきではないでしょうか。地域活性化を考えるとき、日本国内での議論に終始しがちですが、あらゆる分野において世界的な視野で考えながら、地域が連携協力してさまざまな活動や取り組みを行うことが基本ではないかと考えます。

この架け橋となるＰＲＥＸが機能を発揮することが、日本・地域の視点から考えて重要であると考えます。ＰＲＥＸの今後に大いに期待したいと思います。

教材作りに専ら勉強

元大阪国際経済振興センター　アドバイザー　河村 一雄

私とＰＲＥＸとの出会いは、一九九八年九月九日インテックス大阪で開催の「ダイナミックアジア・リーダーズセミナー」の第一分科会でパネリストをした時である。終了後、中村さんという女性がＰＲＥＸの名刺を出され、是非協力して欲しいので、後日連絡しますとのことだった。

数日後、一度ＰＲＥＸへ来てもらいたいとのことで、出掛けて、峰村永夫専務理事らからＰＲＥＸの活動内容を聞き、研修への協力の依頼を受けた。私のＢＰＣネットワークセンター（現ＩＢＰＣ）の仕事内容を伝え、「私でよければ」と即答した。学術的なことは喋れないし、過去に実体験したことを話すのが専らだったが、具体例提示がよかったのか、日本および現地での、顔と顔をつき合わせた講義、そして、遠隔研修（ＴＶ会議）での指導が増えていった。

ＰＲＥＸが関わっておられた「インドネシア貿易研修センター」の設立プロジェクトにも途中から参加させてもらった。八回のうち五回、ＪＩＣＡの短期専門家として彼地へ赴き、幸い二つの成功例も出た。貿易商社時代に多くの製品を扱ったこと、ＢＰＣで各業界の市場動向などを書いていたのが役立ったが、次々と新製品が出てきて、コメントする資料集めで図書館などへ通い、輸入品や国産品の調査で猛勉強を続けた。

そのお蔭もあり、三年前インドネシア外務省から感謝状をもらった。ＰＲＥＸには、二十人余の講師を紹介し、その何人かが未だ活躍中である。ＰＲＥＸの活動が三十年、五十年と続くことを願っている。

二〇〇〇年二月、インドネシア貿易研修センター（ＩＥＴＣ）での第六回特別研修プログラムの修了式。河村アドバイザーには、短期専門家として「日本市場へのアクセス」について講義いただいた。本プログラムは、一九九七年から四年間計八回の現地研修開催等を通して研修運営のノウハウや講義内容をＩＥＴＣに移転し、プロジェクト終了後には現地によるセンター運営を目的として実施された。

河村一雄先生は、本ご寄稿文を頂戴した直後、昨年十一月にご逝去されました。生前、河村先生から賜りましたご支援、ご協力に対し、心から感謝申し上げますとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

異文化との出会いで拡識・拡能

サミット・ラボ　取締役社長　杉村 光二

私がＰＲＥＸの専門家派遣に関与し始めたのは一九九九年（平成十一）三月からである。その後一～二年おきに海外に出向くと共に訪日研修を加えるとほぼ毎年、経営管理や生産管理面でお手伝いさせていただいてきた。ＰＲＥＸ設立二十周年の約半分の十余年となり長いとも言えるし、無我夢中でアッという間に過ぎたとも言えて複雑な心境である。

訪問地や研修ごとに多くの思い出と気付きや学びがあるが、特に印象深いのは富士山頂上とほぼ同じ標高三千六百メートルのチベット、ラサでの研修である。酸欠・高山病に罹らないよう準備と体調管理、さらに酸素ボンベ常備の部屋での研修講師はなかなか体験できない。

国内の中小企業を対象とさせていただいている私の仕事柄、どうしても内国的な事象に目を奪われがちで、グローバル化といってもなかなか現実味がわかない。そこにＰＲＥＸから海外の異国民・異文化を知り種々挑戦する機会を提供してもらうことのお蔭で、知識や能力を拡げることができている。言わば私の拡識・拡能である。

今後ともＰＲＥＸが地味ではあるがキラリと光る独自性を発揮し、支援対象地域の発展の礎となるよう国際貢献・社会貢献活動をし続けていただきたいと願うと共に、その活動に少しでもお役に立てればと思っている。

チベットで企業幹部に経営戦略の立て方の基本について指導する杉村先生。中国各地で企業診断や経営管理の講師を務めていただいた。

ＰＲＥＸ講義から得たものと今後への期待

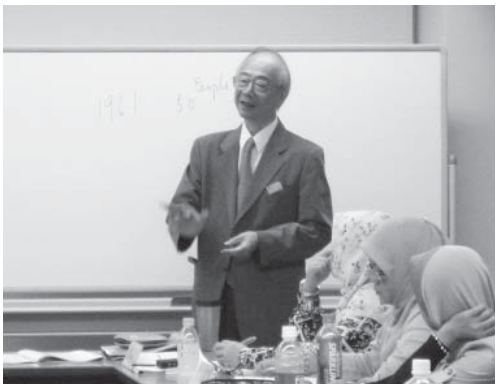
桜美林大学　教授　鈴木 勝

ＰＲＥＸのお蔭で、多くの国々の専門家と交流ができた。メコン河流域、中央アジア、中国の内陸部、極東ロシアなど、それまで比較的、接点の少ない人々だ。専門の「国際観光振興論」に関して、得たものが少なくとも二つある。一つは、グローバル社会にとり「国際観光」が極めて重要だということの再認識。もう一つは、「観光立国ニッポン」に舵取りした我が国は、経済、人口、文化などに照らし、訪日外国人が極めて少なく、〝発展途上〟であることを知ったこと。得たものが多いＰＲＥＸ講義も、私が大阪から東京に移りやや縁が薄いが、今後も機会あれば参画したい。ところで、関西での「ＰＲＥＸ活動」は今後、ますます重要性を帯び、拡大させる必要がある。なぜならば、「国際的な人材育成」に関する協力や支援活動は、ややもすると東京中心だが、この傾向をシフトさせる必要がある。専門の「国際観光」と全く同じポジション。現在、訪日外国人の関西への訪問率は首都圏と大きな格差がある。国際空港も成田に加え羽田も登場し新たな局面だが、海外からのリピーター客を毎年〝麗しの日本〟に訪問させ満足させるには、一極集中では不可能であり、関西を中心とした二極化が必須。国際的な人的交流の拠点作りのＰＲＥＸ活動は、関西を中心に、さらに活発にそして拡大させなければならない。

「産・官・学・民」一体の機関・PREXへ

PREXシニア専門家　杉本 定夫

現役を引退してから些かでも社会のお役に立つことができれば、と思っておりました時にPREXのシニア専門家制度を知り、二〇〇四年に応募していたからおよそ六年間活動できる機会を与えていただいたことに深く感謝すると共に、大きな達成感と誇りを感じております。



マレーシアの行政官が参加する「JICAマレーシア行政初級管理職研修」で日本企業の経営の特徴や初級管理職の役割について講義する杉本専門家。

なかんずく印象に残っておりますのは、中央アジアへ中小企業支援で参りました時、キリギス大統領府の高官がPREXの同窓生で、帰国後立派に活躍されているのを目の当たりにしてPREXの存在感を改めて認識したことでした。

マレーシアの研修員の方々とは毎年接しておりますが、世界や日本の政治・経済・社会に関する鋭い質問や指摘が少なくなく双方向のディスカッションを活発に行っております。

まさに「人材交流」であって、決して一方的な「人材育成」ではなく、講師としても貴重な自己啓発の場となっております。

シニア専門家も現役時代の経験や知見のみに依存することなく、時代の変遷や社会の革新を反映した知識や情報を常に吸収することが肝要と痛感しております。

PREXは関西独自の貴重な存在で関東在住の知友から羨ましがられていますが、従来から多方面で支援戴いている「産・官・学」に加え、何れにも属さないシニア層中心の「民」も一翼を担う「産・官・学・民」一体の機関としてPREXが一層その存在価値を高められることを祈って止みません。

中小企業の技術支援をテーマに

阪南大学　准教授　関 智宏

PREXと私との関わりは、私が二〇〇六年に阪南大学に勤めて間もなくしたころに、当時、阪南大学学長であった大槻眞一先生からお声掛けをいただいたのが最初である。中小企業政策セミナーのなかで「中小企業の技術支援」のテーマで講義をしてほしいとの依頼であった。

中小企業の技術支援に対して、歴史的に重要な役割を果たしてきたのは、公設試験研究機関（公設試）である。当時、植田浩史先生（慶應義塾大学）の研究プロジェクトの一環で、日本の公設試を調査し、その成果をまとめたところであった（『公設試験研究機関と中小企業』創風社、二〇〇六年）。そのこともあってのことであろう。

しかし、大槻先生はもとより現在の佐賀県窯業技術センターや滋賀県工業技術総合センターで要職のご経験もあり、私が講義をさせていただくには身に余る思いであった。それでも大槻先生は、私が適任だとPREXにご紹介いただいた。

最初の講義以降、今では、技術支援に加えて、中小企業支援施策の講義やコースリーダーも重ねてさせていただいており、PREXとは深く関わらせていただいている。私自身、貴重な機会を得ながら、日本の中小企業政策の歴史的展開や到達点、課題などについて再考する良い機会ともなっている。

中小企業の経営革新事例と診断士制度を紹介

阪南大学中小企業ベンチャー支援センター
アドバイザー・中小企業診断士
関浦 照隆

ＰＲＥＸの研修への協力として、淀屋橋の阪南大学サテライト会議室での講義と事業所見学を実施しています。午前には、大阪の中小企業の経営革新への具体的な支援内容についての講義では、中小企業が、国の支援施策を活用して助成金や融資を受けるため、中小企業診断士が果たしている役割をお伝えしています。午後は、支援先企業の経営者から取り組み内容の説明の後、その企業を訪問し、現場視察を行い、体験を通じて講義内容を検証していただいています。

初めて担当した「ボスニア・ヘルツェゴビナ研修」では、中小企業診断士の制度についての質問は、試験制度や合格率等に集中しました。その後市場経済の進展により、「南東欧研修」や「アンデス研修」を担当しました。そこでは、中小企業診断士制度が、中小企業支援で果たす役割についての質問が増えてきています。研修員からは、自国での経営支援を念頭においた鋭い質問を投げかけられます。訪問企業の選定が、研修員の満足度を向上させるポイントです。中小企業支援の強化については、これまでの経理、税務、労務等の常に正解のある問題の指導から、状況依存型で経営戦略、商品企画、販路開拓などの正解のない問題への指導へと変化しつつあり、中小企業診断士の果たす役割に期待感が増えています。

遠隔研修の草分けＰＲＥＸ

玉川大学　教授
立木 デニス

一九九〇年代半ばに、マレーシア行政官を対象とした総合的品質管理（ＴＱＭ）に関する講義をしてほしいと呼ばれたのが、ＰＲＥＸとの関わりの初めでした。当時ＴＱＭは民間部門の経営手法と言われておりましたが、マレーシア政府は公的部門でも応用は可能と見ておりました。

「政策が素晴らしいにもかかわらず、行政サービスが悪いのはなぜか」がマレーシア政府の研修員からよく聞かれた質問です。今では、研修で国民に質の良いサービスを提供する方法を学んだことに対し感謝を述べるマレーシアや他国のＰＲＥＸ同窓生に出会うこともあります。

ＰＲＥＸは遠隔研修では先頭を走っていました。一九九八年大阪・タイ・インドネシアを結んだＰＲＥＸ初の遠隔研修を担当する機会を得ました。その日の実り多いディスカッションを通じて、私たちは学ぶことには場所も時間も障壁にはならないことを理解することができました。さらに、六年後、日本にいるマレーシア研修員が本国の上司に自分たちのアクションプランを発表する遠隔会議も担当しました。今日、遠隔研修は日本の政府開発援助（ＯＤＡ）で使われる研修手法となりましたが、この新しい研修手法の開発において、ＰＲＥＸが草分け的役割を果たしたことを忘れてはいけません。

最後にＰＲＥＸの特徴について述べておきたいと思います。多くの人材育成プログラムは研修員に豊富な情報を提供しますが、自国に戻ってからのフォローアップ支援には力を入れていません。ＰＲＥＸはその点違っており、同窓会を設立し、定期的にフォローアップの訪問を行っています。私は幸運にも一九九三年のフィリピンへの出張に参加することができました。そして、同窓生の友情が、更なる学びやネットワークを醸成していることを知りました。このように、日本での研修を終えた研修員の帰国後も長く、ＰＲＥＸの遺産として残っています。

アジア・太平洋や世界の他の国における行政官や経営幹部の人材育成を二十年間推進してきたＰＲＥＸへの祝辞とさせていただきます。

一九九九年「関経連アセアン海外研修」でバンコク、ジャカルタ、大阪の三地点をテレビ会議システムで結び、海外二拠点同時に共通のプログラムでの研修を行なうマルチポイント型遠隔研修を実施。大阪から基調講演する立木教授（左端）。

中国・大連の街を歩きながら

流通科学大学　教授　崔 相鐵

二〇一〇年九月から中国大連市で生活している。一年間の予定で、東北財経大学の工商管理学院で客員教授として招聘されたからである。

私が大連市に初めて足を運んだのは、ちょうど十年前のプライベート旅行。大連市と縁を持つことになった時と、私がＰＲＥＸと出会った時は偶然にも重ねる。私が中央アジアからの研修員にはじめて「マーケティングの基礎」を教えたのが二〇〇〇年一月で、私の大連初入りは同年八月だったのである。以後、私は、流通やマーケティングの話をもって、研修員らと接した。

ところで、大連で住むことになり、研修員らに何か重要なことを伝えなかったような気がしてならない。思い起こせば、最初にこの街を訪ねた時と今は隔世の感がある。端的に十年前とは打って変わって、百貨店やスーパーで売られている品揃えの広さや深さは、日本に引けをとらない。にもかかわらず、私はＰＲＥＸで講義する際に、優れた日本（遅れている途上国）の「製品」を前提にしたマーケティングや流通に拘りすぎていたのではなかっただろうか。

私のマンションの目先には有名な労働公園があり、大勢の市民が犬を散歩させている。十年前には想像もできなかった風景だ。しかし、困ったことに、日本では当たり前の犬の糞の始末までは至っていない。毎朝、大学に行くために、労働公園を横切ってバス乗り場に向かう私には、道ばたの犬の糞との格闘が待っている。

日本が、そしてＰＲＥＸが、途上国に教えるべきは、もはや製品ではなく、「サービス」のことではないだろうか。昨夜、大連の友人と遅くまで飲み過ぎ朝寝坊した故に、仕方なく乗った廃車寸前のタクシーの乱暴な運転にやきもきしながら本当にそう思った。

中央アジアの研修員に日本の流通やマーケティングについての講義いただいた崔教授。

中東欧体制転換とＰＲＥＸの貢献

岡山大学大学院　教授　田口 雅弘

一九八九年にポーランドで非共産党政権が成立し、新政権は一気に経済の資本主義化を進めた。選抜されたポーランド人研修員が日本にやってきたのは、まさにポーランドが資本主義化を暗中模索している最中であった。社会主義から資本主義に移行している社会に、日本から何をメッセージとして伝えるかは実に難しい。まさにＰＲＥＸの腕の見せ所であった。

ＰＲＥＸのスタッフが作成したプログラムは、講義、大・中小企業の実地見学を組み合わせ、日本的経営システムのエッセンスを伝える絶妙のものであった。このときの研修は短いものだったが、研修員には相当刺激的であったのだろう。その後彼らは、ポーランドで日本的経営の伝道師としてポーランドの企業で活躍した。

私たち日本人は、自分たちの持っている経験や利点を理論づけて説明するのは得意ではない。まず、「日本は特殊で普遍性に乏しい」と思ってしまうからだろうか？ しかしながら、特殊でない経済は存在しない。それぞれが独特のシステムと、成長基盤を持っている。ポーランドは、欧州新興国のトップランナーとして大きく成長した。今、二十年前を振り返って、当時のＰＲＥＸスタッフが思いを込めた日本からのメッセージは、確実にポーランドに届いているとしみじみと感じる。

いつまでも帰国研修員との絆を大切に

PREXシニア専門家　冨永 雅久

シニア海外ボランティア活動中のコロンビアでお会いした研修員（二〇〇八年二カ月間）と、パラグアイの研修員（二〇〇九年三週間）の件で、PREXでお手伝いする機会を得ました。PREXの皆さんが年齢の上下に関係なく率直な意見交換を行い、見事なチームワークで海外研修員をお世話する雰囲気が大変印象的でした。事前に研修員の要望を調査して木目細かく打合せを重ね、最善の研修プランを目指す真摯な姿勢がありました。厳しい経済環境の中でも工場見学で熱心な説明で実に温かく対応してくださった数多くの会社も含めて、信頼度の高い人のネットワークとノウハウはPREXの貴重な財産だと思います。

研修員の日報で研修状況を把握し、何回かの「振り返り」で軌道修正を行い、帰国後の活動計画書の作成まで指導される行き届いた配慮が、研修員の「何でも学ぼう」とする意欲的な姿勢を引き出し、大きな成果につながったと思います。日本での研修を始点とした帰国研修員との絆を大切にして、今後も息の長い交流を続け、発展への原動力を持った人材の育成に貢献されますように期待しています。

中米地域と日本の食文化交流へ

ヒューテック　代表取締役　西 龍治

私は二〇〇六年度に開始された中米の対日貿易振興研修に携わっています。昨年度までは、自国の加工食品や食材を日本市場へ輸出することを目標とし、日本の食品市場および消費者行動の特徴の調査することを研修カリキュラムの中心にしてきました。しかし、今年の新しい切り口として、グローバルマーケットの視点から資源優位をビジネスに機能性食品開発、農・畜産物加工、水産物加工、「健康」に関連した食品開発で産・官・学との連携や振興を提案したいと考えています。日本の市場に向けての食品、食材輸出産品は漁業、農業（野菜、フルーツ）、酪農畜産業に於いて日本の技術を学んで活かしていける一次産業への適応性から検証していくことで、より日本市場に適したタイムリーな戦略展開が可能となります。また、中米カリブ地域は、フルーツが豊富なことから、フルーツの酵素を活かした機能食などができれば嬉しいです。日本の発酵技術は味噌、酒、醤油、漬け物などで培われてきたノウハウが有り、日本の製薬会社の食品は健康関連食品として、輸出産品開発において参考になると考えられます。

このように中米の現状に合わせて、PREXの職員とともに毎年カリキュラムの見直しや変更を検討し、創意工夫を重ねてきました。今後、中米・カリブ諸国から日本への輸出産品が増えるとともに、PREXのネットワークを活かして食文化交流が計られることを期待します。

PREXは学びの場

プール学院大学　国際文化学部　教授　平井 拓己

PREXの「中小企業振興コース」で研修員に講義させていただくようになって、前職の大阪府立産業開発研究所時代から数えると約十年にもなる。地域の経済と中小企業政策についての長時間の座学を熱心に聴き、質問を投げかける研修員からは、学ぶ意欲がひしひしと伝わる。彼らに対しては、政策立案担当者自身が中小企業の現場を知ることの重要性と、日本の経験を丸呑みして真似るのではなく、客観的に評価して最も適した政策・手法を自らが考えるべきだ、というメッセージを伝えることに努めてきた。

PREX研修は、私にとって最もやり甲斐のある仕事の一つであるとともに、大切な学びの場でもある。研修員の発表からは、各国の中小企業振興の捉え方や、政策立案実施の体制の違いが改めて浮き彫りになる。中小企業振興に向けた課題は大きく、その重要性は今後いささかも薄れることはないと感じさせられる。

その課題に取り組むに当たり、PREXスタッフの献身的な仕事ぶりは特筆されるべきである。研修員の質問や相談に真摯に対応する様子や、事前の計画段階から常に改善を目指す姿勢に触れるにつけ、人材育成という最も難しく、また尊い国際協力活動に携わっている彼らの働きに敬意の念を禁じ得ない。

私の活力はＰＲＥＸから

ＰＲＥＸシニア専門家
福田 徹士

私は、同僚の吉岡さんと二〇〇七年八月からＰＲＥＸシニア専門家としてＰＲＥＸの事業に参画している。ＰＲＥＸの設立の趣旨「途上国と関西にとって、なくてはならない存在をめざす」という理念が大きな励みとなっている。

私も会社生活を終えて、なおこの世の中になくてはならない人として活動できたらと思っていたところ、私の会社経験を途上国の方々に伝える機会に恵まれたことに大きな喜びを感じている。

現在、私は「シリア総合経営管理研修」を担当しているが、その最大の願いは、単なる座学による知識の伝授だけではなく、帰国後にどれだけ実行し、成果を挙げてくれるかにある。そのために座学、工場見学に「ケーススタディ」を織り込んで、即戦力として活かしてくれるノウハウも伝えている。有り難いことに研修員は、選ばれて来た人たちばかり。理解は早く、貪欲に質問をして自分のものにしてくれている。

その証拠に来日時の考え方をすっかり変えて経営者らしくなった研修員もいた。また、帰国後、積極的に横展開を図り、その成果を次々と伝えてくれていて、今も研修が継続していることである。「なくてはならないＰＲＥＸ」は、私の知的財産作りの継続であり、活力の源泉となっている。

「アスタ・マニャーナ」の国でも時間厳守

ＰＲＥＸシニア専門家
藤田 和久

一般的にラテンアメリカの人々は、アスタ・マニャーナ（明日までに）と時間にルーズで、またチームワークも苦手と言われています。そのような人達が、日本に来てＰＲＥＸで研修を受けると、人が変わった様に、集合時間の三十分前に集まり、グループで研修成果をまとめ発表するようになるのです。私は「パラグアイ品質生産性向上コース」で、お手伝いさせていただいたが、研修受入れ前にＴＶ会議で現地の要望を確認し、期間中は、一週間ごとに振り返りのまとめ発表等々、非常に細かな指導の仕組み作りをされていました。それも一重にＰＲＥＸとしての二十年のノウハウの積み重ねと存じます。

さらに、ＰＲＥＸは、帰国研修員フォローアップ現地調査を実施されています。私の知る限り多くの研修員が帰国後キャリアアップで転職なり留学したりしています。その意味で、継続維持可能な人材交流の観点からも、帰国後フォローが大事と存じます。それに加えて、研修を担当された方々がご多忙の中、個人的に研修員と帰国後もメールで情報交換されているのも、人材ネットワーク形成に大いに役立っていると存じます。皆様の益々のご活躍とご発展を祈念しております。

研修員からのメール

福井県立大学　教授
ベロフ・アンドレイ

二〇一〇年十月二十一日、私のもとにロシア語で書かれたメールが、カザフスタンから届きました。送り主は、カザフスタンの法律事務所に勤めている方です。彼女は昨年にＰＲＥＸの研修員として、私の講義に参加しました。メールの中で彼女は、会社の動向や彼女の活発な社会活動について、写真付きで話してくださいました。また、日本や大阪、そして今後の講義予定についての質問も多くありました。このような手紙はこの方からだけではなく、ＰＲＥＸで知り合った他の研修員からもよく届きます。メールを通じた研修員との交流は、私にとって重要なものです。

今までのメールから見ますと、中央アジアの生徒は、日本について非常に良い思い出を持っていて、また、これからもっと日本の経済について知りたがっています。彼らは数年たって、日本から遠い中央アジアの自国に帰っても、日本の良き友人として活躍しています。このことは、講師である私にとっても、ＰＲＥＸにとっても、また、ＪＩＣＡにとっても、私たちの活動のもっとも大きな成果となっています。日本に対する良い印象を残し拡大するためにすべきことは帰国研修員へのフォローアップセミナー、メール交換、メールマガジン等でしょう。これらの活動が広く行われると良いと思います。

世界のリーダー育成にむけて

教育コンサルタント　マイケル・トンプソン

一九九〇年代に、関西外国語大学でビジネスや経済に関する教員として働いていた頃、ＰＲＥＸのアジア・太平洋諸国を対象とした研修を喜んで担当させていただきました。

十一年の日本滞在中、様々な学界、ビジネス界、政府系、非政府系機関でのワークショップやセミナーで講演を行いましたがＰＲＥＸでの講演は最も楽しいものでした。ＰＲＥＸの職員の皆さんは、自らが重要な仕事についているという情熱がありました。一緒に働いていて満足できるものでした。

歴史が証明しているように、世界中の中小企業が、国の経済発展に貢献しています。アジア・太平洋地域にも同じことが言えるでしょう。この法則を頭に入れながら、ＰＲＥＸは、近隣諸国を巻き込んで中小企業をターゲットとして支援・研修を行うという、ユニークな立ち位置を切り開きました。大阪には成功を収めている中小企業が多く存在していることから、大阪の地域は研修という面で、素晴らしいモデルです。このモデルをビジネス化することで、ＰＲＥＸは実践的な知識や専門知識を提供し、その結果、アジア・太平洋地域のリーダー達は自国の経済成長の促進と継続につながる「ベストプラクティス」を発展させることができました。

ＰＲＥＸと関わった初期の段階から、私は、ＰＲＥＸのアジア・太平洋地域の人材育成や経済発展支援への貢献を高く評価しています。この地域はグローバル経済において重要な役割を果たし、これからも世界の成長のエンジンとなっているでしょう。その成長を確実なものとするためには、強いリーダーを確実に育てていくことが必要です。ＰＲＥＸが才能ある地域のリーダーの育成に貢献していること、また将来にわたっても貢献することを確信しています。

一九九六年「ＪＩＣＡアジア経営セミナー」の研修員たちと。中央がマイケル・トンプソン先生。

ＰＲＥＸと私

龍谷大学　教授
松岡 憲司

ＰＲＥＸ設立二十周年おめでとうございます。二十年と言えば、人間ならば、成人ですね。多くの実績をあげておられるＰＲＥＸにとって、成人というのは今さらという感じでしょうが、あらためてお祝い申し上げたいと思います。

さて、ＰＲＥＸとの仕事では、色々な国の方々と出会うことができました。地域もほぼ世界中に拡がっています。その中でも印象に残っているのはメキシコです。メキシコからは個別国研修として五年間にわたり多くの研修員が来日しました。ラテン系ならではの楽しい研修員ばかりでした。当時ＰＲＥＸは中之島センタービルにあり、一階のＮＣＢホテルで開かれた歓迎会では、すぐに踊りの輪が拡がったのも楽しい思い出です。さらに研修員の一人から帰国後に結婚式へ招かれました。メキシコの結婚パーティは、まさに踊りに次ぐ踊りで、すばらしい盛り上がりでしたが、老体にはいささか厳しかったというのが本音です。

その後にもＰＲＥＸの特徴でもある現地同窓会にも参加する機会をいただき再度メキシコを訪れたり、私の研究室に六カ月の研修員がきたり、それまで縁のなかったメキシコと深い絆を築けました。これもＰＲＥＸのおかげと感謝しております。

次の二十年、さらにもっと長い将来にわたりＰＲＥＸが一層繁栄されますよう、お祈り申し上げております。

PREXとの「ご縁」

奈良県立大学　客員教授
松田 幸夫

「ネットワークを大切に」が私の信条の一つである。ありがたいことに、たくさんのお知り合いの方々とめぐり合わせていただいた。本当に感謝している。前の職場（近畿経済産業局）をやめてからもお付き合いが続いており、また大学にお世話になってからも新しくお付き合いしていただく方が増えている。古い方々は、二十年、三十年来の方も多い。しかし意外と「何でお付き合いが始まったのか?」がよくわからないことが多い。

PREXとのお付き合いもそうかと思う。インドネシア、マレーシア、メキシコ等の海外からの研修員に、地域振興等のテーマで、頑張っておられる日本各地のお話をさせていただいたり、現場に案内させていただいたりでご縁が続いている。職員さんたちがよく勉強され、しかも大変軽いフットワークで活動されていることには驚いた。仕事のみでなく職員の方々とのお付き合いもさせていただいている。ご縁ができたことは私にとってとてもありがたいことだと思っている。PREXとのご縁で新しいネットワークが拡がり、むしろ私のほうが学ばせていただいていると思っている。

松田幸夫先生は、今年三月五日ご逝去されました。生前、松田先生から賜りましたご厚情に対し、心から感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先見の明に敬意

JMコンサルティング　代表
松永 仁一

二十一世紀は、政治・経済・教育・環境・芸術・文化・スポーツと総ての分野が国際化・グローバル化しています。

私自身、企業の国際部門・延べ十六年間の海外勤務を体験させて貰った後、ご縁があって教育界―大学で教鞭をとらせて貰って十二年目にはいりますが、改めて〝人材教育・交流〟の重要性を感じております。そのことを、二十年も前に感じられ、PREXを設立された関係の皆様に、敬意を表したいと思います。

そしてPREXのサポートを得ながら、国内・海外で楽しく講演をさせていただいてますし、講演をすることは、自己の体験だけでなく、最新の正確な情報をお伝えする必要があるため、自分自身の勉強にもなっております。

初訪問したベトナムでは、勤勉で素直な人達に、将来の発展を確信しましたし、麻薬と治安の悪さのイメージを一変させてくれたメキシコ・グアナファト州への二度の出張でも、楽しく講演・討議をさせてもらいました。

失敗もしました。インドネシアへの出張直前に、九十歳を超えていた母親の容態が悪化し、より身近で介護する為に引越しをした混乱のなかで、パスポートを紛失して、出張できなくなり関係の皆様に多大のご迷惑をおかけしました。

その時も、先に現地入りしていた、PREXの三浦さんが、冷静に対応策を考えていただき〝TV会議〟の形で講演・討議ができたことも感謝で一杯です。

今後のPREXと皆様の益々の発展とご活躍を祈ります。

メキシコ・グアナファト州で企業経営者や経営幹部を対象に「輸出促進のための経営管理手法」セミナーで講義する松永先生。

PREXとのお付合い

京都大学経済研究所　教授・副所長
溝端 佐登史

PREXの評価は、研修や研修員の受入れ数、研修の優れた内容・質においてなされることは言うまでもない。しかし、PREXはその研修に携わる関係者にも豊かな経験と知識を提供し、その面でも評価されるべきであろう。私自身、中東欧・南東欧中小企業振興セミナーやロシアに関連する種々の研修に関わってきた。セミナーのたびに、新たな知見を拡充できるだけでなく、セミナーを運営する技能も鍛えていただいたように思える。長いお付き合いのなかで、もっとも印象的な事業は、現地と日本の両方で開催したロシアWTO加盟講座である。企画の作成段階から外務省プレゼンを含めお手伝いし、ハードな現地講義を楽しませていただいたことが感慨深い。ちょうどトヨタのサンクトペテルブルグ進出と重なっただけにより印象深い。私の役割は、専門分野と地域をつなぐというものであるが、PREXにも現地の実情と伝聞情報の間のずれを感じ取っていただいたと思う。この事業では優秀な研修員が集まり、今も連絡を取り合う方もいる。このほか、京都に来る研究者にはしばしば企画外でPREXにインタビューや企業訪問をお願いしている。研修員だけに縛られない緩やかで豊かな人的ネットワーク、現場を見ることで洞察力を豊かにするという態度こそがPREXの貴重な資産と考える。

PREX二十周年に得た貴重な機会

奈良県立大学　教授
村田 武一郎

私は、二〇〇七年から「中米官民連携パートナーシップ研修」のコースリーダーを務めさせていただいている。単に私が持っている知識を提供すれば済むことではなく、研修員一人ひとりの真剣さ・背景と対峙しなければならないストレスを感じてきた。また、現地へ行ったことがないにも関わらず、「中米地域はこうであろう」との仮説のもとに講義を組み立て、視察先を選定し、こうあるべきだと伝え続けることに、かなりの後ろめたさを感じてきた。

今般、コスタリカ、ニカラグアへ行く機会を得、研修を受けた人たちと長時間にわたり接し議論し、彼らの案内により、政府関係機関、団体、企業などを訪問し、そこでも議論を積み重ね、多くの知見を得た。それでも全体からすれば微細なものでしかないが、仮説があながち的外れではなかったことを確認することができた。

そして、何よりも嬉しかったことは、研修に参加してくれた人たちが、異口同音に「研修参加前と参加後とでは、ものの見方、考え方が変わった」と言ってくれたこと、研修中に作成したプロジェクト計画を着実に実行し、さらに発展させていることであった。有能な人たちが研修に来てくれていることを喜ぶとともに、今後とも、彼らのような人たちに、多様な視点と知見（ものの考え方、優れた事例など）を持ち帰ってもらうことに注力したい。

やりがいと生きがいをくれたPREX

PREXシニア専門家
吉岡 輝彦

リタイア後、現役時代のものづくり現場における管理・改善活動とそれを海外で展開してきた経験を活かすことのできる何か、できれば、海外との交流を通じた新たな活動の場を模索していた。

そしてPREXとの出会いから約五年、シニア専門家として日本の経営管理を学ぶ途上国研修員の講師を担当、教え共に学ぶという経験を積み重ねてきた。その中で、研修内容を徹底的に学び取ろうとする意欲、帰国後の自主的な現場への展開活動など、研修員の学びに対する姿勢と行動力には、国の経済発展を担うリーダーたらんとする力強いパワーを感じた。

そうした研修を経験し、PREXの姿がはっきりと見えてきた。PREXは「人材交流センター」の名を大きく超えて、途上国の経済・産業発展のリーダーであり、且つ日本の文化、社会等についての関心と理解を深めた双方の架け橋となる人材を育てる「人材育成センター」であることを実感した。

そのPREXを通して、自分の経験が途上国の製造現場で活かされている喜びや研修員との交流を通じた新たな経験・新鮮な感動をもらい、更に途上国の人材育成への参画に大きなやりがいと生きがいをもらっている。

PREXは、活動のエネルギーを与えてくれる魅力ある存在であり、そのエネルギーをPREXと私自身にどの様に活かしていくかが今後とも私の課題であり、また楽しみでもある。

朋あり遠方より来る、また楽しからずや

麗澤大学　教授　ラウ・シン・イー

ＰＲＥＸとは、約十年の付き合いです。主にマレーシアの行政官を対象にした研修を手伝ってきました。組織の運営、人事管理・育成、リーダシップ等といった管理職務の役割について講義と訪問が研修の主な内容です。この事業はマハティール元首相のルックイースト政策の一環として位置づけられています。ルックイースト政策の狙いは日本の経済発展経験、労働倫理、経営哲学などを学び、その成果をマレーシアのさらなる経済発展につなげようとするものです。

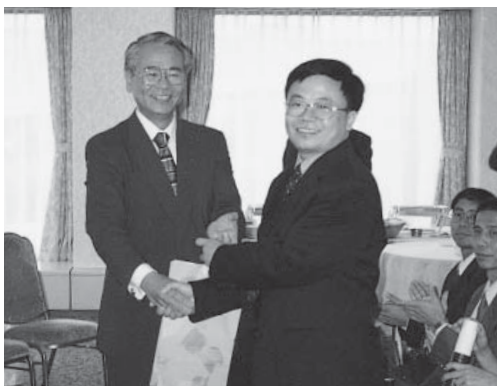
私の役割はＰＲＥＸに当該事業の研修プログラム作成を助言する他、研修員に対して日本組織の運営管理方法に関する解説、レポート作成を助言・コメントすることです。これまで多くの途上国に係わる人材育成プロジェクトを携わってきた経験と比べ、当該事業の実施は、大阪の関係団体を中心に協力を得ることに徹しているというＰＲＥＸの方針が際立っており、意義ある国際協力です。日本の経済情勢は依然として厳しく、ＯＤＡ予算が削減し続けている状況の中で、国際協力の活動は東京の一極集中ではなく、大阪や他の地方都市に分散して実施されることが国民の理解と支持が得られると考えます。

今後二十年においても「学問を志す方が遠方から教えを求めに来た、このうえない楽しみではないか」という孔子の言葉のように、ＰＲＥＸの役割はさらに大きくなるのを期待します。

地域に生き世界に伸びる

阪南大学　前学長、関西産業活性協議会　理事長　大槻眞一

阪南大学へ毎日通う必要がなくなって、何時からか、早朝ウオーキングを始めた。六時半に家を飛び出して、近くの阪大石橋キャンパスの中を一時間ばかりウロウロと歩く。かれこれ一年半になる。三日坊主にしては奇特なことである。キャンパスの春は桜、秋には銀杏並木が美しい。ツルボやメドハギの花も見ることもあり、時にはイヌビワや野葡萄の実を見うけることもある。



重慶市の科学技術研究所所長などを対象に日本の科学技術振興政策について講義し、参加者から記念品を受ける大槻教授。ＰＲＥＸに多くの先生方や訪問先企業をご紹介いただいた。

そんなある日、迂闊なことではあるが、大学の裏口の側道の傍らに、大きい割りに目立たない石碑の存在にふと気が付いた。そこには、深々と「地域に生き世界に伸びる」と彫られている。年代物である。懐徳堂、適塾以来の市民精神を受け継ぐ大阪大学のモットーとは聞くが、どなたの言葉か詳しい由来を調べたいと思いながら、まだ果たしていない。

しかし、このモットーは、ＰＲＥＸにも通じる。多くの国から研修員を迎え入れ、日本の行政、産業、文化、歴史を丁寧に紹介し、その下準備には地域との密な連携が欠かせないと思われる。こうしたご苦労の成果である国際交流と国際支援の仕事は、年毎に着実に世界に大きく伸びている。

国を開く大事な仕事に、日夜努力されるＰＲＥＸの方々には心から感謝の意を表したい。

PREX二十周年によせて

ステファン・レオン
マレーシア／マレーシアPREX同窓会　会長、
トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学
国際問題センター　センター長、マレーシア戦略国際問題研究所　客員研究員

PREX設立二十周年、おめでとうございます！

正直、私の日本に対する初期のイメージは、第二次世界大戦から来ており、かなり悲観的でした。しかし、アメリカで研究をする前に、初めて立ち寄った日本で、日本人が親切でホスピタリティにあふれていることに驚きました。それが今日まで続いている、私の日本と日本社会との関わりのスタートでした。

私がPREXと初めて出会ったのは、一九九二年に実施したアセアン諸国対象の人材育成プログラムに参加した時でした。その三年後、一九九五年のAPECサミット議長国への期待を込めて実施されたAPECセミナーにも参加しました。翌年には、アフリカ対象の研修で、マレーシアの「ルックイースト政策」のアイデアを紹介するということで招聘されました。海外出張のたびに、PREX事業に参加した同窓生に出会います。

二十年を経て、PREXは途上国支援に成功したと言えるでしょう。支援分野である人材育成は、世界の多くの途上国に行きわたっています。人材育成が国の発展には重要なカギであることから、PREXは「途上国の発展を支援する団体」です。私をはじめとする多くの方がPREXの研修事業から学びました。PREXの果たされた貢献に敬意を表します。

PREXが大阪にあるおかげで、私は、「東京」を超えて日本や日本社会を知る機会に恵まれています。関西、その多様な魅力ある地域について知ることができました。関西地域には、経済発展以外に、歴史や文化、「歴史街道」があります。

PREXは、二十年間にわたって途上国の人材育成に多大な貢献をされました。マレーシア同窓会だけでなく、他の国の人々も、PREXに継続して事業を行ってもらいたいと思っています。そのことを通して、PREX、大阪また日本が、途上国の目的である「先進国入り」を支援する団体として末永く記憶にとどめられることでしょう。

最後になりますが、日本とマレーシアの友好関係の促進に力を注いできた、このマレーシア同窓生が、二〇〇九年四月二十九日に天皇陛下から旭日小綬章を授与されたことを伝えておきます。

もう一度、二十周年おめでとうございます！

一九九二年「関経連アセアン経営研修」にて。PREX宇野会長（中央）とアセアンからの研修員とともに。前列右端がレオン氏。

二〇〇〇年「関経連アセアン経営研修」二十周年記念シンポジウムでパネリストとして発言するレオン氏。

インドネシアと日本

インドネシア／インドネシアＰＲＥＸ同窓会　会長、
インドネシア商工会議所インドネシア日本経済委員会　事務局長
ヘル・サントソ

私が参加した「関経連アセアン経営研修」は、一九八〇年、亡きモハマッド・ゴーベル氏（インドネシア日本経済委員会ラフマット・ゴーベル理事長のご尊父）が松下正治関西経済連合会副会長（当時、関西経済連合会アセアンミッション団長）にインドネシアへの教育支援を提案したのがきっかけとなり、三十年にわたり実施されています。ＰＲＥＸが、関西経済連合会から受託して実施してこられた二十年間に大企業、中小企業の多くの人材の育成を支援し、インドネシア経済の発展に大きく貢献されたことに感謝申し上げます。そうした立派な活動を担うＰＲＥＸの同窓会会長に選ばれたことは私にとって大変光栄なことであり、微力ながら両国のために尽力したいと願っております。インドネシアの産業分野の人材開発は、関西経済連合会や他の人材育成機関、そしてＰＲＥＸに支えられてきました。ヒトを育てることは一朝一夕にできるものではありません。過去、現在、未来といった長い時間をかけて両国の友好関係の促進も見据えたうえで国際貢献しようという意識がないとできない活動です。ＰＲＥＸや関西経済連合会がこれまで蓄積されたノウハウと人脈を生かして、更なる活動を推進されるようお願いします。

二〇〇七年にユドヨノ大統領と安倍首相（当時）が署名されたＥＰＡ（経済連携協定）によって、二〇〇八年以降、看護師、介護福祉士候補としてインドネシアから七百名近くが来日し、国家資格取得のために努力しています。これは両国の絆を強めてくれるものです。

日本をインドネシアから眺めますと現在いくつかの難しい問題に直面されていると感じます。ひとつは、特に中小企業における後継者問題。かつて日本の成長を支えてきたのは、「匠」と呼ばれるモノ作りの高度な技術でした。ところが、その高い技術を継いでくれる若者が日本には少なくなっていると聞いています。「匠」の技術者の高齢化が進み、せっかくの技術が消え去ることはあまりにも失うものが大きいと思います。幸いなことに技術研修などを通じてインドネシアの若者にその技術が受け継がれようとしています。インドネシアにはモノ作りの経験があまり蓄積されていないことからも、ぜひ日本の経験から学びたいと思います。また、近隣諸国との関係でにわかにクローズアップされた資源問題についても、豊富な資源を持つインドネシアと日本が共存共栄することで解決できると信じます。こうしたことから、両国の協力関係はさらに強化されなくてはなりません。

二〇〇九年「関経連アセアン経営研修」三十周年を記念して集まったインドネシアの同窓生たち。右から二番目がヘル氏。

日本文化やビジネス事例の紹介

フィリピン／CENEL開発会社　社長
ヤン・アントニオ・L・カンポス

一九九八年、「関経連アセアン経営研修」に出席しました。フィリピンから三名、その他にインドネシア、マレーシア、シンガポール、タイから参加していました。

私たちはホテルに七泊し、日本文化やビジネス事例についての講義やプレゼンテーション、ワークショップに参加しました。見聞を広めるために、観光や工場訪問もありました。松下電器産業（当時）やトヨタの工場を見学したことを覚えています。素晴らしいお寺にも訪問しました。同じように素晴らしいと感じたのが日本食で、今でも私の好物になっています。

日本のビジネス事例を学ぶことが一番関心のあることでした。日本の総合商社の経営理念や「ボトムアップ」で行う意思決定、「ジャストインタイム」の在庫管理システムなどがありました。

また、日本企業での経営手法、組織運営などをそれぞれの国の文化や習慣と比較して研修参加者間で討論をしましたが、印象に残るセッションとなりました。他の国についても多少なりとも知ることができました。五カ国から十五人が集まっておりましたので、活発な議論と交流が研修員の間で常にされていました。

この日本での研修に参加したことが、私自身にとって非常に役立ちました。私がキャリアを開発するにつれて、私の会社は多くの日本企業、例えばパンチ工業（プラスチック金型や射出成形金型の製造メーカー）、日立ツールエンジニアリング（切断機の製造メーカー）、日本ベアリング（線形ベアリングの製造メーカー）の独占販売業者として取引を始めました。私達の顧客は日本の自動車メーカーやその協力会社となっていきました。

研修員間、また受入れて下さった方々とも友情を結びました。講義や見学に常に同行してくれたPREXの安藤さん、有田さん、三浦さんをよく覚えています。今日に至るまで、有田さんと三浦さんとは友人であり続けています。PREXはこのような研修を、特に世界が一つのコミュニティになろうとしている現在においてこそ続けるべきだと思います。

二〇〇四年「PREXフィリピン同窓会フォローアップ事業」でフィリピンを訪問。懐かしい同窓会メンバーが集まった。右端がヤン氏。

アセアンの友人と再会

タイ／前タイ投資委員会　長官
サティット・チャンヤバナクール

ＰＲＥＸが設立二十周年を迎えられたことを喜ばしく思います。百三十一カ国・地域から一万三千人以上の方々が研修に参加され、ＰＲＥＸが大成功を収めたことに敬意を表します。関西経済連合会をはじめとする関西の経済界が、過去二十年ＰＲＥＸの活動を通じて、途上国の発展に資するための支援を継続的に行っていること、また、途上国の人材育成に多大な貢献をされていることに感謝いたします。

一九九二年に現地カウンターパートとして、また一研修員として、ＰＲＥＸを知り関わるようになりました。当時専務理事だった峰村氏が、当時私が所属していたタイ工業省 工業推進局傘下のタイ経営開発・生産性センターを訪問された日をよく覚えています。ＰＲＥＸの研修プログラムが、タイ、特に中小企業に役に立つことが分かりました。それ以降、大阪で実施する経営研修に数名ずつ参加させてもらっています。私自身、一九九九年に大阪・ジャカルタ・バンコクを結ぶ初めての遠隔研修を一緒に企画するという、大変興味深い経験を得られました。

ＰＲＥＸとの連携が数年続いた二〇〇三年に、私自身、アセアン諸国からの研修員と共に、経営研修に参加しました。松下電器産業（当時）の事例から、生産性向上の方法や技術とともに、人材育成が組織のカギとなることを確信しました。研修で、知識を学んだだけでなく、アセアンの友人を知ることができました。滞在中の日々を楽しみ、後日お互いの国でも会う機会を得ました。その中でも、昨年「関経連アセアン経営研修」の三十周年記念事業で、フィリピン、インドネシアや他の国々の友人とジャカルタで再開できたことを喜ばしく思います。

ＰＲＥＸは人材育成を通じてアジア・太平洋地域の国々の発展に寄与していると感じています。アセアンと日本、中国、韓国、インド、オーストリア、ニュージーランド、また、ＡＥＣ（アセアン経済協定）といったアセアンの諸国間における、近年の貿易自由化や自由貿易協定の促進で、ビジネス環境や方法における劇的な変化への対応が必要なすべての途上国にとって人材の開発はより重要なことです。ＰＲＥＸは、すべての国に利益をもたらし、ニーズに応える役割を担ってくれています。

二〇〇九年「関経連アセアン経営研修」三十周年を記念してインドネシア・ジャカルタに集まったアセアンの同窓生たち。右端がサティット氏。

二〇〇九年「関経連アセアン経営研修」三十周年記念シンポジウムの模様。アセアンの関係強化に資する人材育成のあり方についてのパネルディスカッションも行われた。

PREXよ、永遠に

シンガポール／FOAMTEC　部長
クリストファー・チュウ

シンガポール製造者協会を代表して、「関経連アセアン経営研修」に二回参加する機会を得ました。

一番印象に残っているのが、日本の代表的な多国籍企業である松下電器産業（当時）本社への訪問です。松下副会長やその他の経営幹部との面談の機会を持つことができました。日本が成功し先進国となった理由がよく分かりました。松下副会長が、電気産業界でトップリーダーとしてあり続けるための他社に一歩先んじる技術の重要性についてお話されました。それは現在、私が企業を経営する上での戦略の一つとなっております。

PREXの今後の活動に期待すると同時に、研修事業に対しても最大限協力したいと思っております。

最後になりますが、PREXに検討いただきたい私の要望を述べさせていただきます。一つは同窓会員向けのプログラムをシンガポールや日本国内で参加できるように継続して開催してもらいたい。もう一つは、PREXのホームページ上で同窓会情報をやり取りしたい。同窓会員が情報をアップロードでき、なんでも書き込めるのであれば、PREXとの関係を維持できるのではないでしょうか。

日本での素晴らしい研修を企画されていることに再度感謝申し上げます。PREXよ、永遠に！

PREXと日本を想って

ベトナム／ベトナム商工会議所　会員・研修部副部長
レー・ティ・ラン・ヴィエン

私は、ベトナム商工会議所の会員・研修部副部長として、ベトナム企業を対象とした国内および海外での研修の企画・実施を担当しています。仕事の関係でベトナムにある日本の組織や企業と話をする機会がよくあります。また、ベトナム企業の日本でのマーケットリサーチに同行して、日本でのワークショップやセミナーに数多く参加し、日本の国や人々について理解を深めてきました。

私自身は、五年間貿易大学で日本語を学びました。言語、様々な情報、日本人と接するうちに、日本人と同じ気持ちを感じるようになりました。日本、その進歩については、非常に敬意を持っています。天然資源が限定され、自然災害が多い中、「人材」と「意思の強さ」で日本は強い国を作り上げました。私たちは、経済発展の中で美しい文化伝統を守っている日本人から、労働意欲や倫理観を学ぶ必要があります。

PREXは、途上国の繁栄に貢献し、それが世界平和につながっているということをもっと評価されるべきだと思います。PREXの短期間の研修に参加することで、日本人専門家の話を直接聞き、日本企業を訪問し、日本人や他国の研修員と討議することができました。

PREXの良く考えられたプログラムのアレンジに感謝しています。日本の方々は非常に親切で、ホスピタリティにあふれていました。

ベトナム商工会議所とPREXがこれからも関係を継続することを願っています。そして、多くのベトナム人が日本に行き、日本の発展の過程を学べることを願っています。

PREXから得た三つの宝

中国／中国科学技術協会　常務委員会　副主席
斉 譲

私は一九九一年に日本での研修に参加しました。光陰矢のごとし、二十年はあっという間に過ぎましたが、ＰＲＥＸの皆さん、通訳や講師の方など、映画のワンシーンのように目の前に蘇ります。

ＰＲＥＸは私に三つの宝をくださいました。一つ目は「時間」です。昔の人は、「時は金なり」と言いました。認識が意識となり、意識が行動となります。ＰＲＥＸの研修において、私はより実践を意識するようになりました。研修コースはきちんと細やかにアレンジされており、実施においてもきちんとコントロールされ、忘れることができません。

二つ目の宝は「効率」です。管理の要となるものはなんでしょうか。昔、私は精華大学で十年学び、教鞭をとっておりました。国家科学技術委員会で科学技術管理を十年実施しておりました。ＰＲＥＸにおける研修で講義、企業見学を通じて、特に「在庫ゼロ」の生産方式を学び、管理の要は効率に違いないと悟りました。

三つ目の宝は「効益」（効果と利益）です。管理業務では実際的な効果がなければならないとよくいいますが、これが「効益」です。ＰＲＥＸの効率の高い仕事、講師からの心のこもった講義、企業を取り巻くビジネスプランでは、企業グループとの実践的なディスカッションもあり、非常に「効益」がありました。啓発を受けた私は、日本への渡航費用を考えると、人数に限りがあるため、専門家を派遣して中国でセミナーを実施できないかと提案しました。ＰＲＥＸは私の提案を受入れてくださり、その後、ＰＲＥＸにより何度も専門家が派遣され、各方面の好評を得ました。一度受けた研修は生涯有益です。

手を携えての人材交流研修、地域経済の発展に寄与

中国／重慶市科学技術委員会　弁公室　主任、
ＰＲＥＸ重慶同窓会　副会長
唐 安明

一九九〇年代初めより、重慶市はＰＲＥＸと科学技術交流を開始しました。お互いの長期にわたる粘り強い努力により、日中友好協力の木に、枝葉が繁り、果実がたわわに実っているのを嬉しく見ることができます。二〇〇〇年は、ＰＲＥＸ重慶同窓会が発足し、ＰＲＥＸ設立十周年で、重慶同窓会の前会長である竇瑞華氏が大阪に招待され、「西部大開発」のテーマで講演を行いました。この二十年来、私たちは十数回にわたり、ＰＲＥＸが実施する研修に参加し、ＰＲＥＸと大阪で中小企業比較研究を展開しました。関西電力、地球環境センター等企業や研究機関とも交流を行い、関西の自治体、企業、研究機関と幅広いネットワークを築きました。ＰＲＥＸも何度も我が市に専門家を派遣し企業や管理機関の人材育成を支援してくれました。重慶市の人材育成のために重要な支援をしてくれただけでなく、重慶が日本を理解し、相互理解を深め、友好を深める道筋を広げてくれました。現在、重慶同窓会の会員は百人を超え、その大部分は重慶市のそれぞれの業界において幹部になっています。

新しい歴史の起点に立ち、日中の民間の友好交流は、双方の関係と経済をともに発展させる上でも非常に重要な意義があります。重慶同窓会は今後もこれまでと同様にＰＲＥＸと交流協力を実施します。重慶同窓会とＰＲＥＸとの交流を絶えず深め、科学技術を進化させ、人材研修が絶えず新しい成果を得、民間の交流と友好往来が絶えず新しい章に書き加えられることを深く信じています。ＰＲＥＸとともに進み、友情を大切にし、発展のチャンスをともに享受し、手を携えて未来に挑戦し、アジア・太平洋地域の経済社会の発展と繁栄のために共に努力を惜しみません。

自社だけでなく私の国にとっての価値

キルギス／CJSC SHORO　社長
ジュマディル・エゲンベルディエフ

長い間、私は日本を訪問することを夢見ていました。日本は、私にとって「常に全く異なる文化と技術力そして意識をもつ異世界の国」でした。未来からやってきたような新しい装置や電子システムのイメージから、私はいつも日本を二十二世紀の一部のように想像していました。研修に参加し、実際に訪問した日本は、考えていた以上に素晴らしい国でした。

日本人は私たちに親切に接してくれました。私は日本人の「おもてなし」について聞いたことがありましたし、伝統の一部はキルギスとアジアを織り交ぜたように似ている点も知っていました。しかし、私が主に興味を持っていたのは、日本の人々がいかにビジネスを行うかでした。地域によってすべてのビジネスが、独自の要素や特徴を持っています。ビジネスや製品の日本モデルは世界でも有数のものです。

わたしは日本のビジネスにおける交渉方法やスタイルに夢中になりました。西洋式のビジネススタイルとは対照的に、日本のビジネススタイルは私的なコミュニケーションの上に成り立っており、そこでは、すべてが非常に重要で、誰にとっても価値があると思います。ビシュケクの大企業の代表として、私は日常生活の中で、この原則を取り入れようとしています。

私が注目したもう一つは、日本のビジネスマンは意思決定において権威主義を決して許さない点です。成功の秘訣は、少数意見に耳を傾け、考慮する能力です。キルギスでは、トップには無限の権限があるため、日本のこの点は私が持ち帰りたい興味深い要素でした。我々の国での無限の権限とは、他のビジネスパートナーや専門家が何を考えるかは全く関係なく、トップが言ったことはすべて実行されなければならないことを意味します。私がPREXの研修で経験し実感した最も重要なことは、重大な決断を下す際には、年長者か若年者かという違いではなく、また、ビジネスを行う上での個人的な野心でもなく、すべての人が平等でかけがえのないものである、ということでした。キルギスを代表する多くの製造業企業は西洋、特にアメリカ式の機能を取り入れています。しかし私はいつも他のスタイル、東洋モデルを開発しようとしています。それは国の伝統や尊敬、攻撃的ではない柔軟さや哲学などに基づくものです。

私は日本の方式の中に自分の考えに間違いがなかったことが確認ができ、とても感謝しています。このスタイルを理論化した気になっていましたが、その方法を適用した実例はありませんでした。

日本を訪問後、私はいくつかの問題の「繊細さ」を理解することができました。PREXの研修は、ビジネスマンが自分の分野で新たな物事を見つけられるだけでなく、自国の文化や伝統が、肯定的な効果を間違いなくもたらすことを気付かせてくれました。私がいつも敬愛している「文化」に関わりあう賢明な機会となっただけでなく、自国の中にとどまっているだけではできないような重要なことに気づく助けにもなりました。

帰国後、我々と日本のパートナーとの協力関係は強くなり、キルギスにある日本企業と密接に関わり良い関係を持てるようになりました。

私は、この協力関係は、自社にとってだけでなく、私の国にとっても最良のものをもたらすと確信しています。

黄金の国、ミャンマーより

ミャンマー／ミャンマー商工会議所　副理事長
ゾー・ミン・ウィン

ＰＲＥＸが人材育成支援に焦点を当てている素晴らしい国際機関であること、またアジア・太平洋地域の途上国の人材育成を推進していることに感銘しております。

技術の急速な進歩や国際化の時代において、途上国は新しい課題への対処として、最も効果的に相互に協力できる方法を学ばなくてはいけません。各国において、人材の質と量は国の開発を進める力となります。人材育成を通じて地域開発や統合を進めることは極めて重要なことだと信じております。現在の労働力は将来への大きな可能性を秘めた若い世代の専門家に次第に取って代わられます。ＰＲＥＸの人材育成支援プログラムで、ミャンマーの若い経営幹部も参加して最新の経営を共有することは、ミャンマーの発展のための人材を育成し、強化することができることでしょう。一九九六年以降ミャンマーからの参加者は四十名を超えており、今後増えて行くことを期待しております。私自身もＰＲＥＸの日本での研修に二回参加できたことを誇りに思っております。ＰＲＥＸの研修プログラムを通じて、日本の経済や教育、研究開発、技術移転、事業環境、環境問題、エネルギー資源、国際関係など学びました。ＰＲＥＸの研修で得られた経験は私のその後の生活に意義をもたらしました。

他の同窓会員と話をしていても、日本の文化や歴史、政府、民間企業、技術への理解が進んだとＰＲＥＸの研修に参加できたことに感謝の言葉を述べております。研修中に接した日本人の、仕事への没頭、義務に対する責任、並はずれた労働倫理感、国への愛情や伝統への尊敬が特に印象に残ったと口々に申しております。

また、日本とミャンマーの関係について一言申し上げます。両国は経済パートナーとして友好関係を長期間にわたり継続しております。私たち、民間セクターとしては、ミャンマーと日本、特に日本の中心と言われる関西と、経済交流・友好関係を継続・発展することに非常に関心を持っております。商工会議所および工業会としては、ＰＲＥＸとの関係を更に継続するための努力を惜しみません。ＰＲＥＸの成功と明るい将来にむけて、ＰＲＥＸの活動をよりよくするための意義ある意見や提案を共にしていきたいと思います。

私たち同窓会員は、同窓会活動の成功にむけて最大の努力をし、他の同窓会との協力・共同を通じてより強固な関係を結ぶため、経済や他の活動に関する情報共有をし、アジア・太平洋地域の経済発展を進めていきたいと願っております。

ＰＲＥＸが商工会議所や工業会、また同窓会に対して惜しまない支援をして下さっていることに再度感謝申し上げます。

最後に、ＰＲＥＸの更なる発展と成功をお祈り申し上げます。

日本への訪問は「開眼」

カザフスタン／国家福祉基金
「サムラク・カズイナ」代表
カイラット・ケルムベトフ

この十五年間、私は世界各地を訪問しています。その中で、一九九七年の日本への旅は、特別なものとなっています。私自身のキャリアにも大変よいインパクトを与えてくれました。文化面では、革新的なインフラと技術力は衝撃的でした。同時にホスピタリティーや年長者への敬意、現代的な生活への歴史遺産の受容など、カザフスタンの文化と似た点も多く見られました。京都の歴史博物館はすばらしい博物館でした。新幹線は「魔法のひとかけら」のようでした。

私はエコノミストとしても、日本の経済開発から多くのものを学びました。自国に何が良くて何が適さないかを学びました。

日本の金融システムは巨大なメカニズムです。たとえ今日、日本経済が厳しい危機に直面しているとしても、日本経済の将来を強く信じています。なぜなら、芯の部分で日本の人々は大変賢明で、能力や規律、技術開発力を持っているということを、私自身がこの目で見たからです。日本への訪問は、私にとって「開眼」でした。国際社会の中に自分の身を置く大きなチャンスでした。同じ研修に参加した他の国からの友人を得ることができ、外交のヒントも多く学びました。そして東京の地下鉄を「専門家」としても楽しみました。コスモポリタン都市の渋谷、人ごみの新宿、ロシア人に適した秋葉原、豪華な銀座、そして他の多くの場所はいまだに忘れられません。

日本での記憶

ラオス／CHANVIENGXAY貿易　取締役
ペットサモーネ・ヴォンビンカーム

二〇〇六年末までは、私はラオスにいる他の人々と同じように、テレビや新聞などから見聞きする海外に行きたいと思っていました。アメリカやヨーロッパ、日本はラオスでよく知られ、みんなが行きたいと思っている国です。私はその中の「日本」に行くことができ本当に幸運でした。

日本に足を踏み入れた第一歩から、聞いていた以上に本当に感銘を受けました。まず、関西空港が海の中にあることに驚きました。世界においても印象深い建物の一つだと思います。それだけではありません。今までに聞いたこともないほどの、家やビルで使われているハイテク機材にも驚きました。日本の人々が毎日学校や職場に非常に早足で向かっている様子から、日本の一日はとても早く過ぎて行くのではないかと感じました。このようなペースで動いている中で、私が必要な時に助けてくれるPREXの皆さんの優しさと友情を感じることができました。それは忘れることはできません。その上、紅葉や温泉など印象深い場所も多く訪問しました。特にアロマセラピーのような温泉はいまだに記憶しています。どうしてハイテクと自然が共存できるのでしょうか。一週間滞在しましたが、快適な気候、人々の生活スタイルなどから平和を感じることができました。もっと滞在したいと思いました。再び日本、特に大阪を訪れる機会があればと思っています。

研修の思い出

シンガポール／HOCLINK
システム・サービス社　社長
ジョージ・ウォン

二〇〇八年「関経連アセアン経営研修」に研修員の一人として、参加できたことに感謝しています。非常によくアレンジされた講義、企業訪問、研修員や専門家との意見交換を通じて、多くのことを学び、ヒントを得ることができました。

研修期間中に、全員で旅館に一泊し、畳部屋で寝て、温泉を楽しみ、浴衣を着るという体験をすることができました。これは私にとっても、おそらく他の研修員にとっても全く初めての経験だったことでしょう！

成功している企業や組織の支えとなっている素晴らしい経営理念やシステム、実例について見ることができました。本研修は、私を豊かにしてくれました。講義を補強するように企業訪問を行い、経営幹部や社員がどのように組織形成をしてきたのかを学びました。企業の方々と意見交換の中で、自国に戻って適用・応用できるような成功事例や経験を得ることができました。

研修では、研修員との間で経験や事例を共有する時間もありました。企業の共通課題を解決できるように、ディスカッションやアイデアを整理するグループ討議を何度も行いました。これらの時間を通して、自社の経営管理に活用できる知識や概念を得ることができました。

「関経連アセアン経営研修」では、私を含めてアセアンから参加した研修員全員が、自分たちの企業に非常に役立つ本当に価値ある学びを得ることができました。

素晴らしい学びの機会を下さってありがとうございます！これから何年にもわたってＰＲＥＸを高く評価したいと思います。

研修は一生のレッスン

マレーシア／ゲオデュード　代表
リチャード・アズラン・アバス

一九九三年に「関経連アセアン経営研修」、一九九五年に「ＡＰＥＣトップマネージメントセミナー」に参加しました。「ＡＰＥＣトップマネージメントセミナー」は阪神淡路大地震後の数週間後の実施でした。

これらのセミナーへの参加は私個人にとっても、私の組織にとっても非常に価値あるものでした。日本人のホスピタリティと価値観は研修員にとって一生のレッスンとなりました。日本は非常に進んでいる国です。一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、発展を模索しているアジア諸国にリーダーシップを発揮し、指導してくれました。

ＰＲＥＸはこのパートナーシップに重要な役割を果たしています。多くの人々を導き、発展させてこられました。マレーシアで出会うＰＲＥＸ同窓生は全員、大阪での思い出や経験を楽しく話しています。そしてＰＲＥＸが実施している海外研修は、より多くの人々を導くことができるという利点があります。

ＰＲＥＸの二十年間の歩みを祝し、今後より一層の成功をお祈りしております。

私の記憶

マレーシア／マラ工科大学　国際教育センター　所長
ハビバ・アシャリ

二〇〇五年二月にマレーシア・人事院とＪＩＣＡ、ＰＲＥＸが実施した「経営幹部セミナー」に参加するために大阪に行きました。マレーシア政府で三十年働いており、国内外で様々な研修に参加してきましたが、その中でも一番記憶に残ったものとなりました。研修を通じて職務上得ることが多くありましたが、ここでは「細かいところや品質にこだわる」日本人や文化についての私の感想を書きたいと思います。

大阪滞在中、私たちは電車を使って移動しました。一番感銘を受けたのはもちろん電車の時間の正確さですが、もっと重要なのは乗客が乗りやすいように確実に決まった位置に停車することです。マレーシアでは、電車がどこに停車するか当てるゲームのようです。そのため、乗客は電車が来ると停車位置を探して行ったり来たりと走り回る必要があります。日本では、プラットホームに位置が書かれており、乗客はどこで立って入ればいいのか、どこに行けばいいのか分かるようになっています。このおかげでもの当てゲームをする必要がなくなります。

もう一つ印象的なことは、日本人は梅や桜を非常に好むということとお土産の包装文化です。日本人はプレゼントに誇りを持っており、自宅に持って帰るどんなに小さなお土産であれ、まずティッシュで優しく包み、箱に丁寧に入れ、美しい包装用紙で包みます。いつも急いでいる者にしてみると、店員がプレゼントを包む様子を見ているだけで魅了されます。梅・桜やプレゼント包装の日本での経験から、私はゆっくりすることや美しさを愛でることを学びました。

ＰＲＥＸの遠隔研修

タイ／元タイ工業省　工業開発局　局長
プラモード・ヴィタヤスック

タイ工業省工業開発局（ＤＩＰ）局長であった時にＰＲＥＸと仕事をさせていただきました。当時初めてバンコク、ジャカルタ、大阪をテレビ会議で結んだ遠隔研修を実施しました。私たちにとっては全くの初めての経験でした。バンコクのＤＩＰ会議室にいた研修員は、大阪にいる著名なスピーカーの話を聞き、やり取りを行うという機会が与えられました。その上、ＰＲＥＸとＤＩＰでアフリカ諸国を対象とした研修を協力して実施することができました。

更にＰＲＥＸとＤＩＰが協力して行っていることに年一回開催される「関経連アセアン経営研修」があります。毎年タイの行政官、企業家、経営幹部が日本に招待され研修に参加しています。

タイ国政府として、ＰＲＥＸと長年にわたり協力関係にあることに感謝すると同時に、この関係をこれからも継続したいと思っております。最後になりますが、私たちの活動にご協力いただいていることに感謝すると同時に、記念日をお祝いいたします。

大阪の小さな企業のエネルギー

ベトナム／ALPHA POTTEPY社　社長
ガン・テイ・キム・ファン

二〇〇四年に大阪で実施された研修に参加しました。

人生は旅のようだと言われます。この研修から役立つ情報を多く得ることができました。また、テレビや新聞で見た日本ではなく、実際の様子を見ることができました。大阪のような近代的で組織されたきれいな街と同時に、京都のように保全された歴史的な街並みも見ることができました。かなりの年長者が、ドライバーや販売員、ホテル従業員などとして働いている長寿で健康的な地域は世界中探しても多くはありません。

研修中には、十八名の小さな企業であるにもかかわらず世界中の顧客を相手に特殊な製品を製造しているところを訪問しました。飽和状態の市場において、どうニッチ市場を作り出していくかを知っています。また、同じ期間やエネルギーでいかに生産していくかも学ぶ機会を得ました。

アセアン諸国の企業経営幹部と知り合う機会も得ました。これは非常にいい経験でした。私の企業も中小企業です。PREXが実施する研修、特に、変動する経済状況下で、環境に優しい事業のトレンドに乗り遅れないようにするにはどうしたらいいのかといったテーマの研修に再度参加したいと思っています。

西安の環境改善に貢献

中国／西安市科学技術局　局長、
カウンターパート
除 可為

PREX設立二十周年に際しまして、私は西安市科学技術局を代表してPREXに熱烈なお祝いを申し上げます。

当局は、二〇〇八年よりPREXと協力をはじめ、西安市の大気環境改善プロジェクトや、西安市水環境整備合流式下水道改造プロジェクトを実施しました。西安市の環境分野に携わる人材が、日本で環境計画をいかに実行し環境にやさしい都市づくりを行っているかを学び、これらのプロジェクトにより西安市の実際の状況に基づき関連する環境政策の公共管理ができる人材と、具体的に環境整備の業務ができる技術者が育成されました。

研修員は、研修後に環境保護教育を展開することを通じて、市民の環境保護意識をさらに高めることに努力しています。現在、西安市では、大気環境が改善された日が大幅に増加しています。

PREXは西安の環境整備と改善に大きな支援をくださいました。今後の我々の友好関係が継続して発展し、さらに多くの分野で交流や協力ができることを希望します。PREXの明日が更に美しいものでありますよう、お祈り申し上げます。

新たな研修プログラムの提案

キルギス／ビシュケクビジネスクラブ　事務局長
ウルク・クドゥルバエフ

ＰＲＥＸとの協力関係はビシュケクビジネスクラブ（ＢＢＣ）にとって、たいへん名誉なことです。ＰＲＥＸとビジネスのアイデアや、知識・手法について情報交換できることは、ビジネス環境の変化に迅速に対応することが求められる起業家にとっては特に重要なことです。

ＰＲＥＸがキルギスで実施した研修に参加できたことに感謝しています。今後更に新しい研修プログラムのアイデアについて話し合えることも楽しみにしています。

特にＢＢＣとしては、次のようなプログラムについて提案をいたします。

一．団体＆団体

ＢＢＣは「ビジネス協会同盟（ＮＡＢＡ、キルギスで最大の経済団体）」を創設した一員であり、積極的に活動しているメンバーでもあります（ＮＡＢＡは二〇〇七年に設立され、三十四の様々な分野の団体が会員となっています）。

そういう点から、特に我々は経済団体の活動の強化についてより深く学ぶ機会があればと願っています（例えば、どのようにして新たなメンバーに入会してもらい、会費に基づく運営の方法が行えるかなど）。

また、ＮＡＢＡにおけるＢＢＣの重要な役割として、起業家を育てるための支援活動を強化したいと考えています。

ワーキンググループや委員会などの国家と民間間のパートナーシップ・プラットフォームを通じ、起業家の育成・支援を強化したいと考えています。

マスメディアとの関係づくりも課題です。

二．企業＆企業

ＢＢＣは二〇〇二年に非政府組織として設立されました。経営者によって組織されており、キルギス共和国でのビジネス環境の改善を目的としています。メンバーは成功したオーナー経営者やトップ経営者で、彼らの優先課題は自身の持続的な進歩と、自身がトップとなっている組織の不断の成長です。

そのため、最新で最良かつ革新的なビジネスに取り組んだり、経営上の課題解決手法を見出したり、マーケティングの発展や、もちろん社会的事業へも効果的に取り組んだりしています。

個人的な成長のために、我々のメンバーは、経済・社会開発や貧困削減などの現代の重大な問題について議論に参加できる機会があれば、ありがたく思います。

会議やフォーラムなどのようなパートナーシップや国際的ネットワーク樹立のためのプロジェクトも、おおいに歓迎し期待します。

最後に、組織および個人にとって有益となるような、新たな研修プログラムの策定に向けて、ＰＲＥＸとともに働けることは誠にありがたいということを、改めて申し上げたいと思います。

※ビシュケクビジネスクラブは、現地でのセミナー開催時のカウンターパートです。

雨後の筍のように発展を

中国／広西生産力促進センター　研修外連部主任
周 瑞雲

私がＰＲＥＸの名前を初めて知ったのは、一九九八年に河南省鄭州市で開催された「企業診断セミナー」に参加した時です。二〇〇二年には、広西チワン族自治区南寧市において、ＰＲＥＸの酒井さんと一緒に仕事をし、セミナー実施の組織管理の経験と技巧を学んだことは生涯の益となりました。まじめで経験豊富な尾上さんと、博識でユーモアのある杉村先生と知り合い、これらの方々との出会いが友好の種となりました。この後、ＰＲＥＸと広西生産力促進センターの協力は、単なる研修の実施から、人材交流やその他業務における交流へと広がりました。私たちは一年ごとに様々な形で研修を実施しました。相互に人員を派遣しあい、その他業務や交流活動を行いました。広西チワン族自治区科学技術庁から三名の副庁長以上の幹部がＰＲＥＸを訪問しました。これまでに、三回のセミナーを実施し、広西の中小企業管理人材を五百人以上養成しました。また、相互に交流訪問を四回行い、二十一人が交流をしました。私たちの植えた友情の種は、双方が心を込めて土地を開いて土を耕したことにより、根を張り花を咲かせ、天を仰ぐ大木に育ちました。ＰＲＥＸはアジア・太平洋地域の途上国の人材交流と業務協力を行っており、日本と途上国との間の協力と友情を深めることに寄与しています。中国と日本はこの地域の重要な国家であり、経済の発展に重要な役割を担っています。今後私たちの業務が更に広がり、太平洋時代の経済建設の成長、日中友好の促進に貢献できることを希望しております。ＰＲＥＸの業務が雨後の筍のようにどんどん成長され、私たちが一緒に蒔いた協力と友情の種が成長し、果実がたわわに実ることをお祈りいたします。

メキシコとＰＲＥＸの交流

メキシコ／メキシコ経済省中小企業庁
組織連携部門　次長、メキシコ同窓会　会長
ウンベルト・ノゲラ・ブランコ

ＰＲＥＸの使命である途上国の人材育成は、途上国にとって特にメキシコや中南米の国々にとって重要です。二〇一〇年は両国の交流が始まって四百年の記念すべき年です。これからも両国の関係を一層強化していくことが期待されています。ＰＲＥＸも益々発展することを祈っています。

ＰＲＥＸのニュースレター

モンゴル／ＮＢＡ社　社長、
ＰＲＥＸモンゴル同窓会　会長
バータル・アマルサナー

ＰＲＥＸ設立二十周年おめでとうございます。

ＰＲＥＸが開催されたセミナーは、私にとって、またモンゴルにとって非常に有益なものでした。ＰＲＥＸから送られてくるニュースレターを毎回読んでいます。新しい情報がたくさん得られ、役に立っています。

ＰＲＥＸの今後の益々のご発展をお祈りいたします。

ＰＲＥＸ誕生前夜

皆木 武久（設立準備室～一九九〇年一月、三和銀行より出向）

私がＰＲＥＸと関わることになったのは、銀行の人事異動で、この構想の卵を産んだ関係者の一人である松下滋さんの後任のポストについたという運命のいたずらから。その時はまさか五年間もこれで苦しむことになろうなどとは露知らず。

山田さん、神田さんなどこの問題に取り組んでこられた諸先輩からの指示は、「構想実現の勉強会の事務局をやれ」。〝関西でこんな大それたものを作るなんて、とてもとても。三年もすれば転勤なので、その間適当につないで…〟というのが当時の小生の偽らざる気持ち。思惑が狂い始めたのは神田さんの太平洋経済協力会議（ＰＥＣＣ）日本委員会の委員就任から。一九八八年五月の第六回総会を日本に誘致する話が出てきて、委員会終了後の立ち話で大来佐武郎さんに「大阪でぜひ」、「いいですね」。大阪総会は、事務局を務められた関西経済同友会の萩尾さんをはじめとする関係者の奮闘で大成功。開催地を代表しての関西経済連合会宇野会長スピーチでＰＲＥＸ設立構想を高らかに宣言。さあ大変、国際公約だ。もう逃げてはいられない。一年半後の次の総会には具体的な報告ができるようにしなければ関西の、いや日本の名折れになる。暗中模索、苦悶の日々が続く。そんな頃にわずかに道を拓いてくれたのがスタッフ仲間の情報。「大阪市が中国との技術協力の仕組みを作る際にアドバイスをした人がいるらしい」。藁にもすがる思いで北御堂近くの一室を訪ねる。名刺には「国際開発ジャーナル関西支社長　齋藤實」とあるが、他に事務員らしき人も居らず、大丈夫かな?こちらの話をひと通り聞いた齋藤さん、「面白い。開発協力に長年携わってきたが、関西でこんなすばらしい話を聞いたことが無い。協力しよう」。海外技術者研修協会（ＡＯＴＳ）勤務を経てジャーナリストになった人だけにＪＩＣＡ、ＡＯＴＳに太い人脈があり、ＯＤＡ資金についても詳しい。アドバイスを受けながらこれらの組織との連携を柱にした構想を練り上げ、説明用ペーパーを作成。それを持って二人でＪＩＣＡ、ＡＯＴＳに何回も足を運ぶ。外務省、通産省にはジャーナルの荒木社長に引き回してもらう。二人とも手弁当、ボランティアだ。本当にありがたかった。こうした活動によって関係先にＰＲＥＸ構想のファンがじわじわと増えていった。時を同じくしてオール関西の推進組織が作られ、その下に各社のスタッフからなる実務組織もでき、体制は整ってきた。

しかし、資金集め、組織作り等の具体的な話になると、公式な推進組織では機動性に欠ける。そこで山田さん、神田さん中心に裏組織が動き出す。メンバーはお二人に加えて井上さん、萩尾さん、手足として藤田さんに小生。二週間に一回程度集まり、戦略会議。その決定を受けて上は上で、手足は手足なりに動き、検討し、次の活動へ。そして関西経済連合会の中に設立準備室が設けられ、ダイキン工業から関西経済連合会に出向していた松田さんが出向期間延長、新たに同社から福田さん、関西電力からＰＥＣＣに出向してもらっていた田浦さんが加わり、新採用の三谷さん、そして小生の五人。財団設立の具体的作業がスタート。秋ごろからは寄付依頼の行脚が始まり小生も何社か訪問。何もかも初めて尽くしの財団作りであったが、五月設立が確かなものとなってきた平成二年一月四日、銀行の転勤辞令。後任として出向の椋さんに引継ぎ。苦しくもあったが多くの出会いと貴重な体験をした五年間に幕。その後のＰＲＥＸ発展を指導し、支えてこられた多くの関係者の皆様に感謝し、一層のご発展をお祈りいたします。

二〇〇八年、財界セミナー賞特別賞受賞記念パーティにて（右が筆者）

PREX設立と私

椋 晶雄（設立準備室～一九九二年七月、三和銀行より出向）

私はPREX設立の時期に銀行から出向して誕生に立ち会った者として、PREXには特別の思いを持つ一人です。設立前後の思い出などを披露し、二十年前の様子を知っていただければと思います。

PREX設立の二カ月余り前、一九九〇年（平成二年）二月、私は大阪市内の銀行から関西経済連合会勤務を命じられました。そこである財団法人を設立する任に当れというものでした。すでに準備室が設けられて何名かの他企業からの出向者やパートの女性が働いていました。

銀行本部の説明ではその組織は人材育成協力を通じて太平洋地域の諸国との交流を図るという高邁な目的を持った組織で、銀行の提唱したものでもあるということでした。

私が赴任した時は準備室も同じ中之島センタービルの狭い部屋から少し大きい部屋に移って体裁が整いつつありました。私もすでに準備作業に携っていた人たちに遅れないように走っている電車に飛び乗るようにスタートする必要がありました。

昼間は企業への寄付のお願いに走りまわり、その間隙をぬって設立のための書類作成に没頭しました。それから約二カ月間、土曜・日曜返上の毎日が続き、外務省と通産省（当時）に一週間に二度出張するような有様でした。設立手続きは私の前に関西電力から出向していた有能な職員が相当進めてもらっていたので、枠組みというかコンセプトは粗方できていました。

ただ、手続きの過程では部厚い書類を全部やり直しさせられることなどは何回かありましたし、午後十時頃に霞が関の担当官から宿題の電話がかかってくるなどはしばしばでした。

その期間を一緒に協力してくれた女性を含む職員の皆さんのお蔭もあってなんとか四月の設立目標までに外務・通産（当時）両省の設立許可を受けるメドをつけることができました。

設立日の四月二十六日、当時の宇野会長をはじめPREXの幹部の方々に霞が関に許可書を受け取りに行っていただき、私は事務所で待機して連絡係をしました。当時は今のように携帯電話はありません。大阪からの連絡は不能でたいへん苦労しました。

まず外務省で外務大臣より会長が許可書をいただき、通産省の担当官にその許可書を渡して通産大臣より改めて会長が許可書をいただくという両省共管が由の手続きを経てやっと正式に設立ができたわけです。

PREXが設立され、私は初代の総務経理部長ということになりました。幸い当時は景気が良く、多額の寄付も集まりました。また金利も高く運用にもそう苦労はありませんでした。私はPREXがうまく離陸し安定した事業ができることに最も心をくだきました。

その点関西を代表する企業から優秀な職員に出向していただきましたので、皆さんの努力で研修事業も経営基盤も順調に推移し、関西が創った優良財団法人として発展していることに胸をなで下しています。またその後のたいへんな時期を職員の皆様の努力で今日の姿に更に発展していることに敬意を表します。

今、私は両親の介護などの事情から故郷山口県萩市に帰り、そのままこの地で生活しています。今年五月から市議会議員の一人として新しい分野にも乗り出しました。これも二十年前のPREX設立にかけた思いと体験が大きく後押ししてくれていると思っています。

PREX設立一周年記念パーティにて
（筆者 前列右端）

PREXは私の誇り

大井 良夫（設立準備室～一九九三年四月、パナソニックより出向）

PREXが未だ設立準備室であった一九九〇年四月に私は松下電器（現パナソニック）から出向しました。当時はPREXの規約並びに事業内容の策定と、外務省と通商産業省（現経済産業省）から財団法人の承認を得るための折衝が主な仕事でした。財団法人認可後は企画情報部長として、内外へのPR、交流対象国・団体の調査と選定、主務官庁との連絡調整を担当しました。

更に、事業への参加国の同窓会を組織して交流を深めると共に、実施事業の評価を行うため聞き取り調査も行いました。一九九三年五月所期の役割を終えて会社に復帰しました。在籍は三年と短期間でしたが、PREXの創設期に参画できたことは私の誇りです。

PREXの出産に立会いました！

松田 徳哉（設立準備室～一九九五年三月、ダイキン工業より出向）

マレーシア駐在時に関西経済連合会出向との内示があり、一九八七年五月に西ベルリンで開催された日独経済会議からPREXが設立認可を得た翌月末まで関西経済連合会に在籍しました。国際部に二年間在籍後、設立準備室に転籍し、センターの将来在るべき姿を模索すると共に、寄付依頼を担当しました。不況下にも係わらず、最低二十億円を確保すべしと、関西経済連合会の寄付依頼先リストに準じて、七～九月まで数多くの企業を連日訪問しました。現在の基本財産が約三十四億円とお聞きし感無量です。機関紙を拝見していますと、中央アジア・中東・アフリカなどで、グローバルな活動を推進されている様子が窺えます。スタッフご一同の一層のご活躍をお祈りいたします。

井戸を掘った人々

田浦 秀司（設立準備室～一九九〇年六月、関西電力より出向）

一九八九年、関西経済連合会内に設けられた「太平洋人材交流センター設立準備室」に関西電力から出向した私は、三和銀行の皆木武久氏、ダイキン工業から出向された松田徳哉氏と福田哲也氏の下で、PREX設立のための事務作業に当たりました。

私自身の担当業務は、ここに記載するほどのものではありませんでしたが、他の方々はPREX設立のための募金活動という将来のPREXの活動基盤を決定づける重要な仕事に日夜奮闘しておられました。

募金目標額は二十五億円でした。この金額は、その大きさで関西経済連合会内でも目立つものでした。PREXを社団法人として設立し、毎年必要なだけの活動費を会費として会員企業から少しずついただくという選択肢もあったのですが、関西経済連合会の山田稔副会長（当時のダイキン工業社長）が、「長期にわたって安定的に事業を継続するためには、景気動向に左右されやすい会費収入に依存するのではなく、あらかじめまとまった基本財産を集めて、その運用益を基に事業を進めることが必要である。」と判断され、PREXの設立準備委員会幹事会の神田延祐座長（同三和銀行副会長）、井上義國副座長（同ダイキン工業常務取締役）をはじめとする募金関係者の方々とともに、多くの企業や自治体に募金のお願いに回り、最終的には目標額を上回る募金を集めることに成功されました。

PREXの研修プログラムが本格稼動する前に在籍したに過ぎない私にとっては、PREXという名を目にするとき、まず思い浮かべのは、PREX設立のために多大な努力を払われたこれら募金関係者の方々の姿です。

一九八九年、アセアン諸国でのニーズ調査。右から三和銀行事業調査部上席調査役皆木氏、筆者（環太平洋日本委員会事務局長代理）、サントリー大阪秘書部長友光氏、ダイキン工業常務取締役井上氏、三和銀行副会長神田氏、丸紅監査役三好氏。

カオスからヴィーナス

西村 愛（ＰＲＥＸシニアコースリーダー、設立準備室～一九九五年三月、伊藤忠商事より出向）

関西経済連合会の中にあった設立準備室は一九九〇年（平成二年）の早春、喧噪と焦燥を伴った熱気に充ちていた。

企業からの出向者七、八名が財団の発足に向け力を合わせていた。出捐団体・寄附企業との折衝、主務官庁たる外務省・通商産業省への申請、就労や経理等の諸規程の作成、理事会や評議員会の開催準備、設立記念式典の手配など迅速になすべき業務は山積していた。出向者の役割は総務経理部・企画情報部・研修部の三部に分けられていたが、担当の垣根を超えて全員が目前の緊急事項に対処した。

それ故に設立式での関西経済連合会の宇野收会長や当財団の山田稔理事長の発足宣言に深い感銘を受けた。実感として、ふと句が浮かんだ。「カオスからヴィーナス生まれ風騒ぐ」時は正にプリマベラであった。

担当した研修事業は手探り作業の連続だった。企業を訪問しＰＲＥＸの趣旨を述べ訪問依頼を行ったり、土・日には中之島の図書館で論文を読み漁り講師の候補者選びを行った。当時からの先生で現在もご協力いただいている方々には感謝の念で一杯である。

初年度は本邦での受入研修、二年目は海外での現地研修と年度毎に事業に目標を設けノウハウの蓄積に努めた。五年度には研修事業のサイクル化を図るべくプロジェクト方式技術協力に挑んだ。

学卒のプロパー職員が二年目に加わり各部の人的構成は多彩になった。出向者の各々の企業文化や新人の若い息吹が混った討議の中で事務局の在るべき姿などを論じ合った。

カオスから生まれたヴィーナスもはたちの春を迎えた。関西のために不可欠な存在としてのこれからに一層の期待を寄せている。

一九九四年、中国専門家派遣にて（筆者 最前列）

ＰＲＥＸの設立資金集め

福田 哲也（設立準備室～一九九二年四月、ダイキン工業より出向）

ＰＲＥＸ設立準備事務局を皆木さん（三和銀行）、松田さん（ダイキン工業）、田浦さん（関西電力）、福田（ダイキン工業）でスタートしましたが、設立準備の中で資金集めが大変でした。「目標十億円」関西の主たる企業に寄付のお願いをいたしましたが、ただただ、関西経済連合会・関西経済同友会のネームバリュウには驚かされました。一担当である私福田が五千万円・三千万円の寄付をお願いにあがった時です。受付で名前を告げると立派な応接室へ、企業トップ幹部の応対、寄付の承諾、私が経験した企業の対応とは雲泥の差です。寄付を承諾いただいた企業に感謝・感謝とともに、関西経済連合会・関西経済同友会のすごさに感心した次第です。

一九九二年のＰＲＥＸ局内記念撮影より。前列右から酒井明子氏、東島氏、筆者、峰村専務理事、椋氏、田浦氏、佐藤氏。

原点はＰＲＥＸに在り

斉藤 ユカリ（一九九〇年六月～一九九三年九月）

太平洋の青で意匠された「人」は、差し伸べた協力の「手」を彷彿とさせる。このロゴ選びが行われたのは、私がＰＲＥＸに入ってすぐだった。寛容にも、社会人数日の私も一人前に参加させていただき、身が引き締まった。

当時私は、財団の使命や展望を熱く語り合い、高邁なる精神を鼓舞する雰囲気に酔いしれていた。一方、日々の仕事への姿勢や実務を厳しくご指導いただいた。出会った多くの方のお姿が、今でも鮮明に浮かんで来る。

ロゴの「手」は、青い私にも差し伸べられていたのだ。社会への第一歩をＰＲＥＸで踏み出せて幸せだったと感謝している。

バトンをつなぐ

安藤 二郎（一九九二年三月～一九九五年三月、東洋紡積より出向）

私はＰＲＥＸが設立された約三年後に研修部へ赴任しました。当時は三十代中半で、多くの責任のある貴重な経験をさせていただきました。諸先輩が苦労して作られたアジア・太平洋地域との素晴らしい人材交流というフィールドを精一杯走り、次の方にバトンを渡しました。その後十五年が経過しましたが、当時ご一緒したプロパーの方々が、今、管理職の第一戦で頑張っておられ、とても嬉しく思います。この二十年の歴史は、関西の産・官・学の協力はもとより、すべての人達が設立理念を胸に、バトンを確実につないだ努力の賜物です。現在は、不定期ですが、当時の諸先輩のお誘いで集まり、研修の懐かしい思い出話に花を咲かせています。

懐かしい局内旅行

握手でこんにちは

湯本 淳子（一九九一年四月～一九九三年七月）

設立二十周年おめでとうございます。

お世話になった方々、元事務所があった中之島センタービルからの眺めを懐かしく思い出します。私が勤務していたころは、携帯電話や電子メールが普及しておらず、ワープロで文書作成しファクシミリや郵便で送付していました。当時に比べると、業務がよりスピーディに便利にすすめられるようになったはずです。

しかし、そういう時代だからこそ「顔の見える交流」が大切なのだと思います。研修員にとって日本で触れることのすべてが貴重な体験になることでしょう。おもてなしの心で関西と世界各国の絆を深められますようお祈りいたします。

「青春」のＰＲＥＸ

山下 滋雄（一九九二年三月～一九九四年六月、住友金属工業より出向）

一九九二年に設立三年目のＰＲＥＸへ出向した。五十歳であった。しばらくして宇野会長から自著〝「青春」という名の詩〟を頂戴した。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。…年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。」というサムエル・ウルマンの詩は深く心に響き、宇野会長はこの詩でスタッフ全員に「仕事を創り、やり遂げるのは心の有り様」を示唆されたと感得した。当時のＰＲＥＸは、事業の骨格・財政・組織体制などの基礎の上に事業が生き生きと花を咲かせ始めていたが、試行錯誤の面もあり、「青春とは、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさし、人生の深い泉の清新さをいう。」を具現する形で仕事が進められていた。こうした中で、広報、共同研究などに携わったが、まさに「青春真っ盛り」の日々であり、ＰＲＥＸの出向は勤め人人生において最も記憶に残る期間となった。

古稀に向かいつつある私は今、居住地の枚方市で生活する外国人に日本語を教えるボランティア団体に身を置いているが、中・韓・比・越・米・加・独・伯などから日本へ来た人々と「理解し合うこと」を常に念頭に置いて接している。夕方からのレッスンを終えて、寒風の中を自転車で帰るとき、月や星に日本の国旗が外国で踏みにじられることの無いことを願う。そして年末には、第九やメサイアを唱いながら「平和」や「共生」を祈って一年を締め括る。これが、ＰＲＥＸを源にした今の私の「青春」である。

ＰＲＥＸがいつまでも「青春」であることを心から願う。

PREXの基礎固めと国際交流

村田 仙二（一九九三年五月～一九九六年四月、パナソニックより出向）

私は、一九九三年より九六年の間、松下電器（現パナソニック）からPREXへの二代目として出向し、企画情報部長、国際交流二部長を務めました。PREXの基礎固め、事業分野の開拓、受入研修・海外研修の企画実施、産官学やJICA等との折衝・日・英・中の三カ国語の機関紙発行、海外同窓会の立ち上げなどの諸課題に、各社からの出向者、プロパー職員が一体となって知恵を出し合い、奮闘しました。「APEC大阪会議開催記念APEC国際交流フォーラム」「中国経営指導者研修」「ロシア連邦極東地域市場経済セミナー」「中国専門家派遣」「関経連フィリピン使節団」「PREX設立五周年記念事業」等々皆で挑戦した事業が次々と思い出されます。

懐かしい五周年記念シンポジウム

玄道 文昭（一九九四年八月～一九九七年五月、パナソニックより出向）

私は一九九四年～九七年の約三年間、国際交流事業と海外広報を担当させてもらいました。とくに記憶に残るのは、九五年に設立五周年を祝い、ASEANの五カ国からPREX同窓会長を大阪に招き、みんなの力で記念シンポジウムを成功させたことです。新しい職場でも、「歴史街道」の海外広報活動を通じ、過去の研修員との交流を深めてきました。その後のPREX事業の進展には目を見張るものがあります。広報も同様で、協力企業特集や二十周年記念コラムといったタイムリーな新企画が登場し、担当される方の創意と工夫が光っています。PREXのさらなるご発展をお祈りいたします。

PREXが変えた私の人生

中川 清（一九九四年四月～一九九七年三月、三井住友海上火災保険より出向）

住友海上火災保険に入社して四年、私は最初の異動内示を受けました。赴任先は「社外・出向（太平洋人材交流センター）」…この異動から、私の活動の舞台が大きく変わっていきました。

経験豊富な出向者の方々と、意欲と知識を備えたプロパー社員に囲まれ、当初過ごした困惑の日々は、正に新入社員に戻った気がする毎日でした。しかしながら、大学や企業への訪問、また数度のタイ・ベトナム出張といった貴重な経験もさせていただくことができました。

帰任後は、国際部門（アジア担当）、シンガポール駐在員（現地法人取締役）をそれぞれ六年間経験。現在はグローバル企業を担当する営業部門に勤務しております。PREX勤務が、「田舎の担当者」を「グローバル社員」に成長させるきっかけを与えてくれたと思っています。

梅棹忠雄先生と「アメショー」の話

三田 昌孝（前専務理事、一九九五年四月～二〇〇七年三月、日商岩井より出向）

今年七月お亡くなりになった文化人類学者の梅棹忠雄先生が永らくPREXの評議員を務めていただいていたことを、今では知る人も少なくなったのではないでしょうか。私がPREXに出向したのが一九九五年、この年は阪神淡路大震災やオウム真理教のサリン事件等騒然とした出来事が続いた年でした。

梅棹先生は目がご不自由にもかかわらず、必ず評議員会に出席していただいたのが印象的でした。あれは何年でしたか、評議員をお辞めになる時に今迄のご厚情へのお礼と後任評議員の推薦をお願いをするために国立民俗学博物館に先生をお訪ねし、PREXの現状などをご報告しました。その中で、当時のPREXとしては新しい取り組みの「現地研修」の話題になった時、先生は「訪日研修」の大切さをご自身の経験になぞらえて説明されました。

自分は世界各地を回った時、事前に仕入れた沢山の知識を持っていてもその場所に立ち、そこの空気を吸い、その地の人達と交流することが新しい発見・理解につながるのだ。日本で培われた知識や経験は日本と云う環境の中で研修をしてこそ深く理解・吸収できると。研修員が日本の街を歩き、日本のものを食べ、日本の空気を吸ってこそ理解のできるものがあると云われた。最後に、俗に云う「アメション」にはそれ以上の意味があるのだよ…と。

※「アメション」と云う言葉は、今では死語になりました。興味のある方はGoogleで検索して下さい。

梅棹忠雄先生

研修員と共に学んだ二年間

正野　一太（一九九五年六月～一九九七年六月、関西電力より出向）

PREX設立十周年記念パーティにて。左から筆者、岡氏、田中氏、井上会長、池口氏。

一九九五年七月、それまで全く耳にしたこともなかった「太平洋人材交流センター」に出向を命ぜられ、「途上国への人材育成を通じた協力」という世界で二年間お世話になりました。

先輩職員のご指導をいただきながら何とか使命を果たせたかとは思いますが、私自身がPREXの研修事業を通じて学ばせていただいたことに大変感謝しております。

私が担当した研修はサポーティングインダストリーや品質管理の重要性をテーマとしたものが多かったのですが、座学だけでなく、研修協力いただいた企業の現場を見せていただいたことで、「三現主義」「SCM」等の言葉が一般的でなかった当時、その重要性を認識でき、任期を終えた後会社での業務に役立ったと思います。

PREXでの二年間は研修員と共に学んだ二年間でした。

PREXで研修を担当する喜び

柑本　亮（一九九七年四月～二〇〇〇年三月、三井住友海上火災保険より出向）

訪日研修を担当していたのがつい昨日のことのように思われます。研修日程も終盤に差し掛かったある日、夕食後、研修員たちが自主的に集まって昼間のセクションのレビューを行うと聞き、急遽参加させてもらったこともあります。お互いの英語が通じなくてじれったいのですが、ジェスチャーや筆談を交えたりするうちに白熱し、気が付いたら日付が変わっていたこともありました。研修が無事に終了し彼らが晴れやかな表情で帰国していったのを見届けヘトヘトになりながらも喜びを噛み締めました。

PREXの事業に従事させていただいたことは私自身にとって大きな糧となっています。皆様に心から感謝するとともに研修員たちの活躍、PREXの益々のご発展を信じております。

ベトナムへのニーズ調査にて。右から筆者、AOTSベトナム代表 富田氏。

心意気に燃えた国際シンポジウム

岡　誠（一九九五年六月～一九九七年五月、クボタより出向）

極楽鳥のラベルの付いたビールを飲みながら、眼下のランウェイを眺める。やがて真っ青な空から機影が現れ、これまた極楽鳥のマークの付いた垂直尾翼が地上に舞い降りる。タラップがかけられ乗客の姿が見え始める頃、やおら腰を上げて来客を迎えに丘を下る。ポートモレスビー空港でのひとこま。

見渡す限りのごみの山。異臭。地面は腐ってぬかるみ、四輪駆動車から降りられない。金目のものをあさる人々。全裸の子供たち。マニラの名高きごみ捨て場「スモーキーマウンテン」での衝撃。

私がPREXに在籍した一九九五～九七年、APEC大阪会議華やかなりし頃で、その名を冠した国際会議をいくつか企画開催しました。これらはそのひとつ「廃棄物処理」に関する国際シンポジウムの企画のために調査に訪れた国々での記憶です。普通の仕事では到底行けないような場所へ行き、インパクトのある体験をさせていただきました。その国際会議がどれほど世の中のお役に立てたかということについては、今から思えばはなはだ心もとないものがありますが、当時は心意気に燃えておりました。

企業派遣米国MBA留学を終えて帰国したばかりの私にとって、PREXでの業務は、仕事というよりは学生のボランティア活動かクラブ活動の感じに近く、なにやら現実感のない中で、自由な発想と無手勝流で、思うままにやらせていただきました。

ＰＲＥＸと私の第二の人生

深津　猛夫（一九九七年五月～二〇〇六年八月、三洋電機より出向）

研究所の技術畑から不思議の国ＰＲＥＸに出向したのは五十一歳直前の頃で、以来九年間の長きに亘りお世話になりました。前半は「インドネシア貿易研修センターのＪＩＣＡプロジェクト事業」担当で、これが自分にとって生まれて初めての外国人との人的交流経験でした。後半は受入れ研修担当でベトナム、モンゴル他色々な研修員との出会いがあり、また、ＰＲＥＸ内のＰＣ＆ＬＡＮ保守管理担当業務を兼務させてもらいました。ＰＲＥＸでの仕事に真剣に取り組めたことにより、定年後の現在、海外旅行にまた地元のＮＰＯ活動としてのＰＣ出張修理事業への参加と、自分の第二の人生を豊かにできております。ＰＲＥＸの二十周年を、心よりお祝い申し上げます。

研修員とともに

水を得た魚の境地ＰＲＥＸ

谷口　幹治（一九九七年六月～一九九九年五月、クボタより出向）

当時勤めていた会社の上司の一言が、私の仕事人生にとって最大の転機となった。大学でアジア文化（ベトナム語専攻）を学んだ私は、関西とアジア・太平洋地域の関係を国際協力で築く事業に携わることができ、水を得た魚の境地だった。ＰＲＥＸで得た二年間の体験の中でも印象に残るのは、海外技術者研修協会（ＡＯＴＳ）スキームでベトナムにて実施した国際会計基準研修だ。ぎこちないベトナム語で司会をつとめた際、ベトナム研修員数十名が向けてくれた親近感ある温かい眼差しを今も忘れない。先に相手に歩み寄り、理解しようと努める大切さを実感した。現在勤めるＡＯＴＳでも、ＰＲＥＸで得た初心を忘れずに、国際協力の仕事に取り組んでいきたい。

遠隔研修へのチャレンジ

森本　亮造（一九九八年一月～二〇〇二年一月、住友電気工業より出向）

私は一九九八年～二〇〇二年の四年間、ＰＲＥＸにお世話になりました。その間で一番エキサイティングだったのは遠隔研修へのチャレンジです。特に二〇〇〇年二月に行った大阪～バンコク～クアラルンプール間のマルチポイント型遠隔研修では、マレーシア訪問中の秋山・関西経済連合会会長やマハティール・マレーシア国首相のご臨席の下、オープニング・アナウンスメントをした際、やっとオープニングにこぎつけられた感動で、たった数行の言葉が出てこなかったことを鮮明に覚えています。ＰＲＥＸでのこの感動経験が、出向元に戻った後、ｅラーニングやＷｅｂコンテンツなどを制作する新事業の企画に大いに役立ち、それは今我が部署の一つの事業柱になっています。ＰＲＥＸの熱烈サポーターとしてＰＲＥＸの更なる発展を祈念してやみません。

二〇〇〇年二月大阪、バンコク、クアラルンプール間のマルチポイント型遠隔研修では、マハティール・マレーシア国首相に基調講演をいただいた。

総務経理部長
時代の筆者

PREX時代は貴重な経験

桑野 喜次（二〇〇〇年六月～二〇〇三年六月、関西電力より出向）

出向元に帰任させていただいた直後に生まれた子供も小学生になり、月日の経つのは早いなと感じております。PREX在籍期間中は、多くの研修を担当させていただきましたが、電気事業と直接関係の無い業務に携わらせていただいた三年間は、色々な意味で私にとって貴重な経験で、また良い思い出にもなっています。真冬のサハリンに行かせていただくという体験もさせていただきました。月一回送付いただく機関紙「PREX NOW」を拝読しておりますと、私の在籍当時と比べ、PREXの活動内容は一段と充実されているように思いますが、これからも着実に実績を積み上げられて行くことを祈念します。

三代目「金庫番」の回想

細江 守（一九九九年六月～二〇〇一年六月、三和銀行より出向）

PREXが設立された翌年、一九九一年から「日本の失われた十年」と称する超低金利時代に入り、各財団は基本財産の運用に頭を悩ますこととなりました。

PREXは、神田元会長のご指導の下、歴代総務経理部長の奮闘により、良好な運用状況を保ってきました。初代永渕さんは、定期預金から債券運用への切り替え。二代目新谷さんは信用リスク銘柄の回避。三代目小職はデリバティブ利用の仕組み債への一部シフトによる利回りアップ等、銀行員の特性を活かしたその時々の運用シフトにより最初の十年間で安全かつ高利回りの運用資産を構築しました。その後、三和銀行からの出向者は途絶えましたが、四代目現専務理事の藤田さんに運用原則を引き継ぎ、加えて専務お得意のコストカットにより財務基盤は磐石になりました。

良い基盤が残せたと、満足しています。

記憶に残る出来事

植田 真哉（二〇〇〇年十月～二〇〇二年九月、住友生命保険より出向）

晩秋、中東欧からの研修員たちを秋葉原に案内していた。私はよくコース外で研修員を連れ回した。私の役目は日本を伝えること。できる限り日本を見てほしかった。この季節東京の日没は早い。中央線のガード下から行く手を見ると、電気街の巨大なネオンが幾重にも重なって煌々と点滅している。そのとき、私の隣を歩いていた研修員がふとこんなことを言った。

「この街の電気がいま突然途絶えて、全ての明かりが消えたら、あなたはどのように感じるか」。すぐに質問の意味を理解できなかった。軽薄な照明に彩られたこの街が醜いと言いたいのか。彼は続けた。「私の街は、そういう状態だ」

その研修員はユーゴスラビア人、長い民族紛争が終わってまだわずかだったのだ。私は日本を伝えることに熱心なあまり、相手を理解することを忘れていた。それではいけない。PREXでの出会いから得た自戒のひとつである。

杉村先生とロシアを訪問（筆者右端）

ラッキーな社会人一年生

若菜 愛（二〇〇一年四月～二〇〇六年一〇月）

社会人人生の最初の五年半をＰＲＥＸで過ごし、その体験により自分の社会人としての礎が作られました。そのことを非常に幸運と感謝しております。

五年半で身をもって感じたのは、人々の善意が出会いと友情を作るということ。ＰＲＥＸの設立経緯はもとより、講師・企業・行政機関のボランティア精神に基づくご協力があってこそ研修事業が存在しています。そうして研修員と日本側が出会えば、そこでは必ず感謝と友情が生まれ、その思いは国境や言語の壁を越えて続いていきます。そのような温かな心に囲まれて仕事ができ、国内外に多くの友人を得た自分は本当に幸運な社会人一年生だったと思います。今後も、ＰＲＥＸの活動を心から応援しております。

マレーシア同窓会セミナーで帰国研修員に囲まれて（筆者 中央）

キヌア？白檀？

大塚 迪夫（二〇〇二年四月～二〇〇四年六月、住友電気工業より出向）

入局半年目に担当した「日本市場マーケティング」六カ国九名の参加で、これから日本に売り込みたい産品を携えての研修だったが、殆どの研修員が食品など日常生活に使う産品を選定されていて、これまで生産財しか経験の無い私に取って難題だった。研修員に日本人の好む「かぼちゃのホクホク感」を伝えるのに苦労したり、コーヒーや冷凍オクラ等の流通経路を必死に調べたりした。特にボリヴィアのキヌア、バヌアツの白檀にいたっては「これなに？」から始まり、毎日が新しいことへの挑戦だった。

食卓にオクラやかぼちゃが出てくると、当時の研修員のことを思い出す今日此の頃です。

国際協力は私の使命

山本 春江（二〇〇二年九月～二〇〇六年七月）

ＰＲＥＸで社会人としてのスタートをきり、途上国からの研修員受入事業、海外での研修実施に携わる中で、国際協力に携わることが自分の使命であると確信しました。

ＰＲＥＸを退職、留学を経て、現在は、民間のコンサルティング会社に所属し、中東、アフリカ地域でコミュニティ開発、地場産業振興に関わるプロジェクト等に従事しています。ＰＲＥＸで培った経験が自分の礎となっていることを実感する毎日です。

中央アジアの研修員とともに企業訪問（筆者左端）

ロシア研修を担当して

谷川 智章（二〇〇三年六月～二〇〇六年六月、関西電力より出向）

丁度、ロシア研修の準備をしているときに、たまたま、同僚のＳさんが研修員をひきつれて歩いているところに出くわした。研修員の面倒を見ている姿はまるで研修員たちの「母親（役）」を務めているかのようであり、「お母さんみたいやね」と声をかけると、彼女から「失礼やね。お姉さんみたいなもんよ」と言い返されてしまった。

よし、これを見習わせてもらおう、と、ロシア研修では彼らの日本における「お兄さん」のつもりで、彼らの希望に応えてみた。研修本体のほか、鎌倉散策、築地市場、歌舞伎座、京都散策、少林寺拳法、お茶会等々…。本当にバタバタの三週間であったが、帰国間際の彼らの満ち足りた表情が今でも印象に残っている。

自分でできることは何か

秀島 正文（二〇〇四年七月～二〇〇六年六月、住友電気工業より出向）

ＰＲＥＸ二十周年おめでとうございます。

海外との人材交流の趣旨のもとに活動を続けられ、まさに継続は力で実効を積み上げられていると思います。日常的に、私の周囲でも海外からの労働者や留学生の受入れなどのボランティア活動といった海外との交流も盛んです。経済活動でのこの二十年の激動に比べこのような地道な活動の重要性を実感しています。自分でできること、自分の経験を役立てられるところは、を模索しながら日本で誇れるものはものづくりとの思いを強く感じています。自信をなくしつつある日本から発信できることは何か、自分でもできることは何かを考えながらＰＲＥＸの活動を見守りたいと思います。

懐かしい中東地域との交流

深田 進（二〇〇五年十二月～二〇〇九年十一月、パナソニックより出向）

設立二十周年おめでとうございます！

思い起こせば二〇〇五年十二月一日、パナソニックでのエジプト勤務を終えて、帰国着任した新天地がＰＲＥＸでした。

当時は、中東地域からの研修員の参加は数カ国の研修員が参加する集団研修しかありませんでしたが、その後中東の国、地域のみを対象とした研修事業の実施で研修員数も増加。片や、中東市場は出向元では専門だっただけに、エジプト始めイスラム圏との付き合いがビジネスから人材育成へと目線が変わり、新鮮な喜びを感じる日々でした。グローバル化の今、ＰＲＥＸがさらに海外に活躍の場を求めて雄飛する時代とも言え、今後のご発展をお祈りいたします。

インドネシア同窓会セミナーにて。同窓会長を囲んで（筆者前列左端）

伝える方も、学ぶ方も一生懸命

武居 毅（二〇〇六年七月～二〇一〇年六月、関西電力より出向）

私が在籍していた当時、関西の特徴を活かすべく、中小企業振興関連研修が増設された。当然のことながら、訪問する企業の数も増えることになったが、印象に残っているのは、どこの町工場の社長さんも研修員にとても熱心に語ってくれたこと。このような熱い情熱でＰＲＥＸは支えられていることに感動するとともに、ここまでＰＲＥＸの信用を高めてくれた先輩の方々の努力に感謝の念を禁じえない。伝える方も一生懸命、勉強する方も一生懸命、この橋渡しをしているＰＲＥＸで働いていることに大いに誇りを感じた。

「関西にとってなくてはならない存在になる」ことをＰＲＥＸは目指しており、関西で培われた技術・ノウハウを途上国の発展に活かしていくのは、まさにこのことだと実感し、充実した気持ちで研修に取り組むことができた。ＰＲＥＸのこのような役割は是非とも続けていってもらいたいと心から願っている。

プロパー職員の皆さんへの期待

福島 陵史（二〇〇七年四月～二〇一〇年六月、西日本電信電話より出向）

ＰＲＥＸでの三年間で印象に残るのは、プロパー職員の皆さんの途上国支援に対する真摯な姿勢です。企業に復帰してからも、皆さんとの交流は私の大切な財産となっています。私が出向した二〇〇七年のプロパー職員の管理職は、一名だけでしたが、現在は四名となり、管理職以外の皆さんも経験を積んでとても頼もしくなりました。これまでＰＲＥＸの事業運営は、出向職員等の企業経験者が中心となり支えてきましたが、将来はＰＲＥＸとともに成長したプロパー職員の皆さんがその役割を担うことになると思います。ＰＲＥＸ設立二十周年の発展をお祝いするとともに、次の十年がプロパー職員の皆さんの飛躍の時代となることを期待しています。

私のＰＲＥＸ

井上 久生（ＰＲＥＸシニアコースリーダー）

ＰＲＥＸで研修のお手伝いをするようになってから、今年で満五年になります。

きっかけは二〇〇三年にＪＩＣＡの長期専門家として赴任する時でした。帰国してからシニアコースリーダーとして、最近はマレーシア関係の研修を担当しています。四年間の現役時代の現地勤務の経験を買われているようです。

六十七才になっても、心身とも健康で社会のお役に立てるのは、有難いことです。この気持ちを忘れずに、今日もマレーシア公務員研修のお手伝いに励んでいます。古希を迎えるまでは、頑張ろうと思っています。

更なる成長を目指して

奥村 玲美（国際交流部コースリーダー）

今年で入局して四年目を迎えます。入局以来短い月日しか経っていませんが、ＰＲＥＸの設立二十年目という節目に出会えたことを嬉しく思います。ＰＲＥＸを通じて、プロパー職員や企業からの出向者、企業、大学、自治体などの様々なセクターの方々にお会いすることができました。もちろん途上国の研修員には格別の想いがあり、大切な友人たちです。この四年間は多くの人に出会うことで自分自身が成長することができました。今後は更なる成長を目指しつつ、途上国の人材育成に私が得たものを還元することができたらと強く思っています。

ピンチをチャンスとして捉えよう！

尾上 暉隆（事務局次長兼総務部長、二〇〇二年四月～二〇〇六年九月、大阪ガスより出向）

二〇〇二年四月にＰＲＥＸに来てから、早や九年近くが経過した。当時は研修件数は、二十数件で海外研修も少なかった。有能な人材が多くいたことから、もっと多様な研修ができるのではないかと思い、ＪＩＣＡ以外の研修、ＰＲＥＸから企画提案して受託する研修、自治体と連携する研修、補助金制度を使った海外研修等の増加に尽力してきた。その甲斐もあって、研修数はほぼ倍増できた。しかし最近は、事業仕分けの影響も受けて、今後は研修事業数は減少することが想定される。

一方では、二〇〇二年三月当時は、百三十円／ドルであった為替レートが、八十五円／ドル程度となっている。このため基本財産の運用益が大幅に減少しており、事業運営が苦しくなってきている。

今後当面ＰＲＥＸには、苦しい時代が来ることが想定される。しかし、新しいことをやれるチャンスだと捉え全員一丸で努力していくことが大切だと思う。

食品会社出身の特性と知恵を活かして

大西 正機（国際交流部　担当部長、サントリーホールディングスより出向）

ＰＲＥＸに来てはや二年。振返れば国内営業一筋にきた私が、五十歳半ば過ぎてから国際交流部と書かれた名刺を授かるとは思いもよらず、不安と戸惑いを感じた事を昨日のように思い出します。多くの研修に参加する機会に恵まれ、様々な国の研修員と接して国情も知り、また異なるカテゴリーの方々と数多く知り合う事ができました。世界観や業界の広がりは新聞紙面の関心記事の広がりと合いマッチし、ＰＲＥＸが携わっている業務の重要性を、いま改めて痛感しております。食品会社出身の特性と知恵を活かし、今後も精一杯頑張ってみたいと思っております。

縁に導かれ

折井 耶澄（国際交流部　コースリーダー）

私とＰＲＥＸについて考えた時、「縁」という言葉がぴったり当てはまります。大学では国際関係を学んでいましたが、就職先としてこの分野を志望していなかった私がＰＲＥＸで働いていることについて、入局して三年が経とうとしている今でも、ふと不思議に思い、違和感を感じるとともに、「これまでの私の経験・知識は、この場で活かすためにあったのだ…」と思わずにはいられない場面があまりにも多く、びっくりすることもしばしばです。周りで支えて下さっている方々への感謝を忘れず、この不思議で素敵な縁を大事にしていきたいと思っています。

初めて担当した「中東観光セミナー」の研修員と（筆者 前列左端）

ＰＲＥＸと私

加藤 寿郎（国際交流部　担当部長、住友電気工業より出向）

ＰＲＥＸに来てから二年半余りの間に既に四十二カ国、百八十名余の訪日研修員と同行をした。ＰＲＥＸに来る迄はとても考えられなかった出逢いだ。名簿や訪問写真を捲って見ると、伝え切れなかった事、案内が至らなかった所が思い浮かび反省ばかり。次の研修プランで必ず穴埋めすると発起し、新しい研修員を迎え、帰国後の活躍を夢見ながら、支援協力していただく企業に今日も無理難題をお願いする日日是好日。

先輩が作り上げたＰＲＥＸの文化を大切に

北村 圭（国際交流部　コースリーダー）

将来国際的な仕事をしたいと考えていた私は、大学のキャリアセンターでＰＲＥＸの求人票を見つけ、興味を持った。一度事務所に訪問すると、職員の方（現在の先輩）が目を輝かせながら、ＰＲＥＸの仕事や自分が担当している中央アジアのことを話してくれた。この職場で働きたいと思い、ＰＲＥＸの就職試験に臨んだことを今でも覚えている。ＰＲＥＸの仕事は、成果が見えにくく、高いモチベーションを保ち続けることが難しいと感じることもある。そのような環境の中で、入局から二十年後も目を輝かせて自分の仕事について話せる先輩は素晴らしいと思う。私も先輩が作り上げたＰＲＥＸの文化を大切にしていきたい。

インドネシアＪＩＣＡプロジェクト

甲村 昌二（ＰＲＥＸシニアコースリーダー、一九九七年一月～二〇〇二年三月、トーメンより出向）

二〇〇〇年、ジャカルタにてインドネシア貿易研修センター職員の皆さんと（筆者 右端）

ＰＲＥＸからＪＩＣＡの長期専門家として一九九七年三月から二〇〇二年二月までの五年間「インドネシア貿易研修センター」の運営改善案件に派遣されました。

ＰＲＥＸの全面的支援のお陰で貿易研修センターも隆々と自立できるようになり、日本側・インドネシア側双方からも高い評価を得ました。そして、数少ない「ＪＩＣＡ理事長賞」をも授かりました。ＰＲＥＸの全面的サポートには感謝・感謝・感謝です。

この研修センターの職員が国内の他の都市の輸出促進センターの幹部として、また大阪を含め諸外国のインドネシア貿易促進センターの所長として活躍し続けているのもＰＲＥＸからの絶大なる支援の賜物です、支援の炎は未だに消えることなく燃え続けています。

ＰＲＥＸに感謝をこめて

酒井 明子（国際交流部　担当課長）

私はＰＲＥＸが初めての職員募集を行った年に就職しました。当時はバブル景気只中で、条件のよい大企業に就職するか、自分のやりたい仕事に就くかで随分悩んだのを覚えています。結果的には、自分のやりたい仕事を優先させ、現在に至っています。仕事を通じて、多くの人と出会い、いろんなことを学び、お蔭様でいくらかは自分を成長させられたのではないかと思います。二十周年を迎えたＰＲＥＸをこれから更に成長させるために、微力ながら貢献できるよう今後も精進いたす所存です。

雲南省の少数民族の女の子と筆者（右）

NEXT DECADE

末尾 寿広（国際交流部　担当部長、関西電力より出向）

私は、まだＰＲＥＸでお世話になって三カ月の若輩者で、これから「ＰＲＥＸと私」と語ることができるための努力を積み重ねていく、まさにスタートラインに立たせていただいたところでございます。ＰＲＥＸの輝かしい二十年の歴史にいくばくかでも付加価値をプラスし、〝ＮＥＸＴ　ＤＥＣＡＤＥ〟に寄与して行くことができれば幸いと考え、途上国からの研修員とすごす日々に充実感を覚えております。

ＰＲＥＸは自分を育成する場

菅原 宏（国際交流部　担当部長、ダイキン工業から出向）

ＰＲＥＸは非常に多くの方々と出会える職場です。幾多の困難を乗り越えてこられた経営者の方々、豊富なビジネス経験をお持ちの企業ＯＢの方々。その方々の物事の捉えかた、人との接し方など私にとっては素晴しい手本です。一方、局内で若手・中堅プロパー職員とチームを組んで仕事をする際は本人にどれだけ考えてもらえるかを常に意識しています。その際自分とは異なる考えでもまずしっかり受け止めることが大切です。いかに自分が偏った見方をしていたか思い知らされる毎日です。

定年後の方向大転換

稲本 治朗（ＰＲＥＸシニアコースリーダー、二〇〇六年七月～二〇〇八年五月、住友電気工業より出向）

製造会社で工場管理を中心とした仕事に携わっていたが、定年まであと二年の時点でＰＲＥＸにお世話になることになった。それまで世界が限られていたこともあり、何もかも新鮮で、一気に視界が拡がった。研修員との交流や研修の中身は、私にも新たな財産となっている。そして最大の収穫は、多彩で個性的な素晴らしきＰＲＥＸメンバーとの出逢いである。仕事は勿論、連夜のちょっと一杯や盛り沢山の行事やらで、実に魅力的な職場である。以前は定年を過ぎてまで働く気が皆無で、趣味の世界に埋没するつもりであったが、ここならもう少し続けたいという気持ちに傾いて来た頃、お誘いも頂戴したのでシニアとして契約させていただいた。その後二年余、お陰様で充実した定年後の生活を送らせていただいている。という訳で、ＰＲＥＸの末永い発展を祈りたい。

日本人の真心を世界に

末利 銕意（ＰＲＥＸシニアコースリーダー、一九九三年五月～一九九五年六月、大阪ガスより出向、テス・リサーチ代表）

私がお世話になったのは創生期の一九九二年からでしたので、研修依頼を受けるためにＪＩＣＡ茨木研修センターや本部に日参しました。旧ソ連邦諸国からの研修員受入れのため外務省にお願いに行き成功したこと、中国出張時に北京の科学委員会に立ち寄り、情報収集したこと、本間正明阪大教授と地域開発専門家として成都、上海で講演したこともありました。受入研修では、近畿の多くの企業経営者の方々のご協力で日本的経営の実例を紹介いただきました。定年後、会社を設立した後にもシニアコースリーダーとして再びお世話になりました。ＰＲＥＸは世界平和に大きく貢献しています。日本人の真心（和をもって尊しとなす）を世界に広め続けてほしいと願っております。

ウズベキスタンの研修員から記念品を受ける筆者（左端）

世界の距離

関野 史湖（国際交流部　主任）

ＰＲＥＸに入ったきっかけはまったくの偶然。国際支援に大きな関心もなく、試験を受けたとき、一番に受かった方が辞退され偶然順番が回ってきたのだ。入局後、周りの熱意あふれる職員の方とのギャップを感じつつ必死でついていった毎日だった。そんな私でも気がつけば、世界地図を見、災害、動乱のニュースに「あの人大丈夫かなぁ」と考えるようになった。ネットでみる「世界」と、研修で会ったあの人のいる「世界」はこんなにも距離が違う。これを学んだのはＰＲＥＸの仕事だった。

PREXのDNAを大切に

瀬戸口 恵美子（国際交流部　担当部長）

私の社会人生活は、総務部の一員としてPREXを縁の下から支える事からスタートし、PERXという組織への理解を深めることに繋がった。研修部では新たなテーマや地域について、知識やネットワークを広げ、事業を作り上げることの面白さ、協力いただく方々の姿や、研修員からの感謝の言葉が原動力となり、二十年目に至っている。今後も専門家の皆さんの力を借りながら、常に新しい何かにトライし更に次のステップに進む、というPREXのDNAは大切にし、引き継ぐのが私の役割だと思っている。

二〇一〇年三月、コースリーダーの先生方とキルギスを訪問（前列右端が筆者）

同じ目的に向かって

高島 希代子（派遣職員）

それは研修初日のオリエンテーションでのこと。「英語は私にとって第二言語なので、もし失礼な表現をしたとしても、決して悪意はありません」とPREX職員。円滑な運営のための智恵と思いやり。すぐさまアフガニスタンの研修員が「みんな英語は第二言語だから大丈夫」と声をかけ、別の研修員が「あなたの英語はとても綺麗だよ」と優しくフォロー。

PREXは、国籍・民族・宗教・イデオロギーなどを越え、同じ世界の一人の人間として、共に夢を実現させていく素敵な場所。その一員として働かせていただけることに感謝しています。

PREXの更なる繁栄とここから始まる世界の幸福を祈りつつ。

研修の持つ可能性

髙山 真由子（国際交流部　コースリーダー）

特に印象に残っているのは一年目の「南アフリカ貿易促進研修」だ。研修最終日、「アパルトヘイトは撤廃されたと言われるがまだ残っている。現に私達はこうして分かれて座っている」という黒人の研修員の発言をきっかけに、それまで常に二手に分かれて行動していた黒人と白人の研修員が自国をよりよくするためにどうしたらよいかを話し合い始めた。貿易促進というテーマを超え、日本という異国だからこそ実現したのであろう対話。研修の持つ可能性を強く感じた出来事だった。

ローカルな対応

井上 順（PREXシニアコースリーダー、二〇〇三年四月～二〇〇八年三月、サントリーホールディングスより出向）

昨年アラビア語にコップの水も煮えたぎる季節という表現もある八月の夏の盛りに機会があってドバイとイスタンブールを訪れた。丁度ラマダンの月にあたり訪問できない施設もあったが、ムスリムの人たちの真摯に断食に取り組む姿をかいま見ることができた。

旅行者として現地での生活の注意事項をしっかり受けたが、暑さを除けば快適に過ごすことができた。

翻って、PREXの研修事業を考える際に、研修員を日本に迎える時には研修運営側として、彼等の国の事情や取り巻く状況を充分に理解すること、また、研修中彼らが心置きなく滞在できるように、日本での生活の実情をしっかり説明して納得してもらう必要がある。研修目的の一つである相互理解の促進は関係者の手間ひまをいとわない努力が必要だと確信した。

次の三十周年に向け更なる発展を！

竹澤 嘉雄（国際交流部　担当部長、パナソニックより出向）

企業経験三十六年の私にとってはＰＲＥＸの存在は初めて体験するとても新鮮なものでした。

出向辞令を受け取ったときは〝なぜ私が〟との思いもありましたが、実際ＰＲＥＸに出向になり、その設立の趣意やプロパー職員の前向き且つ切磋琢磨する姿に接し感動すら覚えた次第です。我々を取り巻く環境は激しく変化していますが、変化対応力を高め、途上国のニーズに合致するシーズを研修プログラムにタイムリーに取り入れることにより、ＰＲＥＸの更なる発展に全力を尽くしていきたいと思っています。

私にとってＰＲＥＸとは

中島 美貴（派遣職員）

こちらにお世話になって三年目に突入。こんなに長くお世話になるとは夢にも思いませんでした。

今までの働いてきた中で、私にとって衝撃の一言でした。何が衝撃というと、海外から日本に学びに来られたりする点です。各企業や団体に行かれ見聞きし、ノウハウを学ばれるということです。今までにそのような事業があったとは知りませんでした。

私は、研修に直接関わる機会はありませんが、これからも皆様のお役に立てるように頑張りたいと思います。

営利・非営利共存をこれからも

西阪 三友紀（国際交流部　コースプランナー）

ＰＲＥＸに入局したのは、ちょうど二年前です。非営利組織での仕事を志していた私にとって、ＰＲＥＸの職場は大変魅力がありました。社会の安定・向上のために、日々利益を産み出す民間の取り組みと、人々を支える社会、特に関西地域や世界への恩返しをするという非営利の取り組みが共存している職場だからです。皆様の後押しを得ながら、年間五件の案件を担当し、三十二名の専門家、百十二件の企業・団体、二十一カ国からの研修員と一緒に仕事をさせていただきました。この数字を振り返り、皆様方のご協力なしには、ＰＲＥＸの活動は続けられていないことを実感し、感謝申し上げる次第です。

社会に発信しなければ何もしていないのと同じ、存在していないのと同じ

西本 政子（総務部　主事）

広報担当の私にとって、自らの仕事の責任を突き付けられた言葉です。ＰＲＥＸの研修事業は、ひとつひとつが職員の思いのこもった「手作り」。職員は、研修のあるべき姿を一から考え、それにふさわしい訪問先を選び、研修が始まるとあらゆる配慮で、研修員の理解を助けます。ともに働く職員のその汗と熱意を無にしないために、真剣に情報発信に取り組まなくてはと強く思うようになりました。関西を拠点にひたすら前進を続けているＰＲＥＸが、たくましく、愛される組織であり続けるように、役割を果たしていきたいと考えています。

私なりの小さな貢献

古本 和美（総務部　担当課長）

入局以来、なかなか外部の方々と接する機会はありませんでしたが、知識や経験豊富な出向者の方々からお話を聞くことや、志の高いプロパー職員と接することは、仕事をしていく上でとても刺激になりました。私もＰＲＥＸに少しでも役立つよう、入局当初から総務・経理にかかる人やコストはなるべく抑えて、その分事業に回せるようにと考え、税務申告も自力でやり、できる限りの仕事を担当しました。これには結果的に少し無理もありましたが、これからも、入局当初のこのような思いを忘れず、ＰＲＥＸが大切な財産を無駄なく活用し、事業に邁進できるよう、努力していきたいと思います。

ベトナム人の問いかけ

三浦 佳子（国際交流部　担当課長）

ＰＲＥＸの仕事の難しさと面白さを教えてくれたのは、入局して三年目に担当したベトナム経済運営管理コースの研修員だった。担当が決まってからは、「ベトナム」と聞けば、どんな書籍も論文も読み、セミナーに駆けつけ、専門家に話を聞いた。自分なりにベトナムの課題を理解し、その課題解決のヒントとなる研修にしたつもりだった。しかしベトナム人研修員の反応は違っていた。そう、「ベトナム人」を理解していなかったのだ。以降、常にベトナム人が私に問いかける、「あらゆる角度からベトナムを見ているか、ベトナム人を理解したか」と。

ＰＲＥＸのたからもの

村瀬 孝次（理事兼事務局長兼国際交流部長、大阪ガスより出向）

四年前の入局時、女性職員の情熱と笑顔に魅せられたことを思い出す。

今改めて国際協力で大切なことは何かと考えた。国際協力に対する「熱いハート」。自主・自発の心が必要とされる。次には「現地感覚」。何よりも相手国を理解することが大切だ。それも文化、歴史、国民性まで。訪日研修での訪問先の現場感覚を持つことも同様に大切だ。そしてＰＲＥＸの仕事に陰に陽に協力してくださっている多くの人々への思い遣り。これが「コミュニケーション」の基本である。感謝で始まり感謝で終わる。

女性職員は全員「熱いハート」を持って入局してきたものばかり。「現地感覚」は経験で補うことができる。あとは人を思い遣る「コミュニケーション力」を磨き、成人式を迎えたＰＲＥＸの「中核（コラソン）」となって国際協力に邁進してもらいたい。

女性職員はまさにＰＲＥＸにとってなくてはならない「たからもの」だ。

有効なパスで人と人、国と国のとの架け橋を目指して

森本 正人（国際交流部　担当部長、西日本電信電話より出向）

私たちの仕事をサッカーに例えると、有効な「パス」を出すために何をすべきかということが求められているような気がします。上手くパスを出すには相手の動き、味方の選手の能力や特徴を考慮して、パスを受けた選手が次のプレーに繋げやすいような位置を瞬時に見極め、正確にボールを蹴りだす技術力が求められます。様々な分野の方の声に耳を傾け、その技術力を養っていきたいと思います。

ＰＲＥＸの設立当時とは世界規模で環境が大きく変化しています。次の時代を見通し、私たち自身が日々変革を求め続け、活動していきたいと思います。

私にとってのＰＲＥＸ

山口 由紀子（派遣職員）

ＰＲＥＸでの経験や出会いは私にとって大きな財産となっています。入局するまではＰＲＥＸの活動を知らなかった私ですが、ＰＲＥＸを支えて下さっている多くの方々を目の当たりにし、皆が一生懸命でその熱意に感銘を受けました。

帰国後研修員が日本で学んだことを実践し活躍しているのを聞くとＰＲＥＸの一員であることを誇りに思うのと同時に、二十周年という記念すべき年に携わることができ喜びを感じています。今後もＰＲＥＸの活動を通じ自分自身も成長していけるように多くのことを学んでいきたいと思っています。

縁

藤田 賢次（専務理事、二〇〇一年七月～二〇〇七年五月、ダイキン工業より出向）

一九八四年四月、二年間出向していた大阪二十一世紀協会から帰任し、与えられた仕事のひとつが関西経済同友会の太平洋委員会のスタッフ業務であった。ＰＲＥＸ設立のきっかけになった「太平洋・アジア調査団」を派遣するといった仕事であった。その後、ＰＲＥＸの設立につながるＰＥＣＣ大阪総会、設立準備委員会幹事会などの雑務のお手伝いもし、多くの方々とのご縁ができた。「太平洋・アジア調査団」の団長を務められた、当時の関西経済同友会代表幹事の神田延祐三和銀行副頭取（ＰＲＥＸ初代副理事長、二代目会長）、アドバイザーの蝋山昌一大阪大学教授、副団長の井上義國ダイキン工業常務（ＰＲＥＸ二代目理事長、現会長）、平木英一サントリー常務、松下滋三和銀行調査部次長をはじめ、団員として参加された関西主要企業の先輩の方々などである。

ＰＥＣＣ大阪総会の準備、ＰＲＥＸの設立準備を進めているときは、推進役を担われたダイキン工業の山田稔社長（ＰＲＥＸ初代理事長）の薫陶も受けた。関西経済同友会の萩尾千里常任幹事・事務局長、三和銀行の皆木武久調査役などの手伝いもさせていただいた。

このようなかかわりの中で、ＰＲＥＸの設立に関与された関西経済界の先輩方の高い志と、地域発展への熱い思いに接する機会に恵まれた。

十年前、ＰＲＥＸに出向し、現在に至るまで運営に携わることになった。つくづく縁というものを実感している。ＰＲＥＸにおいても、数多くの関西の産・官・学の方々、各社から出向で来られた方々、シニア人材の方々、ＰＲＥＸの女性職員とのご縁ができた。また数多くの気概を持った途上国の人々とも出合った。近い将来、ＰＲＥＸが途上国にとっても関西にとってもなくてはならない存在になることに、少しでも貢献できればと願っている。

一九八八年、「太平洋・アジア調査団」で訪れたカナダ、バンクーバーにて調査団一員と記念撮影（筆者前列中央）

PREX現職員

高島希代子さん
北村 圭さん
山口佳紀子さん
井上久生さん
森澤恵美さん
小野さん
三浦佳子さん
2010. 11. 26
YO